里見八犬傳 拾二編 巻十ノ

特別
へ13
4304

ヘ13
4304
13

曲亭翁編輯

八犬傳第九輯下帙之中

柳川重信畫

江戸書林文溪堂精刊

〈2001-315〉

南總里見八犬傳第九輯下帙中巻第十九簡端贅言

本傳は文化十一甲戌年第一輯五巻を綴り創るより今茲天保八丁酉年に迫りて幸慮二十四の春秋を歴る。其間作者の腹稿或は流行に據り或は昨の我に厭て趣を日易文を異にして體裁同じからざるもあるべし。そは何ぞとなれば始は只通俗を旨として綴る故に敢て奇字を以せざるの故に行毎に假名を多くし。真名寡し。六七輯に至りては拙文唐山の俗語を抄録載て且意訓をもて彼義を知あむ。要るに所為に似れども世に獨学孤陋を唐山の稗史小説を讀まく欲する諸生あらば。其が筌蹄とし思ふ作者の老婆親切なるあるをもて行毎に真名ヨマクをもて字の數さ覚ぎ始に弥増さる。抑曲学者に要るに書を好きヨマク綴るる余が如きを世文の半表半裏の筆に成れるを知ざるにあれども畢竟文字を婦幼の弄びとするを技にあれば故に風流たる草子物語に取て吾師に倣ぶもあれども又彼唐山の稗官小説の大筆にして奇絶なるもの文に摸擬に要るべし。然ども坊間に寫本を多くして軍記復讐録の類るに俗の看官もまたあ

饗庭文庫

文溪堂蔵

べく。余も素より綴ずく欲せざるの故ふ五言文へ枉て雅るゝ俗るゝ又和もあるゝ漢もあるゝ駁雜
杜撰の筆とゝ漫ふ綴り創りより世人謗りて遐げ棄ぜそ中ふ本伝ハ甚う時好ふ稱ひく
憶ぞ一百四五十回の長物語ふ做るふけ。ゝゝ年來五吾机案上の子夫ゝ怒ふ切磋琢磨せ
る自得の戲墨なるのゝかくの如くふあるぞれ唐山る稗説の趣を寫ふ由ゝ然ばゝ彼ハ文
華の囮るれ俗語とゝ云ども出処ありて乘恣字義ふ稱ひ。但正文と異る所以ハ用同じかゝ
ゝあり壁言ハ正文ふ慚愧とゝへ即恥る義るゝ俗語ふ且亦ゝとゝ義ふも用ひゝ又子夫ハ考
索思量の義るゝ俗語ふ空虛閑暇の義ふ工ハ空の省文ゝ夫ハ助語るれ即空ゝ考
ゝ俗語の和訓ハその処ふよりて異同あり然るゝ原を極めゝゝ見問ふ抄録ゝる俗語ゝ
取用ゝハ大く義理の違ふとあり筆の次ふひとの二ハゝ水滸西遊るゝ在を於の如く像ゝ如ゝ
似のゝ則ゝ唯のゝく讀ゝハ其文ふ法則ふ叨用ふゝ似ゝ讀て如ゝ生るハ似飛ふ涯ゝ
則ゝ讀て唯のゝくるハ不則一日ふ涯ゝ像ゝ讀て如ゝ生ども如ゝとゝふふ用ゝ況教の轉

ゝ叫ふ做る。激ハ尿の轉ゝ鳥ふ喪る時ふ曰ふ。底の轉ゝ地ゝ做ゝ又轉ゝ的ゝ一朝ふ
解盡ゝ云ども我 大皇國ハ邈古の久ふゝゝ言魂ゝ宗ゝ文字の製度ゝ
ゝふ。應神天皇の御時ふ初て漢字ゝ伝ゝ後の世ふ至りて人の詞ハ漢ゝ源氏物語ゝ
ゝ音訓ゝ仮ゝ文ハ後々ふ和漢駁雜の文章の必ず來ゝ數ゝ 太平記ゝ
ゝ又一轉ゝ假名文ふ唐山の俗語ゝ諳記の隨取用ふ。余ゝ文ゝ國学及漢学の博
士達倘ゝ眼ふ觸るゝもあゝ其の駁雜ゝ嘲嘲ゝ云云ゝゝ遮莫唐山ゝ俗語の
綴る書ふ正文ゝ方言ゝゝ用ゝ又儒書方書佛教ハ正文ゝ者ゝ
ゝ中ふ俗語ゝ二程全書朱子語類俗語ゝ綴ゝ奇功新事傷寒條辨虛堂
錄光明藏の類ゝ先輩既ふ辨ゝ佐ゝ彼ゝ文華ゝ言魂の資ゝ借ゝ
文ゝ成ふ如意ゝ引亦 大皇國の文章ハ和漢雅俗今古の差別ゝ然ゝ今文場ふ
遊ぶ者孰ゝ貫通せゝ難ゝ。意ふ古昔の草子物語竹採宇通保源氏

物語ども作者勉てその詞をあるぶ撰てゝ綴れるゆゑあるべし。必是當時大宮人の賞語方言さへぞ隨ふ載られど古言いかゞゝ鄙俗ゝも宜嬪の詞あり雅俗ゝち任しゝるもあれど海人藻木及真淵の甘結さへしきりぶ。才子才女いその品殊也且能文の所為れば後世和文の山主ゝ倩れば其草子物語の此ふも俗語ゝて綴れるゝ思べし。和漢文異れども情態ゝとゝく寫ゝ出ゝて其趣ゝ盡せる者俗語ゝ成ゝと難ふ。彼我同く一揆ゝ然ゝと今此間の俚言俗語の轉訛俗離の甚ゝ多ゝ儘文ふゝ綴ゝ余ゝ駁雜の文あるゝの俗離鄙俗を遺れんとゝ考ふ近世建部綾足ゝ西山物語及本朝水滸傳（名吉野物語）ゝ古言ゝと綴るゝ就中本朝水滸傳ゝその趣爭珊理本ゝ考ふ似ゝる條あゝて今の俗語ゝ出ゝ好ふ稱ゝ僅ふ二編ゝ果ゝ出ゝけり。第二編ゝ寫ゝ本ゝ使。又村田の公翁ゝ琉志船物語ゝ今古奇觀第二十六ゝ桑小姐忍辱報讐（柏案驚奇ふ此と相似ゝ物語）ゝ云ふ一編ゝ。皇國の故事ふ翻案ゝと古言ゝ綴（其益別話）ゝ文同ゝ然ゝも能文の所為れば必初學の為ふ資助ゝ多ゝ惜むべゝ翻案半分ゝ

雖損を易ゝ。人ふ續ゝ者あゝ。原本の局ゝ果ゝ。吾一知音ゝ咳ゝけり。その國學者流ゝ且和漢の稗史ゝ愛ゝ餘力ゝれば。その書ゝ知ゝ多ゝ。廣ゝ世ゝ勸懲ゝ上ゝ書讀ゝ好ゝ世の婦幼ゝ讀ゝ余ゝ如ゝ。ゝ稗官野乘ゝ部事ゝ好ゝ思ゝ本傳結局遠ゝ。百年以後の知音ゝ俟ゝ今ゝ後の嘲噱議論ゝ解ゝ。黄白の木犀花馥郁ゝ南檐の下ふ者ゝ著作堂の癡老

蓑笠漁隱

附て云前板第九輯下帙の上ふ卷毎ふ校訂の送漏あり書賈ゝ發販せ後ふゝを出ゝ因ゝ左ふ録ゝ。送忘ふ備ふ。

○前板第九輯下帙の上（十三丈十四より十八の巻ふ至る）五卷重訂追録（是より下の第六頁端像の左ふ續ゝ。驗ゝ）

南總里見八犬傳第九輯下套中摠目録　四版集第九

巻第十九

第百二十六回　假捕使三路行兵　義兄弟兩林懲惡

第百二十七回　大庵尼親兵衛喪伴　石菩薩前信乃悟應報

巻第二十

第百二十八回　犬士露宿迎追隊　老僧褰袱示冥罰

第百二十九回　忠僕事死靈佛起本　孝子去京傳燈法脈

巻第二十

第百三十回　里見侯白濱葬旅櫬　大法師穗北果客情

巻第二十一

第百三十一回　八行靈玉光增良主　九歳神童氏請花營

巻第二十二

第百三十二回　金碗無後要有後　姥雪失望反遂望

巻第二十三

第百三十三回　哄客船水冤鬼沽酒　没波底海龍王刺仁

第百三十四回　苛子海中與保探千金　蕃山窮難照文逢一將

第百三十五回　渥美浦便船送紀二六　管領邸禍鬼抑親兵衛

八犬傳第九輯下套中摠目録終下套下近刻當至大團圓焉

たりきとも云ふべき
佛を人ぜんと願
ぜんとやむねの
あらはるの月
賛浄西法師
敵僧浄西
兜僧徳用

小山太郎次郎
朝重
將種賢賞罰法
天賛成朝
猿渡判官成朝

今純友
査助太郎
汝是西濱漏網魚
豈知東海有余且
海龍王
俗羅五郎

棄却顯職
富貴聚身
人間孝子
釋氏忠臣
賢僧正影西
六道山
能化院教主寺本堂
渥美郡領
隣尾伊江
權僧正
影西

第九輯
下帙上 十三之十四 摠目録 二丁ノ左 徑 カケ すり且 徑 くの 同 九丁右 五行 憩 誤写 同 九丁右 九行 老温 誤写 温 当
媼 ふ仮 べ 同 十六丁左 五行 竹塚 字を脱 竹のつぐ 同 十七丁左 十行 稱 カケ 同 十七丁右 十一行 同 くの
同 二十丁 左六丁 王 カケ 主 くの 同 二十丁 左七行 犢鼻褌 カケ 褌 くの 又 褌 カケ フンドシ くの
○十六の巻 十一行左 題目 牢 誤字 当 牢 ふ仮 べ 同 十六丁 右七行 冲り ひい くの 同 十八丁 右五行 妖僧奴 僧 誤写 当 尼 ふ仮 べ
○十七の巻 三丁左 七行 聽 誤字 聽 る 同 八丁右 八行 稲城 誤写 当 稲村 ふ仮 べ 同 八丁左 二行 浮浪の身 身 作者の失 当 人
べ 同 十三丁右 初行 件々 誤字 條々 る 同 十七丁右 初行 召復 る 同 十九丁左 七行 拾 カケ り
黙 くの 同 廿四丁右 二行 歴 れ くの 同 廿六丁右 六行 昨日 作者の失 当 前日 ふ仮 べ
○十八の巻 二丁右 二行 徳 カケ り 徳 くの 同 六丁右 十一行 世よ 世の字 せよ くの 同 十二丁左 初行 四 誤カ 当 匹 くの 如 ちの 畧
又按ずるに第九輯上帙の自序 二丁左 九行 山中狼之介とあるへ暗記の失 山中 当 品河 作るべ 又
第五輯より処々ふ出る 上野の白井 上呼 越後人 牧 え ふ忠告 れ 然 井 助
字也 假名違 本文白井の傍訓 井を浩字とされ 前板重訂抄録 終

南總里見八犬傳第九輯 巻之十九

東都 曲亭主人編次

第百十六回

假捕使三路ふ兵を行る
義兄弟両林ふ悪を懲す

復説堅名衆司經稜根生野飛雁太素頼い嚮ふ逸匹寺の客殿ゑ住持德用が意見ふ儘して長城惴利们と三隊ふ分れ緝捕の計議ふ違ぎ這隊ゑ則寺の悪僧陸繹坊堅削ゑ先鋒として後の僧俗三百五六十名、大庵ゑ投て推寄ゑ既ふしてその間遠くもあらぬる程ふ正ふ去向の茂林の中より黒烟立升りて猛火の光見れけり。當下堅削眼早く原来那奴们我の間ふ欺這方の機密を猜しけんやふ伍兵毎那を天ふ目今庵を自焼して他郷へ走るゆであらんぞうん捕ふ逃しそ皆急ぐねと聲高ふ罵示して連りふ找む程もあらぬ憶ぞうく東の茂林ふ一行の句と寫ふ滾三四

旒樹の間ふ在り。曇勝る四月の天の雲餘波なく吹拂ふ風のまふく閃めく思ひかけぬ敵も亦二隊ふ別れ。光景ふ堅削疑訝りて。隊勢と制めて。左右なく找まぢ。後陣を等て意見と問ふ。經稜素頼も亦これを相て。噪ぐる氣色もあらぢこだかりあて。經稜ハ馬上ふ堅削と云へく。御坊介まぢふ狐疑あるる那首ふ旗の戸色まぢとく。篭れる敵のあるぢや。大いけ〳〵聚合。奴們這方の軍議を聞着く苦ぢ隨の拙策の。那ハ奇兵の術ぞ。東の茂林も敵居ふ篭れりと思ひて。寄隊と住めて。开ぐ間ふ落延んとて計りけり。烏滸るゆと。冷笑へ素頼然るりと點頭て。その議寔ふ違へべ〳〵非除。大の施主るるめぐ。安房の里見の家臣でも十餘名ハ過ぢざるべふ由縁もゆ。這地ふ來て。火急の難義あれぐとそ。誰と憑て加勢ふせんや。とハへば經稜然ぐとよ。推量明白るる上ハ東ハ要るぢふ似れども。萬ふ一の與れば堅削御坊ハ東へ向ふて。敵の虚実を探りあ猜ぢ如く敵あ〳〵ぢふ。隊兵を這方へ找めて。

庵の邊ふ在る敵の尚退らで戰ひ剛〳〵。横鎗を入れあ。そ必勝の掙ぢ〳〵と。堅削ぢ。ち所。その議ハ。ろ沿ハ。ども。師父の軍議ふ任せ。れて。拙僧先鋒ふ找ぢと敵ぢらと思ひ。東の茂林へ立別れて。ち向ハ本意ふあ〳〵と。推辞めば經稜焦燥て。开ハ亦益の議論。今ハ這里ぞ役不足して。時を移さば敵ハ皆思ひの隨ふ逃亡でん。和僧介までふ思ひ。洒家東へ。ち向ハ然ぐとて。勢ハ要る。我伴當と列卒毎と。莊客們ハ二ぐ一。相別まぞ從ひ來よと。辭急迫〳〵言ふ。猛可ふ二隊ふ引ぢけて。東へ馬を早まれば始より。て戰ひを好ざりける。莊客們ハ敵ぢ〳〵と。とられる東の茂林。ぞ得意れ。と思へば定の數ふ錯ひて。我ぢく。と經稜ふ從ふ者のぢ。ければ堅削ぢ隊ふ隷て來ぢ。屬寺の法師武者ふ亦二の足を蹈ぢ有て。我們ハ是出家ぢふ今剛敵と戰ぢて。分捕功名ぢれば。ぞ。武名と。ぢ。子孫ハ。べ。所領の主ふぢ。ふ可惜命を。的ふ。て。敵あ。る方ふ向んとる。東へ。ぞ。とぢれと。一人ぐハ。ハ領ぐ。あ。甲ふ耳ぢ。ひふ亦。ぢ。ぢ。ぢ

馬の尻趕ふ駑計別ふ素頼堅削聲苛立て鈍や。兵毎ゆ違へ〜狄然〜も要な
沁東の茂林へ若们ちでが色くと狭這方へ来むや。と呼れば素頼が列卒伴當们も聲を
資て唱梵れども。皆皆熊〜て咸歩早ふ尺へる者ぶ多り〜ぶ素頼も堅削ゆ来れく
一霎時長覩て在りそぶ中ふ堅削い肚裏ふ思ふ。咱一朝の怒りふ乗〜く法敵
なる、大们を。捕捕まく思ひ。既ふ先鋒の頭人〜るふ今憶ぢも駑計別〜く隊
勢寡く多ふけ。這隊の挿沁心許ふ〜我も東へ適ゆ不如と主意〜も猶只管ふ
焦燥る面色多。素頼ふ向ひて足ゆ如く荘客们も我黨ゆ五が一〜ゆ違へ
け大々ふ多ぶ方の隊を離れ〜ゆ軍令笞雨ふ似て不便へ拙僧ゆ赴蒐て皆悉領て
来て。ふ身い徐ふ馬ゆ找め。頭陀が庵ふ推寄せ。拙僧程ふ〜ふ来て。後陣ふ續ふく
新隊ゆ。そ相資いて。とふふ素頼領て。ゆ蒐ゆ。と答ふ間ふ堅削い眉尖刀
肱腋ふ引着て。飛が像く走去け。小程ふ素頼い堅削ゆ目送り。ゆ〜ゆ〜ぶ在りけるゆ。

東の〜ふい処々ふ榛樹嫩杉ヨ〜れい往くも還るも〜ゆ〜ゆ〜ゆ

もあらばれば星額長老徒弟們駭慌る聲戰く。あゝ人々理不盡惴り疎鶻る者あひてなほよりあと叫べども耳も被ぜ轂を倒し或は蹴返し突跌倒して一個も餘さず犇々と捕索被て牽立る閑場勇しかりければ素頼覩て懼び怪しの法師達で加うるその賊僧們を這頭ふ置バ、大們を搦捕る折ふ脚る畜縁ふ絡んん今來し方ふ牽退けて両三人して能く衛りね由断して奪る復されとらふ悪僧們あるゐて牽立んと欲するふ星額師弟ハ云云と勸解て毫も身を起さず罵り怒る悪僧毎果てけるバ十個の法師を一個々々ふ擒抓む膂力自慢ふ十個の肩へ米苞の像くうち載く被擔連て舊路へ拽聲揃てゐたけり。當下根生野素頼ハ隊勢を找る樹林の間より庵頭ふ近着て前面を伝とうちれば尚燃残る猛火を背ふ十間許前を出て雙立る勇士あり。是則別人なるぞ道節毛野の二犬士ハ左右ふ從ふ両個の粗兵も各持る捍棒を或ハ突立股挾そ来れる者ハ是誰やと問せも果ぜ根生野素頼

騎馬苛め死聲も尖鋭く若們ハ乞礼鳥滸の僧俗近曽這頭ふ庵を締びて嘉吉のむゝ戰殺をる列將士卒の菩提の與とそ人の憑ふ念佛三昧法會の今日ふ及ぶまで國の守ふる結城殿ふ云云と請稟して支の免許を兼ねて況這地の大利る逆黨を其意ふ是若們ハ隣國の間諜児狡介なる謀叛の奸賊を搦捕て領てまゐれとある。當館の御諚ふ依て根生野飛雁太素頼ハ先ゐる似而非頭陀、大々那里ふ在る今日捕隊の頭人ハ我一隊のみるぞ我同僚る両勇士長城枕之介惴利堅名衆司經稜們も隊兵並ふ逸足寺の加勢の大衆を從て八隅隈なく捕稠れば水も漏さず火ふも焼せず然ば、大を資けて十個の賣僧ハ彼らのようを守知らるる狡猾せ狡逃んとて我馬ハ則ふ撞見去れば一個も漏さず搦捕りて後陣ふ在り先途を知らバ一個も逃ぐる出て馬前ふ跪く。素ふ被れと喚れば道節呵々と冷笑ひて憨念入りる長談義ふ今ゆ答んい大人ハ乗る

けれど慈心と釋ん与く听ね抑先亡追薦の念佛供養の願主る、大法師ハ慈悲ゑ。素より名利の與ゑらねど當城主へ許て免許を請んもの況這地の寺院ゑ告く。都助と借りて何ゑせん且兼愛て普く濟ふ施行佛の慈悲るゑ疑るゑ疑るゑわらべ約莫今番の法筵ハ和郎们ゑ先君氏朝主の菩提ゑも手りくれ欲るゑ筋あらんゑ罪るゑ扶ゑ為ゑ与と詰れゑ毛野も語を續て既ゑ捕られと雪く能化院の長老師弟ハ、大法師の舊識ゑらねど善ゑ與ゑる心りて昨今來會ゑゑのみ那身ゑ犯せる罪ゑけれゑ逃も躲れもせざらんゑ非道の索ゑ被らゑとも我们ゑ一列ゑ思れゑゑば後悔あんとハ道節聲ゑり立て。唯那十個の僧のゑハ、大庵主も我黨も罪せるゑるゑれゑ来意知まく欲さゑ庵主の伴ゑ立ぜて姑且和郎们と名ゑ両個を誰と思ゑ安房の里見ゑ由縁ある八犬士のゑゑ中ゑ小る者あると知られる他ハ則犬阪毛野我ハ大山道節ゑ徒と解ても听れぜハ弓箭採る身の常態ゑ。引ハ返さゑ武士の意地本事と

犬士ゑ爭何ゑゑと理り譴ゑる両個の犬士の然ーも雄々ーゑ勢ゑ素頼計較翔ゑ違て伽ゑゑ思ゑども多勢と屑ゑて毫も猶豫せず噫嗟ゑ兄们ゑ喧ゑゑ辯舌人を惑ゑとも若们ハ是里見の與ゑ事と法會ゑ假托て竊ゑ當城の虚実を覘ゑ悄使ゑるゑる言語の端ゑも顕れゑ。兵毎溺捕ぜゑと劇ゑ隊勢と找れば群立散動て爪を張る猫も釋氏も共侶ゑ御誂ゑと喚ゑ叫ゑ競ゑ蒐ゑると道節毛野両個の覇兵も棒とりて打拂ゑゑ拂ひ毫も寄せゑ薙倒も修煉ゑ透間あるとゑけれゑ寄隊ハヨ兄もゑのかゑるゑいめ兄噪ゑて逃んとも素頼ゑれゑ駭慌て道節毛野と射て仆さんと思ゑ箭坪を量りて弓ゑ箭刺ゑて弯絞ゑる那時遲ー這時速ー後方ゑ一個の犬士ゑり両個の覇兵を従て樹蔭と出る聲高ゑゑ根生野素頼ゑ礼ゑゑ犬士の隨一人天村大角ゑゑ在り下馬ゑて命をたび〻と罵りゑゑ白樫の棒りて馬の後脚を撥刺哩托地と薙折けば馬ハ一聲嘶ゑ屏風と倒ゑゑ像ゑ主共侶ゑ俯累りて死活ハ知ゑゑ平張け。話分両頭。尓程ゑ

文溪堂藏

くくみあーつるを。堅名衆司経稜へ樹間に敵の旗アんえる東の茂林へ推寄て。肇て後方をとろへれば。
鄭高定め人數おたがひて從ふ隊兵ヨあり。けれども甚麽と訝りてその義を問まく思
程に堅削も亦走り来て喘を定め找寄りて。経稜に報るまう。鄭高ゆゑん勢のヨ又寡を
定めて二ヶ一っと宣ひしと。兵毎ぶ吟誤て。荘客們さへ法師武者さへヨく從ひ来ぬれば。
三ヶ二っを這隊よあり。拙僧他們を喚返さんとて。躰て追蒐いふーふん馬の最早け
まへ沼捉着って這里ょ到まり不使ふぐうもあるねども。今領て還ふば六日の菖蒲那
里の期ゆあひくさかるんその仮這頭の敵と拷りて。旗のミきぶたのヨ人數ゆく根生野
主の後勤ハ勿論捕漏されて逃るを。捉ハ好獲もてそいゆ。拙僧ゆ伴仕んたの説に
儘せゆゆもやと已が性を添て秘まも古も旋るゆ。燕脂刷毛ょ止く巧言と信容る。経稜
屢點頭て然と這里より返ち遅り。我主意も其頭ハ過ぎ素頼小勢ふるぬといふとも。
危一百個ハ隊兵あんん且他ゲ武藝ヨ勇悍我と惴利們ふ伯仲もを覚ゆ掙ゆもべくもあるねば。

那里のゆハ心安り。先當要ハ這頭ヨ。敵の虚実を拷るふ在り。とを思へども。爭何せん樵夫の
かよふ路のミゆそ敏ゆり柱る松柏の枝と交叉処もあるければ。騎馬の進退難義ゆべ。御坊ハ先
鋒の頭人ゆれば勇僧まれ猛卒まれ五七名と從へて。ほけ入りて隈もゆく。渉獵らば敵ゆ有
無を知るん。那奴們倘切所を負ふそ。脊龍りそあるゆ。驅出て戰ふとも。御坊們都て身
單の功名と貪らで。陽走ゆて敵ふ趕て。誰引ぎまを妙とせゆ義をゆ徐ゆいそと忘屬
まへば堅削ハ好ーゆ及所ゆれども。今ゆ推辭むことゆむそゆゆ。そゆゆゆゆゆ。ひと答て躰ゆ退
ゆて心意相似る悪僧五六名と伴て。各持る眉尖刀ゆそ去向鬱悒ゆ樹の枝を極分ゆ
亦推抗ゆ敵と索ゆて宸くも深ゆ森ゆゆ入ゆけ。徒而堅名経稜へ隊勢を分ゆ。那
這ゆ樹の蔭ふ埋伏させて馬を駐めて堅削們ゆ敵と惹寄ゆゆとて。ゆけるゆ人ーくゆる
まで影ゆふゆゆゆば且訝り且焦燥て只得馬ゆ下立ゆ。我みゆゆ渉獵んとて躰ーゆ置ゆ
隊兵を咸召ゆ。意見を示して馬を牽ゆ前後ふ立て。ほけ入る茂林へ鳥路熊徑

苔滑ふ樹下闇くて辿るふ辿り易〻ぬを左右して両三町。来ぬらんと思ふ程ふ其頭ふ樹の下ふ人ありて呼ぶや人々救ぜや助けよゝと叫ぶを。経稜も隊兵も噫とだろふ咸駭ぬく。親れば某の兄弟人々も郷ふ斥候ふ遣られる堅削並ふ同伴の法師武者さへ五六名藤蔓とゆそ結杠られて一個も漏れも老樹の幹ふ縛ふ着られてゐゝゝゝ驚く経稜いはゝゝ。隊兵都て膽を潰して故を問ふあり。評まるあるて。打揮ふて聚合噪ぐと経稜急ふ叱禁めて兵毋烏滸る口と噤ぞ先那索と解捐よといはれて大家阿と応て間近く立る隊兵们ぶ腰ふ帯くる匕首とるふく拔て堅削们ぶ索と截棄んとせ程ふ前後の樹蔭ふ敵あて。咄と鳴くる興の聲剣ふ響ぬて。ヨヨ少と知くも突然として顕れ出る這里も三個の大士の武者聲犬川荘介ふ大田小文五大銅現八茲ふ在りふ名告被る武威胆勇そのふふ後ふ駆兵们ハ絶ふ四名ふ過ぎれども士卒一致の進退烈しく面ふ顕れ甘ふ靡けく短兵急ふ拉ぐ奮男正ふ虎をゆそ羊と駈るふ異るゝぶれい始よりして鬪戦ふ心ふ荘客们ハ

近くハ找まで在りふ目今敵の興の聲と呼くより呼々と驚怕れて辟を衝て逃ゝべ誰ら駭慌ざる兄逸正寺の悪僧们ハ経稜ぶ伴當列卒さへ軍旅ふ熟ざる者のゝ兄れハ敵のヨヨ少もとゝゝ皆只命を免れんと樹間を潜り路と求めて走るもあへも樹の根ふ跌ぬ或ハ背ふ躓く者ふ壓倒され蹂躙られて剰へ大士の駆兵们ふ生拘るもヨヨ少けら開ぶ中ふ経稜を走る躬方と詈辱ゆそ復せ戻せと喚ゝ憶ぜも退後ゝと現八横ざまふ衝と寄て刃と丁と打落し組しもゆゝぶ中一中て三間ふまゝ投ゝべ経稜ハ老樹の株ふ膝と打せ阿と叫びて又起べるあゝぶゝと大士の駆兵们走蒐りて索と被てゆ牽居ける。登時荘介小文吾も現八ぶ今ふたゝめ拳法の精妙ゆる感ゝ賞て俱ふ経稜を責てゆ。やゝれ烏滸の小人悔ゝかゝぶ爾ハ結城ふ由緒ある家臣親の忠死の賞として重職美禄を高示ゝ放辟邪侵ふを理義を思ふぶ心術相似る同僚の侮人根生野飛雁太素頼長城祝之介惣利と共侶ふ逸正寺の住持徳用ゆの徒弟堅削们ふ哄誘されて、大庵主ハ念佛供養と非義

と媚て君命と偽倡へ僧俗烏合の多人數の。我们さを推並て搦捕ちく欲り一ぬるその計較の趣ハ人の告るを知くるが今又悪僧堅削们の招ゐてその詳るを聞と听ゆるを知ざる那悪僧们ハ爾が與ふ斥候を漫ふ這頭へ来ける。我们既ふ捕捕て爾と共に久ゝ為ん公ふ及ぶとも、大庵主の念佛供類ハ若们が先君先父の菩提ゐも干れば相欽びて一臂の力を資んとそおもふべふを告ざるを罪として雙敵の思ひを存るを抑何等の心ぞや忠ゐもあるまじ孝ゐ及ぶ冥罰訓越ふ競面るハ其身々々の亡君亡父ふ叛ける崇ゐ及ぶやハ恁ても陳ずるよりあるを甚麽ぞやふぞと迭代ふ責問へども経稜ハ折傷の痛楚ふ堪ざりけるのゆゑ。當下堅削们の悪僧ハ俱ふ蟬聲戰して。犬士達と安ゝ。允させゆ我们を住持徳用の指揮に依りて已に久ゝ。當隊に加りふへ只懲さんとありひゝ真実大人们を撃捕と欲す。悪心ゆゑと勸解れば亦経稜の伴當列卒の生拘れも咸跪て額を衝て異口同様ふ陳ずるを聊刀称们を召せ。小可毎ハ這回の計較ゆ高を手ら情申ゞふ知ゞひゝを主

命ゐれば是ゐ非ゐ相従ひ賢査ゆかと陪話て連りふ口説くを。三犬士ハ共ゐ杣木の株に尻を横て莊仗ゞ談ずるを。犬田犬飼ふ思ひゆゑ堅削们が招ふ據ゐふ先徒三方ふ向ひを事既ふ分明へ只心許ゐ、大庵主の安危のを供養塔所ふ快立かりて犬山犬阪犬村们と一隊ふ做りて庵主の跡を赴て大塚ふ力と勢せ今の急務ハ是のみとゆへ小文吾點頭てそを勿論のゆゑ這生口们をゆふまゞと問を現ハ少あゞ并ゐ商議ふ及ぶを。一個々々ふ首を刎て後安くせゞゆあゝ逃る奴们ゞ為ん来て被る索を解んぞ。然ゐ盗ふ糧を窺し。仇ふ刃を借ゆ似て是禍を貽を。の義を思ひゆゑと勇むを莊仗ハ椎禁ゆを否。如右せんハ易けれども、大庵主を為られ。とあり灰ふ帰ゐ犬江親兵衛ハ逆將素藤を征ゐ折光徒を一個も殺さゞ庵主の諭ふ違ん但経稜と悪僧们をのゝ供養塔所ふ牽ゆそ為て犬山犬阪犬村们ふ示して衆議ふ儘しるべ。せん術もあんかと諭せば現ハ感服して。その説宜ふ精

妙な約莫今番の闘戰い他們が妙忘の奸虐のそ我らを做ーるる祭今一朝の怒ふ無ーく。
殺さい他們ゞ主君さる結城氏と怨と結ん然ぢの里見殿のお為ふ宜ーくゞ思いざるーく我な
ゞ短慮ゞ成嗚呼衍ゞと諄返ーつ他事るければ莊介小文吾再議ふ及ぶ四個の賜兵ふ
ゝろるさそ經稜堅削們の生口と牽立よとそいそぐまるふ經稜い撲傷ふ惱て一歩も運び
ゞ堅削も亦生拘られ折片足を折ゞる故ふ立ぞ輒ゞぞといへ鄙ふ經稜ゞ牽せる馬
も既ふ分捕せられて繋ふて樹下ゆあるそ隨即件の僧俗とその馬ふ乘せそ鞍ふ縢附る
ど主莊介們ゞ彼をそ二ゞ賜兵ふ知せ者ゞ其の餘の生口ヨ彼も皆泛々の雜兵ゞ彼ゞ其の
伏ゞて乘てもん但那伏ふ閑くまゞ鄙ふ樹間ふ植さる涅槃偈の旛けつ多く採却
奉燔棄よとふ賜兵們ゞ彼ゞ成ふ做ーふけ有徒ーゞ莊介小文吾現八を經稜
堅削とゞ乘せる馬を真先ゆ牽せて其の餘生口の悪僧と賜兵ふ牽せ路とそぞく。
塔所の茂林ふかゞ来ける程ふ道節毛野大角い根生野飛雁太素頼とその隊の僧俗総名

狭ふく生拘られけるそ茂林の樹の幹ふ繋ーて莊介們の三人士ゞをきく縛て在ーゞ迭ふ
閑戰の趣と箇様々々と解示ーて俱ふ笑扇ふ入りける井ゞ中ふ道節ゞふ申ふ假討ふ
頭人ーる素頼と經稜い大村大飼ふ生拘られて這頭ふ敵ふ成ゞれども生拘毎と拷問て
他們ゞ密策と听ゞる尚一隊の兇徒あり。庵主と搦捕んとそ中途ふ埋伏ゞ待とへ胃安
ゞ成る所あり和殿們ゞ彼ゞ守ゞ急迫ーく問へい莊介答て然ゞとよそのゞ成れ我們も亦
堅削ゞ首伏ゞ既ふ知れり然ゞも他們を誅戮せそ其の処ふて牽ゆて来ゆへ大庵主の教を
守りて衆議ふ任せんと思へゞ成ゞふ小文吾現八も亦云云と解示ーて毛野い倩ーち听て那隊の
頭人長城枕之介端利い經稜素頼と同ドかゞで一百名の賜兵ゞ是ふ加ゞる逸足寺の住
持德用い出家ふ似げ成武塾ふ長て膂力飽まで剛ゞ成ゞ侮り難ゞる惴利い隊
兵ふ持ーる准備の神器将軍ヨゞと生口毎ゞ招ふ成ゞそれを思ふ実ふ是勁敵之大塚
素ゞ智勇ふ秀て成ゞ敵ゞる足ゞと成ゞとも失ゞと成ゞ又那星額長老師弟い鄙ふ

素頼ハ撞見して。搦捕られたゝゆえ。剛者の駄方の雑兵なれ。其頭と曲者索させつゝ。那里へ牽れけゝ。ぞとハ。事の理る折もあらば這宗徒の生口と那十個の法師達と交易ふ。便り宜しからべ。然とても武威を示さ為へ素頼経稜堅削仁悪僧ハ殊更ハ頭立て。ハを許さと。那里まで牽ゆ。そ出て。犬塚蛮崎姥雪ハ力を勁して。庵主を守護せん皆立ゆ。といそぐせば。大角一雨妻時と推禁めて。鄙ハ咱仁ハ馬共伯ハ薙滾〻生拘る。那根生野素頼ハ馬ハ布れ。折より腰立ぞ。その馬も亦後脚痺て。牽もせくハ不便。経稜堅削と共伯ハ孤馬ハ。ち駝せん。と。ハ大家異説ゆ。雑兵ハ。吩咐て素頼ハ亦合鞍ハ。滕げ駝して。牽出ぞ。その為体をうちそれば。俗ハ。ハ三貌荒神の軽尻。れや。草枕旅路いそ〻。ぞ六犬士ハ去向甚麽と。安〻ぬ。ろ武井の驛路投く。人ゆ。あらハ杖原。其里狭と。ぐり捷径を求めく。倶ハ。いそぐけり。誠や時運ハ厚薄あり。事ハ幸あり。不幸あり。ハ大ハ倶〻る信乃仁の安危ハ。下の回ハ具ふ。べし。

第百二十七回

大庵の厄ハ親兵衛伴を喪ふ　石菩薩の前ハ信乃應報を悟る

単表犬塚信乃戍孝ハ道節毛野荘介小文吾現八大角仁の六犬士ハ先〻ぞ蛮崎主僕姥雪代四郎仁と共伯ハ、大法師ハ相従ぞ上総路ゆ投ぞ。既ハ結城の町を離れて。こと一里半あまり。武井の驛をうち過て杖ゆ諸川の方ハ曳く程ハ。當時ハ這頭ハ岐川あり。その一川ハ許我川俣ハ相沃ぞ又一川ハ仁連水家部堺ハ迫ゆ。倶ハ利根河ハ合流せり。ゆゑ。ゆゑ土俗是を左右川と唤做ゆ。今ハ這川ハ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ

ア出来る騎馬の武士是則別人るゝを長城枕之助惣利と去向をうゝを殺塞ぐその隊の賊兵六七十名御誠々々と喚りそ各るゝを振見めるを十あの電光月と射る如く前後を争ふ縅捕の勢ひ猛うじるゝあるゝれば、大法師の先ゝ立つる照文も代四郎も今倒は一言半句の問答も暇もなくおゝ何事ぞと。たるゝふ組ーんせと相挑む修煉の掙ゞ力らゞ優さゞ投退ゝゝ防げども捕隊ハ然ーも岌ゝ蒐るヨヌ人數ゝれい物ともせゞ然ゞ照文が若黨紀二六並ゝハ個の伴當ハ怯れゝゝゝあるゝども武勇捷れ者るゝゝ防ゞ難ゝ捷伏せられて送ゝく搦捕られけゝそゝ中ゝ、大法師ハ駝きゝー季基主の送骨と共ゝとの心ゝ揖て聲も乱れ及降魔の経文誦揖ゝゝ錫杖のそ防ぐ甲斐ある武藝の妙要昔の餘波著れて立も透間あるゝれば敵の賊兵を闘るゝ輒く捕もるゝゝを惣利馬上ゝ焦燥て罵りゝ又励ゝ連ア隊勢と找めゝ有徒ゝ程ゝ犬塚信乃ハ趕来る敵のあるゝのゝせんゝ豫思ハ由断せゞ、大法師と相距ると約一町許ゝて殿ーゝ来ゝけるゝ恵ハ後ゝあるゝゝ縅捕の勁敵前ゝあゝ一騎の頭人居ヨヌの賊兵们、大代四郎照文主僕と。推捕稠て闘ゝを。ア隊

ゝく結城の三士の一人を逸足寺の住持を稽助る乱妨ゝゝ及ゝるゝん先那騎馬の頭人を殿ゝ仆ゝ。殘兵ゝを戰ゝて退け易ーと勝屑を揃ゝ武畧の即智ゝゝゝ路の傍ゝる舊稲塚の小杉木を是究竟と拔合て腋挾ゝゝ奮然と走ゝ向んせ程もゝゝゝ這里ゝも樹蔭ゝ又敵ゝゝ顯れゝる法師武者その勢約莫一百許の内中ゝ一個の隊長ゝゝ問でもゝゝ這ハ是逸足寺の住持德用ゝ括袖法衣ゝ架裟頭巾。尚已時可ゝ白ゝ夾衣の下ゝ身甲ゝ。鐵の鹿杖の重六十五斤ゝを突立ゝ先ゝ找ゝて隊勢と俱ゝ先ゝと去向の路と断塞ゝ信乃を伝と疾視て四下ゝ鳴ゝ聲も尖鋭く若们大胆烏滸の嗚呼見事を法會ゝ假托て當城の虚実を覗ゝ恩を窮民ゝ施ゝて這地ゝ住ゝ我寺を傾けと欲ゝゝ伎倆を誰ゝ知ゝゝ国守の與ゝ奸賊ゝ當寺の為ゝ法敵ゝの故ゝ我忍辱の鎧を脱て弥陀剣ゝ異ゝゝ這鹿杖を携ゝゝ只一打ゝ徃生さん噫法師们ゝ温ーゝゝ大刀佩ゝゝそ憚ゝゝ猴宙ゝ吊ーとゝて来ゝゝと嗤ゝ考れゝその隊の悪僧道人さ共保ゝ或ハ眉尖刀捍棒と打振ゝゝ競ひ蒐ゝを信乃ハ准備の小杉木のそ打拂ゝ先ゝ找ゝ一両僧を左右撞と轟ゝ仆せゞ怯むゝさゝと聲

高ふ若門破戒の慳の兇僧一個の敵と侮て安房の里見の大士の一人犬塚信乃とまぐ知ぶ本事と安んとのみも果を替る二の隊の悪僧門ゞ入む眉尖刀ふ身と淪く両膝撲地難倒を武藝精妙思ふ優へふ神出鬼没の挿ふ悪僧們を皆舌と掉を又立替る新隊いわゞ逡巡を表のこゝ見徳用怜ぶ鐵の鹿杖両手ゞ食揚て輪々々と両三番振試ゞ癈粉ふ做さんと走り蒐れば信乃は透さず身を反て小杉木ゞ丁々礮と受ふ流っ相挑めども器械相応ゞ虎れ看官越る胸安ゞ勝負誰何と思もあえ知ぬ信乃が懐ふ那孝の字と天王ふ然でも自得の武藝精妙亮毛も透間あゞれば徳用憶を腕乱れ心情地ふ驚けども猶も撓を踏入々々嘯を叫て戰ふる事の光景目覚く雙龍深淵ふ珠を爭ふ両虎高岳ふ穴を欲るも徒やと思可れば全隊悪僧道人們ふ足れて俱ふ長視て在り然ば又左右川の邊ふ照文代四郎居ゞの敵と防ぎ難て共倍ふ只得刀ゞ引拔て殺拂々々一霎時ふ挑戰へる惴利連ふ隊勢と找め息とも類を攻ゞられ照文ふ代四郎も竟ふ勢ふ窮り代四郎ふ跌顛ふ照文ふ敵の千ふ刃と丁と打落されてひとく捕捕

らるゝとゞ々ふ不娯く、大法師ふ左右の帮助と喪ひて防ぐふ術のあゞられふ亦倒ふ敵と拒まで親衾の外他事ふ引ゞ粗兵們ふ引と左右ふ抗ふ溝つ組禁れば惴利馬上ふ雀躍して其奴緩ゆるも足も結杙れゞと下知あけり嗚呼憐むべ二十餘年抖擻行脚の勇僧も時運好ゞ暴戾奸許の這禍鬼を禳ふ嗟嘆ふ方ゞ引けり浩処ふ大江親兵衛ふ政木孝嗣と石亀屋次圓太郎三を伴ふ五十三太素ふ吉ふ送られる水行を今日ふ関宿より陸ふ登り路次と急ぐて孝嗣們ふ先ゞ

と約莫一町許ふ走て目今這里ふ来ふけるゞ左右川の那方ふて旅客ゞん三個の僧俗緝捕の粗兵と戰ふ肩て既ふ搦捕らるゝ有りその旅客主僕の内中両個ふ是武士ふて紛ふるゝ有られる照文と代四郎ゞりければ原来法師ふ問でもあるれ、大大徳ふ在るゝ有ゞ左右川橋を飛ぶ像ふ渡り来ふ怒ふ堪ぬ聲高ふ呼ふ事具ふ知ゞれども同藩の情朋友の義ふて其ふ已ん兵毎ふ大士の一人里見の家臣犬江親兵衛仁義と名告も果ぬ鐵扇を惴利ふ馬の尻と力ふ来て托地と撻ふ撻れて驚く馬ふ只狂走れる勢ふ駐らぬ主共倍ふ左右川の渊へ

天助人力窮厄と解く

火と陷ひけり。親兵衛これをもて敵馬に誤ぐ敵の騎兵を又鐵肩もて毆伏せ或蹴倒し。摔抓を飛礫よ含て投る折ふ後れて来る孝嗣次圓太郎子も共侶ふ事あり。けとりそれぞれ敵馬ふり甲乙齊一走りて渡る左右川の橋の中央ふ迫る程前面の岸ふ群藪蔭ふ連放る鐵砲の音响と共ふ孝嗣们三名ハ俱ふ撑と斃れて陷て往方ふ急湍の水ふ推流され狡猾ふ狡在りとも云ふ原ふ這數十挺の鐵砲ハ是別人の所為ふ悍利隊騎兵を分て三十人ふ鐵砲を持て藪蔭ふ伏軍直ふ艦砲児们倘悍ふ餘ふ敵ふ仆れと下知あり然ばその三十個の騎兵们ハ思ふ計ず一個の少年ふ諸川の方ふ走り来て兵庭ふ頭人悍利を人馬共侶槌走りて川へ陷ありのこふ躬方の騎兵を投石ふ含て人ふ境ふ入る如武勇ふ當べもあらぬふ他ハ一路見忠あん左主僕と云ふる武士三名那少年ふ些ト後れて走て川の前面ふ来ふ突然として来ふけれハ這藪蔭ふ伏兵ふ趣ふ易寛と云て一隊ハ把橋ふ渡ふ来ふる三個の敵ふ敵ふ陷ー一隊ハ少年ふ敵ふんとて。十四五挺の銃頭ふ向ふ其方ふ推向て一度ふ鑽て放ちふ伏姫神の擁護ふ憑りけ親兵衛ハ大の身ふ向ふ捕捕られて這里ふ為ふ照文主僕代四郎们ハ。その銃丸ふ当ふ中ふ中て斃ふ者ハ皆他们ハ火家の親兵衛と戰ふ者のみ。これハ死ふ免れ敗鳥ふ乱れ群ふる鼠の逃ふ像ふ一個も在ふ倣ふ伏兵も慌且恥て又遽ふ丸ふ篭て復親兵衛们ふ斃ふんとふ往ふ折ふ忽然と就風猛可ふ吹起て最凄ふ荒れ那伏兵们ハ鐵砲の火ふ吹ふ都て風ふ合ふ吹れて又斃ふ出ふ雲ふ塵霞ふ黒白ふ別ふ分ふ伏兵们ハ驚騒ふて吹倒されと四下ふ行ふ推ふ倒ふ槐樹の倒ふ撲れて矢庭ふ死ふ者五七名ふ及ハ大家ふ堪ふ慌迷ひて立去んとせ程ふ最南ふ迷て川の邊ふ来ふ憶ふ風ふ吹ふ衣ふ沈ふ流れけん這頭ふ敵ふ遮ふ程ふ親兵衛ハ後れて来ふる三個の同伴孝嗣次圓太郎三方僅左右川橋の中央ふ憐ふ敵の鐵砲ふ斃ふ水ふ陷りける其光景ふ見ふ人ふ由ふ剥我身ふ敵の銃頭ふ免ふ事急ふ極ふ由ふ就風猛可ふ吹ふ荒れて塵霞狸天ふ翳め一雲去ふ友て他们ハ同士斃ふて躬方の洪福ふ帰ふ時野千丈の烏夜ふ帰ふ敵の伏兵慌迷ひて走て河水ふ陷りけ其頭ふ水音高ふ聞て居ふ

人の呼とむらふ叫ぶ聲をけふ〻後ハ音も甚寂ふ奇〻紀天助るふ猶辛〻るひ〻疾風烈〻けれども親兵衛その餘も躬方の身邊を避て吹倒さる患なもあるを呂茂嗣们を悼み思ふ哀歌交分くよもぎく惆然として在りける程ふ勁風恬ぶ塵霾狸雲弃て青天白日明亮る登時親兵衛聲をかけて啓よ蜜崎主殿雪更ふ山ハて恙なく同く躰て七首とりて蜜崎主殿代四郎が攜られる志茂を截棄れば大家歌ぶ中ふ照丈と代四郎ハ敵の野兵ふ打傷きれる両刀を拿抗牆を跨て感涙の找むをちばを呼ぶ祈る犬江生殺れるハ神所為歟再生の恩奇ふて姉を啓も那里ふ在ものゝ大庵主ふてそとふ親兵衛とれを望めゝ遽く〻大の身邊ふ找を朝ひつ跪紀て去い師父ゆ〻ゝ晩生則犬江親兵衛仁ゆ紀年繞ふ四歳の時舊里近紀行德ゆ〻目ふかて伏とゝ入給ふ〻のをふて面ふ忘れられ亟ふの〻ゝ難遲鈍失敬許さゆ〻ゝ

親兵衛が帮助ふよて身ハ勍敵の素ふ被らぎ且風雲の天変ゆ最大暗くなりし時敵ゝ野兵ふ打隨される錫杖を撥拂ふ〻ゝ笈を搭駝る隨ふて端然ゝとして立在るふ今親兵衛が名生るを聞て左見右顧〻感涙の找むを覚ぎ〻ゝ領紀て詞徐ふ答るゆ〻ゝ絶て久紀再會の由斐ふ今の辟鬼を對治せられ武勇人栖正ふ是和殿ゆ〻ゝ然も危窮の折ふて風雲間夜ふ異ゆ〻ゝねば支向ふべもあらぎりふ勍敵去て風雲歇ふ怪ふ恙ふ對面何事狹ふ紀優ゆ紀却ゝと天ふ倣ふけるゆ〻神の冥助と霊山仙果の藥餌ふ憑ゆ紀大人備ふ紀優ゆ目覚ゆ和殿ハ自餘の義兄弟七大士ふ先ゝゆ紀君侯御父子ふ拜見の始ふ大功ふ成ける事の顛末ふ為る日両國河の邊遇ゆ〻憶ふ蜜崎生ふ君命を伝ゆられて反賊墓田素藤ゆ再征の爲ふ田税逆時古屋景能並ふ五十二天素ゆ吉と申ゆ〻浮ゆ丹路ゆ〻ゝ總ハ北紀ゆ〻ゝと云ゆ折ゆ崖略ハ蜜崎生ふ少ゆ〻ゝ意ふ再征の功ゆ成て目今来會せられゆんとふ紀て親兵衛然ゝ既ふ猜ゆ錯ゆ素藤對治の手功ハ逸時景能孝嗣次國太郎三们の帮助もあり又討隊の大將芝川老の陣営ふも諜ゝ合ゆ〻御方の勇戦一致の故ゆ然ゝ素藤妙椿ハゆ〻宗徒の兇賊逃ゆ〻ゝ或ハ生拘ふ或ハ誅て館山平治ゆ〻ゝ猶一椿事の先命ゆ紀自餘七個の義兄弟ゆ〻ゝ蜜崎生ふ面會ゆ〻ゝ這地の法廷ふあの

まこの餘時あれかと思ひ惑ふ心頻りふいそれて女館山を辭し去り孝嗣次圓太郎三と伴ひ今日邑牌過る時候船関宿に果てば送られる五十二天竹は相別れて陸に登り路次々々で剛才這里に来ふ橋よりそれば死身並ぶ蜑崎主僕蛾雪竹は急難あり敵誰かもあらぶれ餓鬼奴きくばば聊孤力を盡すに猶風雲の天助ありて思ひの隨に各位を救ひ得るー就て又最送憾ー孝嗣次圓太郎三が横死拙生殊に早くけん他竹は後れて来ける程に數蔭なる敵の鐵砲に撃れて川に陷ち今日の難に大と倶に側に在る照文代四郎きていとそろ胸を潜して齊一嘆息をつけ姑且と代四郎は親兵衛に向て喃和子老僕も今日蜑崎主と折あらば使と奉りて船と死身の舊里なる市河へと乘走るその事は趣に及せ申けんあるに風波の障りあらば身が那里と立去りぬ後に大江屋に尋ぬ本意を遂ぬ這地に来て蜑崎主に對面の折死身の仕方も那人の忠孝義俠を少知りたと憑ー思ひ政木生石亀屋竹も這里まで来て敵の為に可惜命を隕されー現痛に親兵衛嗟嘆ー大そ勿論の事なり

我竹は路次々々で諸川を過る折前面より来る一個の法師が竹は彼を呼住めて和君達今日こ大庵の念佛供料に會んとて結城へ赴くなるべし件の庵主公は彼の地方に一路兒と共に免れ難きその故は箇様々々の情由ありて庵主の宿願成就の星頭長老師弟の及先君李基朝臣の遺骨の又施物の折に来りけるに法師が忠告の支の趣迂闊寺の住持德用その徒弟堅削竹が悪心邪説と帮助る結城の驕臣經稜素頼惣利竹が詭詐の緝捕の又大山大阪大飼大川大田大村の義兄弟は塔所の茂林邊に猶在りて三隊に別れて敵と為の又大塚は蜑崎蛾雪竹の幇助として庵主に俱して塔所の茂林に立去りぬその餘公佛供養の光景蛾雪更は故主の隨意與四郎の與を改めて代四郎與保と喚ぶとまで漏さず具に告らる言約して諍うねば時と移さず吁果ける虚実は知ず怪しくも胸安らねば件の法師は出発を問質ばば追ひ及ばばそが仮に立別れ飛ぶ像くに走り来て庵主も危所の折られ竜も礙説せず踏入て聊孤力を盡すに敵は火銃の准備あれば防ぐもあらばり

素奇しき風雲の幇助ありて同士數多さそ。彼方ハ利あり遂ハ怨敵退散をそ皆恙なき幸ハ是晩生が功ハあらぬ庵主の道德高けれバ佛菩薩の利益ある歟ハ然ぞ送骨と馳れぬ先君感靈の擁護なるべし。怪る奇特ありあるべ孝嗣次圓太郎三の〻果敢なる敵ハ數ハ陷れハ命數爰ハ竭る故歟他人ハ忠孝義俠ハて身を禍鬼ハ喪れ因果と佛説ハ據て思惟れハ前世業報とぬべくん左も右もと惜しけれと唱言がまく解正を聞て呆て照文代四郎告んと豫思ひ奇き親兵衛ハ少知られて他よりハ富意即妙さそもくとだろハ答ようもなりける姑且て照文ハ是も亦犬江生ハ知られ欲知らぬも卑職ハの地ハ来る折、大庵とたゞ難て殆困たりけるハ奇しき法師ハ案内とせられて面會の本意と遂ぬ刹亦星額師弟の石塔婆の奇工あり乞ハ法師の思告ハ是ハ由て彼と思ハ和殿ハ先機を告し法師ハ權者の化現なるべし歟と愚しくいとハ代四郎もうち點頭て俱ハ感嘆をなる。這時、大八爰も卸さぬ朽樹の伐株ハ尻と樹ハ件の奇談ハ果て親兵衛ハ向ひて問ハ妙なる這那一致の善報ハ九智と悟りかられも那政木生とハ善語人

三個の落命ハ実ハ和殿のいる如く過世の業因なるべしと思ハ絶ぬ絶ぬ。京心許なハ大塚ハ安危人那人ハ始より趕来る敵のあるのをせんと思慮りつ一町許胡意後れて来ける程這里ハ勍敵の起ハ折大塚も亦一百あまりの悪僧ハ路を断れ力戰の光景ハ間遠くもあるされハ法僧ハ彼てこれを知れるあらぬハ風雲の奇異ありて猛可ハ暗くなり折大塚ハ何ところ行ハ今又ハ那里ハ敵も那人もあるぬハ且塔所の茂林ハ敵と為る犬山犬川六犬士の勝敗いまだ知ぬ〻ハ思ひのまゝと問ハ照文代四郎も然也と點頭て現大塚の上ハも我ハも亦心ハ拙れハ大江和君ハ商量まそ。指揮ハ據んとハ要談まゆく言後れるとハを親兵衛ハ入て左の美ハ庵主も曳達ハ然まハ配慮ハ大塚ハ那孝嗣次圓太郎三ハ同じくまぞ身をまさで広吳王ハ捕捕らるべもあるぞハ晩生ハ悪衆徒ハ認られざるとも幸ひ乃那里まで赴て大塚並ハ餘の六大士の安危と尋ハ力と勇て共倍ハ犯て来て曳達ハ庵主ハ俱て諸川まで退ハ這里ハ人煙遠れても結城ハ入る者ハ者の必據るべ要路をんハ今まで徂徠の人ハ風雲の間ハ怕れ欲然らぬ亦神明佛陀の禁ハ是ハ思ハ

れ然ども虚々と這里を長談もぐらぶ。庵よりとりそせば照文代四郎頭を掉て。そはいろろ。然ば大田和君の小父でも大塚大飼い相識でもを面忘除くの外和君ふ對面せざる大士迭ふ面善をくもあらぶ。然ば大田和君の小父でも大塚大飼い相識でもを面忘れをさらんよ。何を所据ふ名告あべ。只我们も俱ふ。べれとられて親兵衛沈吟ぞ。然とその両個ハ要ず。蛯雪要と伴べ。枉てこの誂ふ任ー。也今先天ぶ。めてそれとぶつ。躍て身を起して走て。圮橋の中央ふ迫て。水中を左右の水際を。西三番見亘て。故の処ふかり来り。然而、大照文代四郎们は報ず。晩生那里ふ赴て。検る上隈もなくーふ孝嗣次固太鄙三们い。急端の為ふ流されけん。屍骸い。孰もなぐ。又衢ふ晩生ふ馬の尻を撻撲されて。走のそ人馬共侶ふ川ふ陷りー。敵の頭人。則結城の家臣ぞ。長城枕之介惴利。吸倣奴ぞん。ある那奇ぶ法師ふ所ぶ。尓ふ那奴も馬さへ。ぞ。只那惴利のぞ。慌て怒風吹滾されて。一度ふ川陷さんと猜ー。愚ぞ那伏兵们も。川下より逃る。秋推流され。秋在ぞ。るの。徒れ後安りぞん。蛯崎主。伴當とい。あ。庵主と俱ふ這川邊をぞ。立去ぞ。ぶ。ねといそがも。折ぞ。疑然と結城の方より人居ヨ。這方を投て。来ぞ。敵秋とそれ。ぶ。是七犬の毎ぞ。信乃ハ既ふ德用を生拘て。則方の野兵ふ素と執らして。真先ふ。是を幸ー。又

道節毛野太角荘介現八小文五ハ素頼經枝堅削を一馬ふ勝。来せ。よの它生拘の僧俗。ぞ。も亦七個の野兵。ぞ。五十歩許出迎て。小父公の。孰ふいぞ。大塚大飼自餘の賢兄晩生則大江親兵衛仁ふ。ぞ。名告を。ぞ。小文五信乃現八を第一番ぞ。荘介道節毛野太角。ぞ。親兵衛ふ近づ。ぞ。大八犬ぞ。ーふ思ー。ふ。も大人備て。適男ふ。ぞ。酒家い小父ハ小文五ぞ。咱们い信乃ぞ現八ぞ。七個名告る不勝の喜び。背を拊て顔ふ。目盛る。親兵疎ぞ。隔る。皆骨肉の思ひ。具ふ名状ぞ。代四郎ハ含笑ぞ。照文の若黨紀三六们。俱ふ。跪ぞ。傍ふ在り。鳴ぞ。時ふ哉ぞ。孔ふ大妄ふ具足ぞ。ハ約の玉聯串の功、大の宿望。虚ーふ。看官。ぞ。微笑ぞ。作者ハ二十餘年の腹稿。ぞ。機を。後ぞ。小説圓。ぞ。一朝の筆ぞ。ぞ。思ぶ。問話休題。

時、大照文も七犬士と相迎へて親兵衛が故尼の戰功と風雲天助の崖略と箇様々々と告知て、躬方の所の勝利を向ふの道節荘介先登てのち豫相謀り如く我们が那茂林を毛野大角現八小文吾と三隊ふ別れて緝捕の士卒を駆り走り小文吾現八を悪僧堅削と堅君經稜を生拘り又大角が根生野素頼を虜ふ走りて其奴们が足を損れてあるべきもの忘れ分捕をする經稜が馬あるとして件の三虜と一鞍ふ縢附て牽きてあふ來るとその餘の生口も法師武者が殺伐破戒の罪許ぜべ又經稜素頼が家僕と雷ヶ八饒さまして牽のて來るその它浪々の奴们が両所の茂林の樹の幹ふ結紐着る依ふて皆ち棄ひ兵隊庵主の教訓あれば一個も敵を殺さでゆふ却憐む兎りの星額長老師弟と事の始ふ寄隊の士卒と和解て率事ふ扱んと漫ふ走出るを素頼が理不盡ふ一個も漏さじ搦捕らて後陣ふ退けるとなれば鬪戰果て躬方の羇兵ふ其頭と限るく素させ那里へ牽めて来んを亟ふ往方が知れざるを故ふ這生口们を那長老師弟と交易の為ふ送ると思へと却這里へも前後ふ敵あるを戰い難ぜるゆ一祈天の資助ふ風雲ゆ吹聞くなりけるこりゆ大塚ふ向て胸安くなりゆふ志ゆまさ芽出さと祝せば現八小文吾毛野大角ゆふ云云と喜び答ぜ當下、大照文が星額師弟とあれとて且八犬平右の功を誉め這里なる敵が同士殺なるを事歴と告知れば信乃ふ、大照文ふ告ぜる鄙ふ咱们が悪僧毎ふ路を断れて合期なれば庵主の先途を救ふ這わら戰い決ぜり一時候怪ゆ風ふ兵別れて後ふ德用と生拘り及折ら這兄弟们が勝軍を退ぜるふ逢ひぬる事は首尾なるを且ある地方の路傍小堂を今昔未曾有の奇異あるとゆ思い合まるゆ一われ者ふ告ぜ知れども怎立聚ひて時を移さば城より討隊の大勢を蒐らとあらん抗防ふ便り宜ぜ先諸川の方ふ退ぜて便宜の地方ふ敵と戰んとへば道節找を寄てその戈豆取ぜ城より討隊の追來るを悪僧俗们が非法邪計を詳ふ鮮示ぜ我们素より罪ふ犯ぜと告るとも聴れぜ先譽祀ふ生口毎の首を殺ぜ落て寄隊を破ぜ今更別議あるゆ咱们と悩るとも野ふ椎禁ゆて并も亦時宜ふ由る兎のを卒ゆべとのそ者ば親兵衛も亦の者ゆ咱们も亦賢兄達ふ告ぜ一路児の薄命の歎をあらとへば今の急務ふわ一われ再議の折ふ餘談を盡さん這里ふ要ぜ卒々とのふ大家異議もるへ犬照文代四郎が鄙兵伴當共伯ふ、大法師の先ふ立ち後ふ跟ぜ生口無て追立々々左右川橋を渡りのくその路ぜ莊介と照文が手来疎遠の親族を小文吾と親兵衛を外

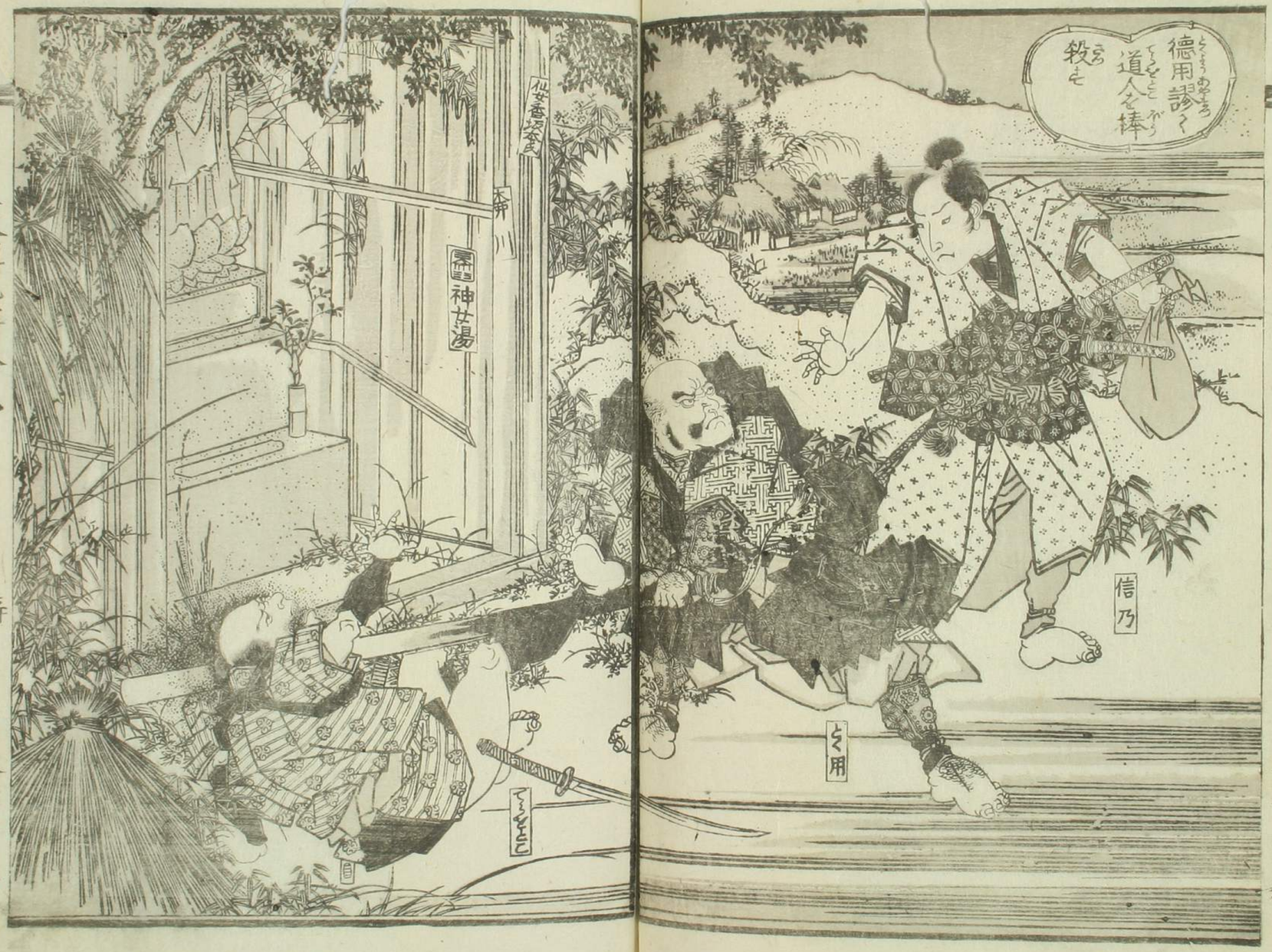
威の小父猶子なれば那と這との肩と比べ悄然舊ゐる談るも楽しからず。然ば左右川橋の那方なる西圃と畊も荘客们は這光景を遥に視て驚怕れざるはなく。途に約束土民旅客も亦逃躲れて遊楽なる者なければ八犬士は十二分に隊伍を整へ威風を耀かして徐歩もくと半里許ばかり路の傍に一町ばかり入れる並樹のもとに前面に故らに三門を聳たる登時毛野は遽く先に立て道節荘介小文吾現八を嗅住め各這頭に憩人とゐる那舊院とあるべけれとゐる道節们は一議に及ぶ信乃大角親兵衛、大賢文代四郎も笑あるも毛野の意見を聚て大家あるべしと仰ぐ照文隨即伴若黨急直塚紀三六を吩咐て那里の光景を見て来よとそいへば紀三六は大家あるべしと仰ぐ照文隨即伴若黨急直塚紀三六を吩咐て那里の光景を見て来よとそいへば紀三六は立て遣ばるに姑且しかう麦を照文並に犬士们に告るを小司那里へ赴て隈なく検あらんよりは昔いまある大刹なりけん今現に所に荒果て草茸々たる処々に柱礎の遺れるあり。遮莫庫裏は猶ほ存れども井も竈も倶に崩壊て雨にゆ月も漏るべく白壁壊れて骨の顕れる処蟻る形る窓に似て然ば柱斜に倒て片假名のノの字に如く蕭子は朽て燕子花に疑る低れ守る者なく但庫裏の背の方に編小屋る白屋あり其首に羊六十許る一個の法師が柱に背を凭せて打眠て在りしを山猫寺猫と問んと思ひて暫く吸覚りに熟睡

あるを聾児多く狡応せざれば猶ほ走りかかるに及て報ると照文らに聞て且犬士们の意見を問ふ異議あるべきあり。既に卒とおろおろ連立て大家に入り邊に近ふ柱礎に腰を掛て潜り入ふ現紀三六がいるどく寂寞たる廢敗院昔の餘波の礎のみ荒々たる夏草の裡に驚鷺の立ち去るを見て雲に入る青葱たる新樹の蔭に郭公鳥の聲高く啼て笠を喪ひ露佛像は膝に茨の花開て鍼の蕊に跌坐あるに是をも鼠の栖に做まる埋井に蹲る狐の尤あるに衆鳥の巣に白石上に鬼の足跡多かり正に是怨仁乱離の災に遇ば嘉吉の兵燹に亡びる土堂伽藍多くべしと思ふ八犬士は大賢文代四郎と共に伯に立聚て彼を視る程に毛野は紀三六を案内して庫裏に背に有とゐる白屋に出て検るに在りしを一個の法師は那里に出て影もなく其頭に立る石地蔵の水盤の左右に隅に塩と土器に杉形に荘衣るあり。這石菩薩に罪に詰る人あり。然らば那法師の供へるべしと猜まるのみ人在らばいかに由なし。又這白屋の前面に大なる竹叢あり。折て壊て乗れば笹の或は二寸或は四五寸なるもまばらにありけり。毛野は那法師のかつ来るやと一霎時白屋の檐下に立在りしかれども既に傾け

又紀二兵を先に立て庫裏の邊に来たる折七犬士い、大照文代四郎と俱に裡面に入て憩ふて在り經稜素
頼德用堅削們都て生口毎に外面を葛龍石或い老る松に數珠して照文の殺兵伴當們ち成ぞ
たる現庫裏の貴子い朽られも猶膝と容る処を求めて遮莫逃げ求めて見れば猛き草を踏み分せ
そと打布ゝ大法師い笈を上座に卸し居て徐ろに數珠を爪繰て坐り開が身傷ふ七犬士と照文代四郎も
圍坐をるふ手野々尽生命を照文の命令に今日の闘戦い不慮の事ぞ戦飯の准備をすれば熟もそ東
西欲ゝ時候をべと思へども市遠くて微めゝ犬阪王智裏の誉あり好主意いぞ思と同ふ信乃ら
推禁めそを咱們豫ら准備をるふ和られも細小の盃あり連立来る六兄弟見も吹もをるを見てその
餘に告ざりけれ先や來歴を解んとの事の顛末と原ふ信乃い鄽宿中途を舊稲塚の小杉木をめて居
ヨの敵と戦を走らと那德用と戦ふ德用い武藝あり且膂力人に勝れて六十斤の鉄杖を恩鐵の座杖を
両手に採て一霎時い挑ゝられども分に過る器械なれば漸ふ如意ふて腕乱れて堪ずけむ怯れ衆徒を
罵励て掛助と討ると急をりけれ初逃る悪衆徒們一度に吹と返し合せて推捕綱て戦ふを時に勢

風猛に起りて天を翳る塵埃に敵も信乃さへ仰さまに吹滾されて打撲ふ兵別れをるに然ば德用も
悪衆徒們も怪に風に怕れて逃ゝ欲然ども猛に間には迷ひて心ともなく退去り欲這頭に敵い在ると
猜ふ信乃い剛才川の邊を敵の銃筒に中て疾雪們に倒るを見て疾那里へ赴く
安危を俱に忘れ心頻に慌て撥拂ふ橋ある方に走りもく欲せに黒白も別ず暗けれ鈍き投ゝ方
に届らぬ小屋の邊に迷ひ来ん訝りあり那這と捜ふ探量るに編小屋路傍に繁堂を鄽に
あの処を過ぎ折しも見い正可に是ぞと猜ゝ姑且風を避んと躱て裏面に入て捞検るに四面を
僅に六尺を過ぎず立像の石佛あり肩に風吹採られ狭出入に障りあれば言堂座の石に尻を掛く風の恬
るを待程に半時を過ぎて風歇ゝ塵埃鎮りて天の明けるに異を登時信乃い這路傍小堂を本尊を
肇てをるに則是石造の地蔵菩薩身材五尺許るに臺座の上に立をる素より石の良ども面部に鉄
なる処あり且茜染の布裏の麻の紐を附るに東西に納て錢四五百文勝附るに頂に掛をるに其為体訝
あれば合を卸て検るに裏い地蔵の頭巾るべ米弐雑許藏てあり熟思へ合れば皇裏に大庵を施行の

折最後ふ来まけりとふ那忠告の衰老法師ふ紀二六が計ゑ残れる米二斛あるゝと銭五百文を取トゝ宵ふ
これれふせう　　ど　　かのよろたちー　　このぢざうがさう　　けげん　　　


徳用諺く
道人を棒
殺せ
信乃
とく用

仙女香次郎
本神川
神女湯
てくもと

晦冥ふ做りて。迷て這里る路傍矮堂ふ風を避々料ずも。徳用を擒虜ふ為る地蔵菩薩の霊應利益の首尾を解示して。壷表頭巾の米ゝを乞又佛像の項ふ懸る銭と方金さへ指示ふ。我們ハ今見らるゝ虜ふ為る敵の悪僧俗と両所ふ戰ひ折も又幸して。来る路ふも。今る風塵の起るふ遇ねハ間く做りるゆゑ。意ふそゝ伏姫神の霊験冥助るゝ。狡但思ひ込るゝ。這石地蔵の利益ゝを建立の願主浄西ハ現和殿のいる。今も尚世ふ在る人狡いとゝり。心地いまれども。開ハ左まれ右もあれ。這石佛の利益ふ依て。多勢の敵と防く。准備を立地ふ做ゝ。ゝ思ひの隨ふ克上と。敵の頭人悪和尚們をかゝ如く虜ふ去たる有徒ふ那隊ふ鐵砲ゝも。庵主ふ。蛮崎生も。蜆雪も。恙ふ。奇ゝ刻ふ。稱ゝ俱ふ跪て。地蔵菩薩を伏拝ゆ。側聞サハ個の賊兵も皆駭然と驚ゝ感ゝ深く信胆ふ銘ずるまでふ。取ふ。深く思ひ込の。這時徳用ハ息生。ゆ。ゝ。信乃ハ賊兵ふ素ゝ取ゝる。裏頭巾の施米ゝを腰ふ纏て。ゆ。ゝ。ゝ。ゝ

咱們いかでかまぐとらいて躯て退けば。荘ル毛野大角現ハ小文吾も立替りて屍骸を觀て作麼這道人い何ぞあ故ふ犬塚和殿ふ舊怨あるやと訝り問へば信乃が答へ。その実ハ隊名ふ解示さるれ。又思ふ合さべ。這奴ハ則別人ふ非ず。那甲斐の猿石ふ。四六城木工作が小厮を。出来介と呼れ。若と量裏ふ名曳ふ哄誘さまで。酒家と誣て。不軌淫奇の證人ふ。そもそも伎倆を發覚れて。名曳が死刑ふ。直れ。折這奴ハ追放せられ。人見ふ。その後那里ふ在るや。知るすし。絶てなりしふ。その地ハ這奴が故郷ふ。欲然らば流れ来ふ。今大我を殺すべしとて。同士殺をせられて。身と喪ひ。因果覿面といへども。あの餘も隱慝積悪の餘殃ふ。人ぞふ。蛮崎生ふ。仕ふる那安西出来介ハ義侠の與ふ。身と殺して。苦ふ。名と貶ふ。這奴も他と。名ふ同くて。善悪邪正死ざるまで。雲壤の差ふ。亦是宋曾の曾参狹めて。整言と。做ふ。然ハ思ふ。と解示せば。大家数馬ハ。且嗟嘆ふて。天理彰々隈なく。亦今ハ。ふ。ふ。ふ。米の来歴と。大照文ハ。解示ふ。後の話説甚麽ふ。開ハ下の回ふ解分ふ。聴ね。

南總里見八犬傳第九輯卷之十九終

東都　曲亭主人編次

第百二十回

犬士露宿して追隊を迎ふ
老僧袱を褰て寶冊を示す

却説犬塚信乃戌孝ハ。鄙ふ憶ふ。憩ふ。路傍矮堂ふ。あり。地藏菩薩の奇異利益齎ふ。なる米の来歴を。照文ふ。大代四郎親兵衛ふ。漏ふ。とく。四六城の舊僕ふ。来ふ。ふ。ふ。

素より菲薄にして念佛の外所作なければ君侯御父子は御盛德と和殿達八犬士は孝義賢才に因縁あれば世に今逸漏に及ぶべし非情の石像灵異あり。今日の大厄を救ふ玉ひ。利益眼前疑ひなし又風雲の天助の如く伏姫神の擁護なるべし殺神の實助に刻〻くく佛の利益に促迫なるを是神佛の異なる所以賞罰の差あるに似るも悪を懲して善を與なる天理の外にあるべからず寔に浅ぐ沉幸なりと感嘆に他事なし〻と信乃いはく餘の七犬士も我們なるべし然らんやと俱に謙遜なりける姑且て信乃が毛野に命じて這米を才に二斛あまりあり。少ふ我一路兒は庵主姥雪崎主僕殺兵と俱に二十名是に我們八名を加れば都て二十八名の食料なれば粥に炊ぎ一碗を各啜るに足るべ那白屋に鍋に釜と問へば毛野は頭を掉て否那里に貧子に布る敗筵一枚あるのみ鍋釜などあるべきや答を道節うち听て若〻しく和殿們も知るごとく其米と囊の侭に水に浸し壤に埋めて上に柴を焼き蒸れて躯て飯に做るべ。なを野陣なを鍋なを折戰飯を炊く者の必ずある事なれども人の多沉米寡沉は粥より外に甚だ多くとへば莊次點頭て現なの米を足ざれば一握宛とても一宵の饑を凌ぐもせんそも塩なくては不便ようとのを毛野いとゝて否塩は有り塩は有り咱們方僅這庫裏の背なる白屋の邊と撿ぶに折其頭に在る石地藏に人の供る塩三土器あり又その前面なる大竹藪に筍兒の生るを沉筍兒は自生の侭拔ぎ〻く梢を伐垂然而竹の枝をのぞく根まで掘り節を串ぬき上に将酒油を沃ぎ入れその四下の土を穿て何れも新に焼とたいその筍兒蒸熟して味ひ烹なる勝れども如此まれいその明年其頭に筍兒生ることあり。寔に好事の騎饌なれば其に倣んとにはあれども藪なる筍兒を穿採ぎて開も壤蒸に倣なるべ飯の足ざると補ふに合米に妙なるべとの大家欽びて毛野が萬事に脱落なく佞なる折にもこの逸早なりと誉まけり佞而信乃は紀二六に佞々とあるに沉そ件の米を遮與んとなるに囊は原是石地藏の頭巾なれば二斛の米と容るとも二斛の飯は蒸〻て何を欲得とそ求るに大の頭陀囊の白布單なを製れるあり。是とろ〻なんとそ笈を啓けて出さんとそれぞ現四五

舛の飯を容るべし。登時信乃又紀二六が示に依て米の甲乙両箇に嚢に分ち納て水に浸し。そぐ俄沙く土中に埋て柴を焼き飯に做るべし。又鄙に汝もとらん竹叢最に生出る筍児を多く拔採て皮を剥祛ぎて梢を伐葉根まぐ節を串にして石地蔵に供る塩を佛れ乞禀て筍児の節の内へ塩を班るく好搗入まて壌蒸ふしく皮を剥ぎと教諭ず照文も詞を添く後に紀二六その美に要る奴隷毎に偽せて安くせよ面白くとぞ其紀二六ろ

ろる果て嚢の米と頭陀嚢さへ受合るろ引提て躯く外面へ退のけ。その日四月十六日

ゆそ日の最長に最中なれば朝のゆとなるべきの時までもまぐ暮果ねど八犬士は那邯鄲客舎に憩ひ盧生ふるぐれば件の飯の蒸るまぐ假寐の枕を求ぎ大家親兵衛を琢客まそ、大照文代四郎も俱に草祠に圓坐しく閑談数刻に及びる當下小文五は親兵衛に向ひ。嘯仁汝が富山に出世して老侯に見参の始より素藤を征伐の支の趣又いぬる日両国河原ゆく。蜑崎生に相別れて素藤を再征の為水行を上總の館山へ赴く折のゆまでハ。

蜑崎生も姥雪も對面の折に聞かど。爾後のゆくさ知ぎ那折上總へ伴ひまと。

那三個の一路児とそこの地に倶しく来ると問へば又荘仆もゆつる隨に親兵衛と次園太郷三孝嗣の奇稱を只顧感ぐく已まぎ又毛野と道節い孝嗣が館山まで軍功の有や無や。那身の安危とのふと問へば。信乃現八大角も又、大照文代四郎も齊一膝を找めらふく。と問れる親兵衛憶ぎ歎息して肇て蜑崎生に素藤伏誅の支の光景及妙椿が富山る牝狸やそあり。孝嗣並に次園太郷三も戰功いあるぐ八犬士に先ぎて館に仕ふるんるを欲せぎ又親兵衛に從て結城へ来ぬる路の程今日諸川の這方ぎ親兵衛い憶るく一個の法師に喚留られて、大庵主の尼難を詳に告られしぐ路次ていぎぐ。左右川の上ぎ緝捕の頭人長城惣利の馬の尻を撻走しく人馬を急惣に滾ぎ落し。敵の殿兵と拗ぎて、大代四郎照文主僕の急難を救に折後れて来ぬ孝嗣次園太郷三も共侶に那里の圮橋を渡る程前面の藪蔭に敵の伏兵あるぐ放ぎを鐵砲に件の二人い殺

落されて急湍の為に流れや亡け骸も住めぞ做りーかど天助風塵の奇特ふよりそ就敵或ハ同士殺ー或ハ川に顛陷く、大代四郎照文主僕と拯ひよりと徒々と告知ーて又ハ安ら那折風霾の天助とあり必是伏姫神の霊験擁護る云ふ里見に舊縁ありけれいとく狡忠孝義俠ヨヲくるる我五個の一路見て看歆ふあるける神慮い料のかけれども鄙語ふへることあり藥の死ざる病人を治ー神の高運の凡夫と衛る然い孝嗣次圄太郎二ハ果敢く川へ殺も陷さ三あ俱ふ命數盡さるるるむ左も右も云ふ惜しけれと不娛ーて具ふ解示せ、大照文代四郎も那折のるとと出て人各幸不幸の同ーらぬと歎けり今これを听く毛野道節荘介小文吾信乃現八大角も皆胸を浅ーて孰ら浩歎せ云ふ惜むふあるる孝嗣次圄太郎二ハ一期の滅命先縁虚ーかるーて偶ふの地ふ来けるふ再會の本意画餅ふ做りーい造化の小児ハ失策るるとのさることを知ざるーー果せるかるとと皆共侶ふ送恨る方ふそけりそ中ふ道節い憶ば聲を励ーて今番孝嗣ハ三友の横死い悔て復ーふ歎ふれども犬江ハ那折ふ寃家の頭人長城惴利とやらんと討捕ふ慰るよ云ふあるそふ只その馬と捷走ーる者ハ川へ投るのを見ふ開ハ亦仁の過ーる當の敵ふあるもとも皆同悪の奴ハ一ハ生口毎の首殺を陷ーて這憤怒を洩さ三ハ何をもて孝嗣ハ三個の亡魂と祭んやと性起ると毛野ハ推禁めくそちらと易ふ事ふれども今陸らくと思惟ふ那風霾の天助妙応又犬江ふ中途ふ、大庵主の急難と忠告ふ云ふ法師のふ又石地藏の奇異利益都て躬方ふ福ありーハ甲も乙も總括めそ伏姫神の神所行ふ云ふ開を何ぞと推てもふふ神灵ハ是形貌ふ云ふを物ふ託ると云ハ形貌ふ亦ら那忠告の路上法師も亦路傍矮堂ふ云ふ石地藏も皆是我姫神の神所為ふぞあーふ云ふ偽る妙応ありるる里見の家臣ふ云ふとそ忠孝の後生義俠の老人を已殺ーふ做ーふんや那命數の竭ーると竭ざるとハ誰ら知る云ふ非如那三個の知音ハ敵の鐵砲ふ殺されとも窮所ふあるる死ぬ云ふ又急流ふ陷ーるとも水戯ふ熟ーて好泅ぶ命を免るふもあーんハ云ふ屍骸を検ぬ云ふ云ふ短慮ふ云ふと諫れハ荘介小文

吾もその議を好しと現犬阪の意見めでく結城の城より追隊の士卒ゞ今ゆもあれ案ねず安
内ゞ惴利も俱せず況縦惴利ゞ来ずもあれ真の追隊ゞ向ゞ自他の邪正を解諦まく惴
利を乞て怨を雪ん言聴れぎいその折ゞ生口毎の首斬き落して追隊を破りく安房へ帰り
ん并ゞ已とゝゞる義とゝへば大角も亦ゞ遠く唐山の礼を按まゞ君父の讐ゞ與共ゞ
天を戴ぎ兄弟の讐ゞ兵を復さぎ朋友の讐ゞ邦を同うせずとゝゞそも亦時宜ゞ依るべ
のことと論せば、大も亦ゞ安ゞ約莫這回の念佛供養ゞ先君並ゞ列将士卒の追薦の為ゞ
るゞ精舎ゞ阿脩羅の街衢ゞ変りく殆危窮ゞ躋ひ一個も敵を殺さぎりく他ゞ同士殺まゞるのを恁て拯僧本来の志願ゞ稱ゞを抉ひ母ゞ今一
朝の怨ゞよりて殺伐の義を行れるべその理ありとも慨けれその義を表容ゆれと陪話まゞ親
兵衛信乃現八照文も代四郎も、大の意衷を思ひ汲て俱ゞ詞を盤き程ゞ道節遂ゞ思ひ
かへしたり微笑ひく答ゞ各意見を殺まりゞ現我為ゞ良策を那孝嗣ゞ咱ゞ犬阪犬

江の知音ゞ又次圓太ゞ犬田犬川と共ゞ父左衛ゞ這二三子の意見を聞ゞ我
一個殺伐の義を上目とゞゞ傍若無人ゞ似れども非理暴戾ゞ仇の為ゞ益友三名を亡
れる憤の甚方ゞ漫ゞ劇談ゞ傍痛く思れけり遂ゞ解て爲又餘談ゞ
及ぶ程ゞ紀二六ゞ蒸る飯と筍児と菅笠ゞ載せ奴隷ゞ持て来て大士と照文ゞ報ゞ
仰ゞ儘て米と筍児を壌蒸ゞ仕りけりゞ是商せ米ゞ奇くも一倍殖て両ゞ固の嚢ゞ
満ゞ込ゞ恁て八上下二十八人の夕饌ゞ餘りあるべしゞ
ゞ是も亦伏姫神の真助る狩とゞゞゞ敢亦ヨ辯せず飯ゞ各腰ゞ吊る水飲の椀ゞ
出てゞゞゞ壮衣ゞ付ゞ筍児ゞ蒸ゞ後ゞ皮を去て切ゞ紀二六ゞ准備ゞ栖の廣葉ゞ
うち載ゞ人別ゞ薦めけり登時信乃ゞ古歌と思ひ出ゞ家ゞ筍ゞ盛るのを草枕とうち
誦まれば大角躰て下と續て旅ゞ行れば椎の葉ゞ
與るゞゞあるべし然ば世の常言ゞゞ飢る折ゞ東西皆美味ゞ各腹ゞ充満ゞ

その餘の夥兵伴當們ふそ紀二六ふ遽與もふ他們の都て漏る者多く飽までふうべふ。猶翌の早餉ふ做もべき餘飯あるとふ蔬食を啖ひ水と飲を肱と枕として今宵をあふ明るも亦是君子なるべしとふ毛野が秀句ふ與あれば大家笑扇ふ入るふけり左右まる程ふ日の暮るが照文ふ八犬士と商量まる。夥兵と紀二六們ふ課く渉庭ふ篝火を焼まふ羊分朽なる散木と老樹の枯枝ヨれば通宵薪ふ匱るまで八犬士照文們ふ結城より蒐る蒐追隊をまる曉まるふ這里ふ憩ひと人知ざる狹小夜深るまで外面ふ推寄まる敵をければ背を合ふ膝を抱く。一霎時疲労を補ふ程ふ夏の夜いと短くて那方ふ鳴てもくらん杜鵑横雲の隙ふ聲のまるて鴉ふ茂林を離れても城より追隊ふ蒐られ昨夕殘れる飯あれば又給児を壞蒸ふて大家早飯を果まる犬士們ふ多不娛くふ城へ使を遣して那里の答を听くべき狹然まふ間諜児をして城の動静を探ん狹を商議ふ時を移まるが已の左側ふ方ふけり出処ふ這廢院の三門を只管ふ敲く者あり。紀二六まく聲をふけて來まるふ誰やと問ふ當下敲く者答てふ旦ふ

結城殿同宗の老黨ふて小山大夫次郎朝重と喚做ふ者ふ念佛供養の仏者ふ大庵主と云ふ。並ふ那法遊ふ来會の人々も昨日事あり。その処ふ止宿のよりとふ聚くふ妙知りく。事の仔細を尋問ふく且君命を伺ん為ふ馬を飛して來りまるふ三門をうち開く。對面せられよとぞ喚さける。照文の夥兵伴當們ふ呼ふて目を注まて素破敵とて寄せさまとく。昨宵准備ふ竹藪ふる竹を伐く火ふ炙り各々制ふの竹槍を挾ふ身を構て防ぎ戰んと欲まる。紀二六制ふ退けく。そ〻く庫裏ふ走るゆ紀。八犬士照文們ふ件のよりと注進まふ然ども犬士ふ毫も誤ふ速ふ對面せまふ怯れうと思れん箇様々々ふまべけれそ〻大照文代四郎ふ示〻く俱ふ立出けり。開ふ中ふ信乃と親兵衛ふ三門の邊ふ赴く。餘の六犬士ふ庫裏ふ距ること三十間許ふ〻苔生まる秋尾石の中程ふ在り。その後方ふ〻大法師の左右ふ從ふ照文と代四郎在り。又照文の伴當夥兵們ふ竹槍を乗列を整て六犬士の左右ふ侍り。紀二六ふ信乃親兵衛ふ從て又三門へ赴く。生口毎ふ那這る。樹の下ふ殺れ

文錦堂蔵

たり。その為体武備儼然士卒二十名ゐ足らぬれども數萬騎竜まる城郭ゐ劣るまじくぞ
ありける。當下信乃と親兵衛ゐ倶ゐ二門の裡面ゐ在り隨即紀二六をもて答るやう小山殿ゐ
のまらいえ知らず如くその処ゐ、大庵主八犬士並ゐ蜑崎十一郎照文姥雪代四郎與
保仁主僕甲乙二十八名昨日より止宿あらく来命をもて久し留守のあん使ゐいで二門を
うち開くべく入れまゐらまる該られども いかゐせん這門酷く傾ぶきたれば開くべくもいかゐ我們這里へ
立寄りて折角門の敗れる処より入ゆ給ふの毛と亮査あれりとゐ聲爽やかに委ねる朝
重具ゐうち听ぶ。又伴若黨をもて答るやう趣きをるゐ但し當國守の使るゐ角門
より入られ給ふ。開ゐ君命を辱るゐ似て面正しくもるに所ゐ今ゐの寺院ゐ在宿せるゐ八犬士と
やらんゐヨカの少年これゐと狡風聲ゐよりて粗知れり倘その言実なるば這二門の傾ぶきた
ゐを推正しく開れんやその毛ちうう及ばず角門より出迎て對面せるやと喚るを親兵
衛守あ人を勃然とく。みづうう怠ゐ答るやうゐ趣その意をゐるゐ八犬士のヨカなる。獨

その少年のまるうんや。昔の義秀親衡ゐ十二倍るゐ及ばゐ。就中大田小文五ゐ量裏ゐ越
路ゐ旅宿の折暴るる牛を隻ゐ駐めく面色変らず自若なり然ば這傾ぶきる二門を
推正しく開んゐいと易ゐ為べけれども余あるゐ小山殿の為ゐ門卒ゐ做るゐ似て面正しくもるに
所ゐ之所詮角門より入らんとるば目今這門を推倒して廣ゐ客を迎へん歟ゐ撲
きゐそと解誇りて二門の柱へ手をかけて揺て推せば忽地揺々と揺動ち尾隊碎けて覆るへ
くぞえりぶ。朝重驚ゐ聲高ゐ怒るゐ非如無住の廢院なりとも我身一箇の
所以をもて這二門を破却せられば後世の罪障免れがたけん我諫め卒然らば角門より入る
けれと勸鮮ゐ親兵衛冷笑ひて卒と信乃と共倡ゐ大士の隊ゐ退ぶけり登時紀二六な
るゐく二門の傍るる件の小門を開く程ゐ朝重馬より下立てヨカ原野兵伴當ゐ皆門外ゐ
笛置く絶ゐ両個の伴若黨と東西持る奴隷二名と鞋奴をのゐ従ゐ角門より入来ゐるを
とれば年齢ゐ五十許ゐてその骨相タくぞ身ゐ縹緋綯の夾衣ゐ唐織の戰外套を披

ゑぎ。もえぎ。ぞんも。下ゐ青葱純子ゐ黒沁下同道ゐる野袴穿て白柄ゐ螺鈿鞋の両刀を腰ゐ帯る汗衫の上ゐ
黒草絨の身甲ゐく。網鎧ゐ銀の鋲打る臂縛袖の端より顕れる又八犬士照文代四郎い
昨日の侭ゐる扮装ゐく。野袴の織色両刀の表装も各同しくれども皆千金の鋭刀を帯る
人も咸千金を打扮と今ゐゐ小山朝重ゐ方れば二の町ゐ似て二の町ゐを骨相都て弥優て
適一人當千の勇士ゐるぞと大ゐいゐ驚ゐ甲斐の指月院ゐて才ゐ信乃と道節が武田
信昌ゐ主ゐ見参の折ゐも看官誉ざるいゐるりてゐゐの日ゐ八士具足く且従類もヨワりきば
英氣先度ゐ十倍しそいと晴ゐる對面ゐ然が躬方の郷兵伴當们い愚ゐも似ゐ結城より
来ゐい討隊の軍兵ゐらぐ以平和の使者ゐれば幸ゐるかゐと含笑て言の仔細を听く欲
ゐさゐ各耳を傾けゐ。却説小山朝重ゐ樹下ゐ敷ゐれる躬方の僧俗と尻目ゐかけて毬石の
中央を徐々と来ゐる程ゐ、大法師い照文と代四郎を左右ゐく找ゐ出立迎ゐく且法名を告て
對面ゐゐ来意什麼と尋れば朝重答て某い結城同宗の老當黒ゐ小山大夫次郎
朝重是ゐ君命ゐより各ゐ尋問ふゐ一義ゐ那犬士とやらン少ゑる八個の施主も在宿ゐ
らむ迭ゐ坐して談ぜべとのひく後方をゐゐれば伴の奴隷ゐゐゐ携ゐる草席十枚ゐ
ゐゐを東西程ゐく布並れば犬士も亦找ゐ出て朝重ゐ對面ゐ這廢院ゐ庫裏ゐれども朽
敗れて殆ど如く白屋いと陜くて舊ゐる隨ゐ荒ゐれば膝を容ゐゐ処ゐ無ゐ席ゐ准備
届ゐ朝重ゐ脱落ゐるを人々都て感ずゐ。偖而主客揖讓して俱ゐ程よく坐を占
ゐ朝重、大ゐうち向て只今尋問んとのひく則是別義ゐ和僧い嘉吉の役ゐ躬
方戰歿の菩提の為とゐ結城の古戰場ゐ庵を締びく昨日結願供類の折十個の法師
来會ゐく法筵を相資け且施主ゐて貧民を児を賑しゐゐ問ふを、大ゐうち听て
然いい那先亡の菩提を吊ひい我舊君里見殿の先考季基、王法弼義烈院殿を首ゐて
故當國守氏朝王並ゐ列将士卒の為ゐ宿願昨日成就ゐれど敢他の施主の帮助を討ず
去ゐゐゐの芙安房へ少ゑて。悄地ゐ遣されける代香使這蜜崎照文ゐ齎ゐ布施の金

子あり。拙僧素より寡欲ゆゑ然る東西を欲せざれば。その時照文語を紹て某大士と相計て
残さず施約ゆ牽ばかりさと生れば、大又ゆゑ昨日法筵を資ける十個の法師ハ舊識ゆ
ねど招ぎ〜て来會せられ且石塔婆を一夜の間ゆ造り出されー奇工あり其長老ハ能化院の星
額とり守るのゑ寺ハ那里ゆあるやらん開き守漏ーいひきかるゆ昨日城内より絹捕の士卒うち
向ふと守ゑ〜祈那長老ハ徒弟と共伯ゆいくぐ寄隊を和解んを開ぐ途へ出迎へ〜その隊ハ
頭人長城生が捕捕りゆゑと守るのゑと告るを朝車うち守て分らん又大士達とあらン何ぞ此故ゆ
當家の士卒と逸正寺の法師ハをヨく虜ゆせられーやと問へば道節毛野荘介現八小文吾大
角ハ経稜素頼惣利が德用を帮助る詐偽の絹捕のゆ両所の茂林の戦ひを箇様〳〵と
解示ーて我ハ始より人と爭ふ心ゆ遊莫殘忍奸虐ゆ悪僧俗ハゆ失れん命惜ーにゆ已
ゑ〜ゆゑ他ハを虜ゆ者れゆ敵一人も敢殺ざゆゑの地を遠く立去ざりーハ國守の處分ゆ依ん
とて〜その義を查ーゆ〜と異口同様ゆ相況ハ信乃ハ亦德用を俘囚ゆあげ為体及略傷

殊堂る石地藏の利益奇特の崖畧を倦くるりたと告るゆゑ親兵衛ハ七大士ゆ後れて昨日
這地ゆ来ける。左右川の邊ゆ、大代四郎照文主僕の危窮を救ひ當日のゆ及一路兒孝
嗣ハ三人ハ那川の圮橋ゆ惣利が伏兵の鐵砲ゆ撃れ水ゆ陷て厳も住めざるーゆその折風
霾ゆ天の祐ゆ惣利が隊兵ハ或ハ同士撃ゆ〜或ハ水中へ滾陷て死活ハ知らぬ做ーゆ
まぐ。詳ゆ陳示ーて又ゆ我一路兒孝嗣次園太郎三ハ莫逆知音の浪友ゆ忠孝義侠
傳罕之介ゆ寛家惣利を撃漏ーうければ迷恨今ハ安方る。那惣利を解死人ゆ
ふく怨ゆ雪ん為ゆ姑且這里ゆ露宿ゆ〜國守の處分を待いたといへば道節聲高やゆ
我ハ既ゆ商議ゆ那惣利ハ罪を糾ーて我ハゆ遽與ー賜り且星額長老師弟を放
ちくその寺ゆかへされゆ生拘る経稜素頼德用堅削ハを返ーまゆ其然らぬハ今面前ゆ生
口毎の首撃ゆ落ーく怨ゆ雪んいゆゑと惣るを信乃ハ推禁め朝車ゆうち向ひて今親兵衛
がらんーどゆ撃ゆ〜ゆゑ克ゆ敵るゆを殺ざりーハ豫より、大庵主の教諭あれい先亡菩提の

本意ゝとぞれて殺伐を宗とせざ然らでも仁義ふかうぞれざるべて動さる我们が本性都さ
かくの如く伝ひとそ三個の友と奸悪人ふ亡れて猶是をも忍びくい亦何事とか忍さる為に
言聴れるべ幸ひるゝんと緩急各理を盡くく残る所いなくゝと朝重熟所果て感き感と
大々こゝるを為ふ貌ゝ改めて愀然として答る安う家ふ暴戻の臣あれ是則主君の恥ゝ今番
経稜素頼惴利们並ふ逆正寺の住持徳用が非理非法の挙動ふ故あて昨日より當
城内ふ忍えゝ某則君命ふより各の足跡を赶寄ひて越ふ對面を得るかふ吉の合ふと
知ちく欲くて胡意来路と問試ふ豫我ゝ一趣と異ちゝ抑里見殿の先君季基朝
臣ふ我先君故判官と同義烈ふの良将ふて交も亦浅からぎ俱ふ嘉吉の役ふ戰歿の後
年ゝと廻ぢて當家再興の喜びありとへども乱れる世ふ舟車届らて好を安房ふ結ぶふ由ゝく
遠くもあらぬ筑藩屏ゝ胡越のごて陳閥ゝふ這回ゝ大庵の念佛供頼ふ嘉吉ふ戰
死の列将士卒の追薦の與ふして且舊交を忘れざゝ自他平等の心操を成朝始より

ゝ知ふべ法會を資くべゝふ庵主ふ諸君子も名利を數ふ心ゝく告られざるを是
非ふ及ぶ分るふ逆正寺の住持徳用當家の驕臣經稜素頼惴利们敢あの義城
思ふとゝく妬忌の邪念を挾て城より向ひ縛捕使と誘り猛可ふヨヌ勢を駈催ゝく庵
主並ふ来會の諸君子と推捕へんと欲せゝふ友て他们ふ生擒られて恥を當城ふ貽すふ至
る言語同断の僻事ゝれば縱諸君子の愁訴ゝくとも允されゝ罪人ゝぞ中ふ長城枕
之介惴利ふ乱妨の折大江主ふ馬を撻れて人馬共倒左右川へ陷られども流ゝく川下より
岸ふ登ゝく其頭ふ相識る村の長剛九郎と喚做ゝ者の家ふ立寄ゝく水ふ弱ゝ馬を
勦らせ濡れる衣裳を火ふ炙らせく敗軍のゝを告ゝ剛九郎ふ推驚と倡ゝく盃洗
薦る程ふ主客共倒ふ乱醉ゝく口角を泡ふ飛ゝ果ふ惴利怵ぎゝて刀を拔て斫んとせ
ふ醉ゝる者の癖ゝれば鈍や刀を抵捉られて反ゝく剛九郎ふ首を斬落され剛九郎も亦
國守の家臣と斫殺ゝゝと後悔ゝく免れゝゝと思ひけん即坐ふ自殺ゝるけり是ふより近

げぢよ
ぢうろう
ぢうろう
九郎
砂
らんとき

隣の荘客们驚誤ぶて時を移さず城内へ告訴あく件のよを稟き折ら経稜素頼
ゞ列卒伴當及惴利の暇兵ゆも逃て城内へかゝるもヨクあて隨即其者毎の許ふよ
ゞく件の僧俗の僻事等え和殿们の武勇風霊狸の奇瑰経稜素頼徳用们ら生
拘れる事まで。その崖略を等知りゝべ猶も堅ふあく鞫問まそいらそ。その実を糺ら有徳
ゞ程ふ逸疋寺の先住未得老僧轎子と飛ゝ。城内へ参上りて佛の利益冥罰と箇
様々々と愬らる。是ふよりて那怪風ハ庵王並ふ諸君子の為ふ天助の奇特を知られ皆是凡
人ゞ所ふ非ぬを。王君成朝感心の有餘各位を迂蒐て宜ゝく謝せよと命せられる来意ハ
都てかゝ如。件の経稜素頼惴利ハ常ふ雁鳥を放ち田圃を損ら驕放るゞ等えるゞふあ
らねども他们ゞ親ハ忠義の老黨ゞ。嘉吉ふ戰死の誉あら又逸疋寺の徳用ゞ。家
人ふ相応ゝらぬ勇力ゆゝく武藝を好むと折々人の噂ゞ成朝とれを知るとハ雖ども他ハ當
家再興の日京都の管領ふ内縁あらて熟成稟ゝ功あれば甲乙倶ふ用捨せられとゞ

然ども他们ハ思ハゞ大ゝらぬ僻事とあらぬ惴利ふ同士鬬ゞとあらら
のゞゞ。各位の伴當とゞふ害ふ及ぶゞ。惴利ゞ大江生の一路児を二個ふ鬬
陷ける真罰ゞ。那身ハ村長剛九郎ふ斫殺され因果覿面諸君子今那首級を
撿ゝ。其友逵の與ふ恐をいらゞ解ゆらねとゝらゝ後方とゞらゞ。伴若黨ゞ携た
ふ。秋裏ゞ解披せゝ。ゞゞを親れば首函ゞ。内ゆ果ゝ。惴利ゞ首級を斂めてあられば
、大照文代四郎们及八犬士も照文の伴當暇兵も駭嘆ゝ。天理の當ふ恁あるべきを
感ぜざらゝけゝ登時朝重又ハゆゝ事の湊合是のゞゞゞ前ゆも各ふ告ら。未得
老隠居ふ對面ゝ。又那奇特を見ゝ。とのゝ又伴若黨ふ箇様々々と吩咐れゞゞ
ら果て門外へ遽ゝく出ふけゝ。小程ふ逸疋寺の先住未得老僧ハ嚮ふ小山朝重と倶ふ
來て。這廢院の門前ふ轎子と歇て在ゝふ今朝重ふ招れて轎子と立出ゝ。両個の喝
食ふ扶掖ゞ東西ゝ載る吊臺十荷ふ十枚の大袱とゝ被ゝと夫役二十名ふ肩擔

せて。主客の席ふ定けれ。大法師ハ立迎て送の口誼果て後ハ犬士照文代四郎も對面して請て席を設れば朝重も亦詞を添て儲の草席ふ坐らせけり當下未得ハ、大法師と八犬士ハ告るを。今番法弟德用ハ非道非理の言較を拯僧毒ふ知て呂願諷諫の詞を盡さ。らども他のまを。件の非道を資る二個の檀越ハ幽守譜第ハ重臣ハ。乳べ千言萬句も聽れ。ども。ち歎ていひ。ふ那人々ハ事の開場ふ庵主の法莚ふ來會ある。師弟十個の法師達を。根生野の隊ふ捕捕り。折我寺血氣の悪衆徒十名ハ旅胥ら。力ふ無し。肩ふち載て。毒く寺ふ。ねて。ふ。ハ。ふ那師弟十個の法師達ハ路ふ。猛可ふ重く。ふ。遂ふ堪ふ。ふ。ハ。ふ悪僧毎ハ壁伏られて反起んとも。ふ。ハ。ふ。ハ。ふ。ハ

索求めらるゝ。這廢院ハ止宿のよ。天明て後ハ少え。小山主ハ従ふく轎子或いそがゝ。俱ハ這の門前ハ来て案内を乞ふ。拙僧さへハ面伏るゝ。実ハ懺悔ハ為るまゝ先ハ件の悪僧們を。目ハかけ。屋ハ喝食達那吊臺と。幷寄せ。とらへて夫役們ハ。ち。ち。て。吊臺都て。寄せ並べ。桀ハ。秋と。寒秋。くると。親れば。斬ハ。悪僧們ハ。皆石地藏と。駝ハ。俱て。仰反り。苦ハ。眼と。睜り。歯と。切る。寘四訓を。殺ハ。佛ハ。ハ。世と。く。蓮臺室ハ。吊臺ハ。地獄の。呵責も。恁や。と。思ハ。猶。正。ハ。照。据ハ。嚮ハ。大の星額ハ。贈て。る。那。経巻と。五十金。財。嚢と。秋ハ。裏。ハ。俱て。這。石地藏。二。五。骸の。項ハ。結。有て。あり。ば。大代四郎。照文。主。僕。八。個の。大士も。今。ハ。ハ。事。新。ハ。心地。ハ。是も。亦。我。伏姫。神の。神。変。不。測の。妙。智。力。ハ。く。懲。さ。ぬ。ハ。神。謀。り。狡。と。思。ハ。ろ。と。いへ。ど。ハ。ら。も。詔。ハ。ぬ。徳。用。堅。削。経。稜。素。頼。隊。の。僧。俗。ま。ど。同。ト。崇。と。身。ハ。摘。く。舌。と。振。ひ。ら。並。て。皆。驚。ハ。怕。ハ。奸。虐。破。戒。の。先。非。と。悔。ハ。く。思。ひ。け。る。

第百三十九回

忠僕死ハ事る霊佛の起本
孝子京と去る傳燈の法脈

登時又未得のハ。ら。這悪僧們ハ受る寘四訓を。人々面。前ハ。ど。ら。ま。ど。知。ら。ま。ど。所あり。抑ハ。の。石地藏十體ハ。曩ハ。結城の家再興の折。當君成朝。主の志願ハ。先亡義烈ハの諸大將。忠死の士。卒の菩提の為ハ。建立せ。ら。れ。御佛是。ハ。始ハ。這廢院を。再興。て。居ま。ハ。ど。や。と。の。ら。れ。と。徳用ハ。喫醋く。思。ひ。け。屡。稟。ハ。掠。め。ハ。よ。ら。く。遂ハ。その。義を。停。止せられて。我寺ハ。建立。ま。ぬ。ひ。け。ハ。今。ハ。ら。思。ハ。合。ま。る。ハ。い。ま。る。日。我寺。る。這。地藏。菩薩十體。倶ハ。忽然。と。ア。え。ぬ。ざ。る。と。ア。ら。ン。ど。ハ。ら。者。の。あ。り。ー。か。ど。実。事。ま。ら。ま。思。ひ。ま。果。て。怪。る。ま。火。応。あ。り。拙僧。昨。日。中。途。ま。く。ま。の。ま。ど。思。ひ。ま。ー。ば。伴。當。と。寺。へ。か。へ。ま。折。那。十。體。の。石地藏。尊。と。ア。て。来。と。て。遣。ま。ー。ハ。十。體。ま。ら。ア。え。ぬ。ら。ど。と。い。ら。ま。ら。ど。ハ。ら。ま。ら。ば。是。ハ。の。御佛。達。ハ。則。是。我。寺。の。石地藏ハ。疑。ひ。る。ー。就。て。又。告。ま。ら。ー。ま。ど。ハ。ら。ま。あ。り。抑。這。廢。院。む。ら。ー。結。城。の。乃。祖。ハ。居。七。郎。

朝光王の建立あり。六道山能化院教主寺と唱へ做る。七堂伽藍の大刹なりしが、嘉吉の兵火に焼亡れてかの如くに荒果ぬ。當寺の本尊勝軍地藏菩薩に平將門の女児なりける妙藏尼の作るを我寺に迎執りなりく。秘佛として宝藏に在りとらひ〻樹の下に立ちて那德用は我徒弟なるに怠らんいとぐ〻くれども他ども各位に俘囚せられて這荒寺に牽れしと思ふに曩に囹圄の這寺を再興の沙汰ありし時德用が遮りく。禁めて稟ず悪報あり。那身と俱に同悪なる僧俗都て懲されけむ願ふに庵主怨と忘れたの御佛達に勸解と做しめつべ千僧の萬部の讀經に弥優しと必納受ぬらんいつぐと老僧の慈悲に涙に顕まく請求めて他事なをを、大法師を感嘆しく則未得に答るゆゑ妄に肇てあの廢院の来歴縁故を知りく思ひ合るとそ思へ鄙に拙僧那長老星額師に訪れ折その在住の寺の名を能化院と狹めくるのを結城城下の寺院に在と精しく問も質さでに原来件の能化院いまの廢院のなりに化現ぬ

ける。這十體の石地藏は逸足寺に置れぬのを。能化院そと告られ、當初國守の發願にあの地に建立做しまるせんとあり。由縁と并に隨に地藏菩薩に靈場なる基と示さぬ。しるむ然ばこそあれ那法名の星額に是地藏尊の額に是黒子ぬ。俗に地藏星なるべし。又その師父の法名を宝珠とあるものなれば。當に地藏の持せぬに麻る尼宝珠のようなると今ぬ思ふに悟りに佛法廣大なる邊なる量の善巧方便不可思議なるる。仰ぐべし信ぬべしと只管稱讃礼拜して身と起しく。吊臺なる十個の悪僧に向ひて。懺悔と薦め業果と示ぬて地藏經一卷と徐に讀誦あるまるに放免祈請の眼と閉合掌ぬ悪僧們に十念と授けしに破戒の罪障解脱やまず十體の石地藏は那身々と離れぬして苦患とぬ尚起べるもあらばければ朝重隨即夫役に下知して地藏と俱に悪僧們を載せ伏に吊臺と舁て先城内へ遣ぬ折未得に那經卷と五十金の来歴を肇て、大に知りて返しまるせんとらひ

去るべし。大いに決して諾はず。後竟に逆正寺の什物を偸みて、然び再度の奇異を恐れ、犬士們は餘談を惜まず。開中に信乃は亦語次に未得ぶ者の前に解示して、那左右川は程遠からぬ路傍小堂なる石地藏の背に建立の歳月を尋ぬ。嘉吉元年七月十四日。建立願主浄西と勒したるは浄西は法名なるべし。本貫那里の人氏なるや尋ぬ及せ玉ふ。扶と問へば未得は領を答てその浄西のなれる。拙僧故あるを具に知れり。他は和君達の先君なる里見季基主の馬の鑣奴なり。十八と喚れ者の身は卑賤なれども、その性は美なりて人の及ばぬ忠心あれば、季基主戰歿の折も馬の傍を離れず。その身も痛疵を負ひつゝ敵に向ひ、誰知れぬ程主君自殺の亡骸を肩に引掛け命を免れ、近き山林に迹を埋め。當晩季基主の亡骸を煙に做して寄隊の大軍退去の後有一夜十八は主君の骨壷と紀の大刀と甲冑を搭駝して我寺に潛来る。情地に滿ちて椿事あると倡て住持に對面を請ひ。その時逆正寺は我師の坊

住職なりければ訝りつゝ十八を方丈に召入れて。隨即對面せしかば。當下十八は其身の素生箇樣々々と首より鮮諦して。季基主戰死の折の光景を告知ること半晌許。然而いまだ烏滸がましくも小可已が情願あり。這主君の白骨と這紀の両種を悄地に御寺に執置て菩提を弔ひ。薄少なれども布施として圓金三十両を献ずべし。此は是主君季基朝臣鎧の脇鐷に藏め措れしを後に小可見出して且小可を御弟子に做さんとなり。祝髮得度の願ひを果さば。生涯貴寺に留りて火打水汲を旨命令に大馬の力を盡すべしと。件の金を薦めくれと麻るり身を投伏して請求るのみ他事なけれども。師の坊は願感心なれども。奴隷はいるかの志操なりと思れかど。結城氏滅亡の當時は事皆両管領の處分に依ざるなりのなれば心に儘かねと。叮嚀に諭さるゝ。祝髮は我に障りなし。願ひの隨意なるべし。但し那龍城の諸大將の亡骸を今我寺に葬らんは憚なきにあらねば後難実に料りがたし。汝然いまでに思ひ定めその金あるを幸とせよ。

當山より遠くもあらぬ武井左右川の頭なる此の墓所を購求めて主の白骨を瘞め墓表を造り立て箇様々々ふれつゝ世の本意を稱ふせん是より外ふ術あらじといれて十八沈吟あて世を厭く思ひ込うけん貌を更め額を衝て仰羨りゆ然らば先祝髪友の願ひとて亶ちあそ开ゞ依止宿と允されて次の日本寺の御前ゑ剃髪ゑ義をあせられて法名を浄西と喚做され血脈度牒袈裟法衣一具を取せゆひゝ十八の浄西ハ師恩を拜謝して亮一両月逸足寺ふ在り竟ふ左右川の頭ゑ一間四方ゑ地を購求て季基主の白骨と紀の武器三種を悄地ふ埋葬て墓表の與ふとて一軀の石地藏菩薩を石工ふ課て造りなせて細小る雨掩の御堂さへ建立ゑけ那金ふ思ひの隨ふ宿願を果とけり是より浄西ハ日毎ふ件の石地藏の御前ふ在て鉦を鳴らして朝より暮るまで念佛の聲間斷なければ近ゑ村民往還の良賤相憐愍て錢を投與へ或ハ餅握飯などを取らるもありければ浄西ハ炊ねども饑さるとなりけて

約束の一條ハ當時拙僧弱齢あて師の坊の侍者なりければ親しくそも考もしその大略をあ不えり然ハ又件の浄西ハ上毛なる舊里ふ留置る妻あて尚仏ゑ獨子さへ孚類せ之をけれども一ゑび佛門ふ入りより浮世のなを思ひ捨て妻をも子をもろくゝを稀なる風ゑ便ふも慰めせて過る程ふ十稔許の光陰を歴てその子ゑ年才十二ふなりける春母親病て身故ゑりて馴ゑり故郷ふ住不娶けん父を草ゑ葬て上毛より來ふけれハ浄西驚ゑ獻しゆふあるゑもなると思へども尚総角なる者と追遣ハ亦さまゑを留置んと欲ゑ浄西ハ石地藏を建立の折より来て這廢院ハ地藏菩薩の霊火迹なると思ふ故欲頼れ殘りし庫裏の背ふ最褊小なる白屋を締構て夜ハ寢処と做せるを子と艱ふくもあらざれば口ハ得ゑの子を逸足寺ふ扶て曳て有恁る奴の舊里より尋寄來ぬると爭何ハせん願ふ頭を剃圓めて扱使れゑ幸ひなんとの義をハゝぐ方丈ゑ乞ひ捨て回報を考ゑ那身ハ安くかゝ去りぬとの後ふ少えけりゑの年の春先住ハ遷化ゑ拙僧住持

あるければ那浄西が出家堅固の志操と豫ねて感じ思ひ久則他が所望の
隨意恥てその子に祝髪させて法名影西と唱ひ做しつ内典外典を讀学さるに一と学て
二三を知るオの捷れたるのみならずその性孝心深かりけれがその身のさうぶる五飡と親の為に
半分ちく暁毎に疾起出て二里にあまれる親の在処に赴き飯を餽りく天明ぬ程に寺に
還りて常の勤に就ること一日も懈怠なかりしかど初め人皆訝りく云云とのもあり一にその実
をも弘く發覚れて拙僧に人の告りく感心のあまりその夜分影西と召寄せて偽る孝行あるこ
とを汝が汝の饌と分ちて浄西が食料に日毎に取るまじきことかど影西敢従ぬ有
かるまで辱紀仰でいへども然りてハ親の心に悔ひぬ慈悲甲斐のなきうんとうしうち
罔しぬひねと推辭く尚始のごく暁毎に餽りかば拙僧いよく感佩しく他が飯の足さ
ぬ餓ものせと憐愍さに只何とぞく折に觸てハ果子餅を取らまるに開きたるべき持く
に親に餽りけり左右する程にその次の年の春の時候より浄西に風眼を病ひ

づひく久しくなるまで愈ざりけれが影西只頑憂ひ歎くく夜毎に水を浴て身濯をし祈
神に佛に願言して已が身をもて親の病着に代らんとのみ念ひしかども竟にその利益のあらで
浄西の三目にあるに影西のいくらも歎くよりと拙僧に告知して生涯親を看ることを為に
身の暇を請ひ拙僧まもく憐愍て介ぶ浄西を寺へ召寄さして子舎を與へて艱せん
低る孝子といふにて乞食に做しやとて連りに林に尉めて影西泣く羨引ぶその
義に願ひ禀さんと豫思ひく幾番とく親に薦めつ只一に肯る氣質に伝れば然
あるに心安くもとく従ぶもいつぞ猶その上のあん慈悲に身の暇を賜るべしとて因心を謝し
別を告く飄然として出ぬ影西曩裏に剃髪して當寺に在ること三稔に過て年を
絶に十三あれども親の為に乞食して一毫も艱苦を歎ぬ始故郷に在りけ日他が母
親に仕へも低ありけんと猜せる実に泣く孝子と介程に影西に親と俱に那路傍小
堂なる石地藏の御前に在て往還の人に憐愍を乞て其日を消ていに親の身を扶掖く

這里の白屋ふかく来る。玄冬の寒けれども着くる襤褸を悄地ふ脱て親ふ被て熟睡
まるまで身をちゞめあの脚を温め又三伏の暑ける宵ハ親の為ふ終夜蚊を拂ひて睡る
こと稀なり。恁而年来を歴る程ふ。おのゝ遠近ふ笑え人ふ知られて孝幼小僧と唱做し
ける。那路傍小堂の頭を過る男女ハ必ず錢を取せ東西を與て恩とせず憐ざる者なし
。ひとゝびの日毎ふ親子の口を餬ふのみふあらずして求めざれども折々ふ故衣をも給易く
なる。浄西ハ明を失ひしより又六七年の光陰を送りて寛正の初の年間浄西ハ豫ねて死
期を知りて影西ふ云るさつ送言をけるふ果してその日ふなりけれバ病苦もあらで端然と
合掌十念の聲の中ふ睡を居る像く息絶ける影西哀慕悲泣ふ堪ず然而あるべきふあ
らざれバ則父の送言ふ従ひて那路傍小堂なる石地蔵菩薩の側ふ安葬て松を栽て標と
き敢墓碑を建立せずして父の志を表ればあるまじと偽へ曰く遠近人なる柩を送る者幾百
幾千なるを知らずして與ふ茶を賣り餅糕米を粥ふ煮て経紀さへその四下ふ出ーとぞ。その

ゆ逸足寺へ往そうらバ拙僧則浄西が為ふ衆徒を聚合て三七日の讀経を修行し
且前約の如く影西を寺へ召執んと欲まるふ他いまゞ従ひ親の在りー日のごく日毎ふ石
地蔵の御前ふ跪坐して鉦を鳴らして念佛を唱ると甚月ふして既ふ親の服闋ーかゞ逸
足寺ふかゝ来て恩を謝して学寮ふ在り是よりして影西ハ夜ふ日ふ佛学を研究して
又五七年を歴ふければ本山屬院の衆徒ハさらえ約莫下總一國ふ他が右ふ出る者なし
拙僧ハ寺職を影西ふ讓りて退隠せまく思ひふ德用ハ師兄ふて且結城の家再
興の折京都の管領へ俗縁の義をもて提撕禀ーー功ある是ふ加るふ城内多重職
堅生名長城根生野なんど年来德用と方外酒飯の友ヨメれば後住の一説ハ左ふ右ふ
拙僧の意ふ儘せず只得寺職を德用ふ讓渡ーふ心術正ふして檀方是非ふ明
るる同学の法師ハ俱ふ不平の心あり德用これを嫉妬恨く思ひて遂ふ事ふ假托てその
法師ハを追出ー剰悄地ふ影西を毒殺せまく欲ーと影西を毒氣色ふ猜ーく

○文溪堂藏

辭し去て京師に赴く更に八宗を兼学まで。ひろく智識の学えあり。そなたの法親王の執事にせられて。權僧正に成登り。既に高貴の人。拙僧などゞ今ごろに。企及ぶべきにあらねども。今番の異変を告知して。後住の弟を憑るべ影西本性孝順の。永く勢利を愛せべしく。今の顕職を辭し禀し。必這地に来て。我寺の法燈を紹ぐべし。有恁る美談ふべ那浄西のなども。問れてその子孫上もなくも。詳にせざるとなく。主客地上に坐して。思ひ遣せる長談なぞ。傷痛うして。饒しめとうち。陪話れば八個の犬士、太代四郎照文主僕に至るまで。倶に感嘆の聲と合して。奇也々々と稱えて。席開が中に信乃が。原来那浄西は始我思ひしく。里見に由縁あるを。親子罪を。忠孝を。望けばいなく。ありけれ然る忠僕の剃髪して。亡君の菩提の為に建立まつる石地蔵を。那衰老法師に化現して。我毎に忠告の利益に。俗に云縁る。衆生を度るの義あり。因て今亦思惟るに那路傍小堂の石地蔵の面部に缺る処あ

はも件の願主浄西が明の失るに類るの狭その側に栽て。一樹の松と。浄西の墓表るるんとの。まざ知るよう。ぞ。迴向せば。悔しさよといへば毛野も亦。郷国紀二六ゞ自屋ゆくに。と告る。一個の法師の眼と閉柱に凭れて。咽べども。応せざるとのみを思へば。開ゝ浄西の在しし形貌と顕し示し。亡魂に。やあり。けんかとへば親兵衛。點頭て。今ゝ咱們ゝ中途ゆく。庵主の急難。恁と告知ける。那法師も亦浄西の。霊魂。と思へども。其法師は。齢二十あまり。色白くして。開を浄西に思ひ方れば。三十許も弱なべし。年齢相応しかるべれば。那霊魂にあらずして。是も亦伏姫神の神変不測の。霊応。そもそもあるべ。智力をもて。目今量り知るべくば。是。の。奇異を。後に至りて。思ひ合せるのみあるとへば。荘仇大角。現八。小文吾。道節。照文。代四郎。孰も正可に思ひ。俱に感る。朝重。人の。噂に。知る。浄西親子の忠孝に。猶も。新奇の。霊。仏利益と。今ゝに。又。嘆唱を。時の。移るを。知らざりけり。當下、大い。未得に。向て。聆。新。浄西親子の忠孝。美談に。就て。

告まゐらせ一奇事あり。倘京師なる影西僧正が師父未得の招延を美容れてかへり来ぬ日もあらば言伝てあひねがへ。その故い箇様々々と那星額の齋一家季基主の白骨と狙公の刀の事を詳に解示き。初拙僧結城に来て庵を締び比ろ〻我先君の墳墓の有や無やと思ひ難て人に問へ索ねかども竟に知るよしもなく憶るもあらぬ白骨と紀の大刀を得てけるに幷も亦南柯の夢に似て。その白骨と名刀の出る処を今ぞ知る佛の利益いへば比丘尼浄西法師の賜ものぞ。墓表の石地蔵の化現の霊異なるぞ。齋一ぬし別佛堂に曩に圃守の建立と宣く地蔵菩薩の化現にまもられ事麗しき。ふに似れども萬佛原是一佛なり。地蔵菩薩に両箇あるとは。壁言ば田毋に移る月の影幾ばくもあらぬとも真の月をうち仰げば只一輪なるが如し。その理とりく推もとめ逸足寺と路傍小堂と自他十一箇の地蔵尊利益は則一灵佛堂。今ぞ分別きべくぞ。我先君の白骨と紀の大刀は土中と出て。安房に赴くべくも。一種の紀の鎧永くその地に送

ひ遣べ。墳墓空しくもあらず。後に古迹となりぬべ。那僧正に對面して是等のよしを云云と告るべきぞ。その歌はそれ歌ひ面前にのべて過ぎ送憾しさよその意を彼人のうけかと憑めべ未得も朝重も又這奇談に駭嘆しく。醉るがごとく醒るがごとく只共侶に感服まつるなり。姑且〻く未得〻〻、大士に談まるべ。那白骨の一條も亦是奇中の一大奇事。庵主の佛意に稱ひぬる德の高さを知るに足まり。就て德用堅削仏及堅名根生野不良の僧俗都て俘囚にせられども前にも既に陪話ひし他仏一個もあり。身方に淺痍ども負へ。ひざ〻罪饒さるべやいむ。但那長城惴利の殺害の罪免れざけれども那身は村長剛九郎が為に首を喪ひ。それ自業自得とのべ。伏て願ふ那僧俗を放ちぬべ。幸ひ〻んと勸解れば。大に點頭てそは亦愚意も相同じ。八士の意見はまぐ〻ねども拙僧年来の志願を果さ一念佛供類の作善を忘れそ。執念深人を怨んやとのひつ儒をそなへて各その義を何と思ふと問へば道節先

答て我们他郷の旅客ゑて。權勢もなく。羽翼もなければ。賞罰訓の國守の隨ゑて。敢恣ふ
せんとふあるべき。倘結城殿良將なるべで。只その家臣と封邑の法師们を見省のゑゑ自他の
邪正と糾きとなく。討隊の士卒を差向られるば我们只得及ふ釁ありて人をも殺し身を
殺さんふ幸ふして穩當なる。冢臣を使節とし。事の仔細を問れふ照据既ふ分明ゑて。
我们ふ罪なきよりと。詳ふ知られる。実ふ意外の造化。大江が意見ハ。ゆゑぞ。尚ゑと親
兵衛ゆあへぞ。そも勿論のゆゑか。那惴利い他人の為ふ殺されて命を隕しるとく。我恣
さへ解るべそ。唐山の鄙諺ふ張公酒を喫ぬまば。李八公が醉ふとふふ。狗骨
折く雁鳥ふ捉られ。怒と移さば不狂人も倶ふ是走る。大阪大田大川ふ別説なくい却
已ゑ宜く計ひめと云。親兵衛かくの如くなれば誰ゑ亦異説もなく皆共侶ふ朝重ふ
うち向ひて目今の説を守めゆ。欲國守賢明の憲断ふよりて。我们ふ罪なきよりと知らま
なりしゆゑ面目欺び何事ゑ是ふ優もべ但し一生擒の僧俗を那侭遁與ふ
ゐらせるば。守ふ賞罰訓なふ似て。非礼ゆそひふ。解饒もぐゆそとふを朝重ゆあ。其義ハ
決して厭しゑ。他们ハ都て罪人。然ば各の拠る素ハ我君命を奉りく拠る素ふ
異なるぞ。那侭ふ引く退るべ。主君かさそ。那霊佛の一々ゑふ利益のよりと守まるば庵
主ふも各位ふも。對面せまく欲しかるべく。恁る名僧良臣をヨヌく沼ゆひ里見殿の武
德を羨しく思れん。權且結城へ立かるゑ。逗留あるば幸ひなんとふを。犬士ハ諾なゆそ
辱くハども。庵主ハ先君の白骨を駝なりひへハ只管去向をハそ。ふく我们ハ故あて。犬
江親兵衛と除くの外ハまざ。主君ふ見參せゑ這回ゑ。ふく時至りて。八人送ゑ相伴て。
安房へ赴く旅ゑれば。不本意なるゑ。結城へかゑて。賢君親疎ふ私なゑ憲断の欺びと
稟きとゑ沼ざるゑふの毛宜く執達の芳情を仰ぐのゑと。一個々々ふ語と續く異口同
様ふ辭ひゑ。大照文代四郎さへ留るべくもあるべ。朝重有駄ふ強るゑ。切く諸
川の酒樓ゑて。留別の酒杯を薦めまほしく思べども。私の面會なるゑ君命の使仰ふく

且つヨク法罪人を牽き退き愚意を儘せば卒介はそこらに陪話れば犬士も
亦慇懃ふいなかの然る美あるべ苟且なるべく主客の礼あり先立ぬといそがせば朝重隨
即外面なる賜兵衛を召入れて経稜素頼徳用衛の僧俗如干の罪人の素を含ま
まつ牽立させ且門外へ出し遣はす然而未得と共侶はゝ大八犬照文衛は告別の身と
起して角門より出て曳げ出設る伴當衛が馬を牽向け轎子を抬げ寄せ相迎へて
倶して結城へ還りけ介程は八犬士ハ、大照文代四郎と共侶はその日は首尾を欲ば
一霎時庫裏は退き身甲臂縛踵繳の武具を脱て庸常なる逆旅の衣裳
含領に賜兵伴當を従へ諸川のくふを急ぐ程は長き日なれば然なるは時は移らず
去向の村は午の貝吹く時候なりけ詰分両頭然ば又小山朝重は途はく未得は相
別まく結城の城へ来つ隨即主君成朝はヨ火佛の奇異犬士の武勇ハ大照文代
四郎衛が答禀ま一事の趣及経稜素頼徳用堅削衛僧俗十數名の罪人を

受含まく牽き帰城の終まで詳はゝ又うち敬雪にて、大の道
徳犬士の智勇と賞感特は浅くて往古より霊佛の利益とはいへ共ヨ火れも然まで
正に霊異はなく我は結縁の為なれば念佛の行者ハ大と八個の勇士は對面
まく意衷を示べくは悔かるとも不娯て今は捨くに思ひ是はより経稜
素頼衛の非義非法の罪を糾まく賞罰公なるべ必や隣國の諸侯の為は悔
られんとく更は朝重は課く件の罪人衛を堅く獄舍は繫せて拷問數回は及びば経
稜素頼徳用堅削衛の奸詐暴虐を具は招ま者のこと年来驕恣
なく上を憚らず下を虐げるまでも這時都て發覚れけ者れども経稜素頼衛の親
嘉吉は忠死の舊功あり又徳用は當家再興の折京都の管領家（提撕あるもあれば
倶は死罪一等を宥めく経稜素頼衛の所親は預け置れ徳用堅削並は同悪の僧俗は
或は法衣を剥捉られ或は背を鞭まく倶は追放せまけるこの日逆足寺の先住未得を

文奎堂蔵

召よせて德用仁の恪らの罪あれば追放せらるゝと言示され後住いその器に當るべき学
徒の光実ありと擇び入院せむべしと命せらるゝの諭断の一條は朝重摠裁として有司
と俱に主君の旨を伺ひ奏聞の程を經稜素頼に綸旨獄舍の呵責に
饒され所親の家に閉籠られて放免の日を待ちけるその六月の時候也ありけん熱病に犯
されて俱に黄泉の客となりけり公は經稜素頼及惣利に各髪を剃る男子あり
母親に携られて外祖の家に類るゝ空しく成朝則件の經稜
素頼惣利が兒子二名を召出し親の本領の半分を賜りて堅名長城根生野の絶さ
る家を嗣しめ成朝かくの如く公平ゆく賞罰割正なりければ諸臣畏服して乱臣賊
子なく忠臣賢才用ひられて這家長く治り天正の年間晴朝の世に至るまで舊家
連綿の大諸侯となりしも世の人の知る所なり間話休題却説逆正寺の未得い德
用堅削が追放せらるゝ其の年使僧を京師に遣して故の徒弟なりける那僧正影西に

德用堅削仁の犯せる殺伐の罪により追放せられしを告知して我寺荒て諸檀離
れんとせ御坊始を忘れずして鳴雁北に歸くの意あるべしと僧綱の顕職を惜まず
えやく我寺に來て法燈を紹ぐべし一華の亟るゝを待ちて早天の雨の如しとぞ勧せ
ける影西その消息を聞く感涙の袂を覚ず倘今顕職の勢利を捨て師の招きに
應ぜざる這世に牛車の栄あるとも來世は必地獄に墮ん只速やかに先その使僧を
結城へ還して某の院の法親王に陳情の啓をそなへ且病着に托着て連りに
職事に辭ひ奏聞あるべし法の竹園直ければその孝順を感思召して願ひのまゝに下總へ
還るとぞ允しぬ翌年の冬の時候影西に結城なる逆正寺に住
得に對面せんが迭に再會の歓び大なるべし躰て國守に申あげて影西逆正寺に住
持に做らしむる遠近の良賤渇仰せざる敬慕冒隣國に類なりける又那十體の石地藏
と又那路傍小堂なる地藏菩薩の利益霊異を傳ふる者参詣日毎に間断な

く両所の賽銭夕々ゐ甚そのく料ら所ゆるゑ皆逸足寺へ収納まれば財用
餘りあるめり影西ハ倹素ゐして衆徒を教育の暇ある毎ゐ徒弟四五名とゐくみ
ゐ錫を突鳴らして城下の町近郊の邨里と券縁まけるゐ大刹の住持みづから出て衆
生ゐ薦る托鉢ゐれハ賢も不肖も皆ゐる信ゐそ捨の寡ゐを恥せゐ有徒り程ゐ先
住未得ハ遷化まで三周の忌ゐ了る年まで逸足寺ゐ聚合たり金を慮二三萬両ゐ
ゐ及影西ハ豫ゐ那六道山能化院を再興の志願あり開ゐ為ゐ貯ゐ所財用ゐ他
事ゐ使ゐまゐと囹守ゐ懇へ免許を経て土木の工を興まゐ成朝主欽びて則數千
金を捨ゐてその経営と幇助ゐゐ且能化院の坊料を舊の如く寄附せゐる然ば結
城武井諸川の士農工商招ざるゐ聚ひ来て土と運び木石の車と推ゐ者日毎ゐ幾百
名ゐると知ゐ約莫三稔許ゐて七堂伽藍迭ゐ奇麗壮観目を驚ゐゐ
都て落成まけるゐと影西長老ハ那勝軍地蔵菩薩を逸足寺の宝蔵ゐ

昔の如く能化院の本堂ゐ居なゐ又その本堂の西のくゐ地蔵堂を造営
まで那十體の石地蔵をも逸足寺ゐ移まゐ又那左右川の邊ゐ路傍
小堂とゐと廣ゐ造更めてその四下ゐる荘客の田圃を價宜く購合ゐて香華料と
まで守堂の老僧を置けり況又能化院ゐ学寮と建て衆徒を教育ゐ量裏ゐ徳用ゐ
追遣られゐ良善正直の法師們を召選て諸役僧ゐ做ければ囹守成朝主その大功を
誉て影西前權僧正と能化院中興の祖と仰ぐゐ逸足寺の住持をも兼帯ゐ
ゐと命せ給原是逸足寺ハ能化院教主寺の屬院ゐり本山荒廃ゐ以来その
子院屬院ハヨく逸足寺ゐ屬従ひと今番又改めて都て能化院ゐ隷られけり影西
既ゐ功成りゐ法教の暇安房へ赴く里見殿ゐ見参まけり且、大庵主八犬士も對
面せまくほゐと囹守の旨と伺ゐ成朝主欽びて我も亦ゐ折をゐく舊交を復結ん
とて躬て小山朝重と影西長老と使として種々の土宜と齎て安房へ遣ゐけり偖而影

西長老ハ朝重と共侶ふヨヾく伴當と為て稲村の城ふ来着しつ。犬士ふ就て義成主ふ見
参し、大照文代四郎ふも對面して両國守の舊交新約障りなく敷年程ふ義成主ハ
影西の孝順その父淨西の孤忠ふよりて先大父義烈院の白骨改葬の秋びと叮寧ふ宣して
日毎の御食饌大々さまゝ影西ハ逗留の間出家ゑれば許されて大山寺の不動洲崎の品山崖
那古富山の両觀音伏姫の靈迹義烈院殿の墓の廟墓へも参詣の本意を遂て罷
去んとする前日義成主ハ影西朝重ふ東西を賜ふと勘うぶ更ふ亦、大法師と矢江親
兵衛蜑崎照文を答礼の使として國産と所の地藏菩薩へ寄進の東西をさヾヨヾく
夫役们ふ早せ従へて影西朝重と俱ふ結城へ遣して両國和順拵言約の礼ふ答のぶ成
朝主ハ歡びて、大親兵衛照文ふ御食応山河の珎味を盡して且ヨヾく牽出物を賜ふて
安房へ還されける是よりて後里見結城の両家長く脣齒の國となりて相犯さるなけ。這
折親兵衛ハ、大照文と俱ふ那路傍堂なる石地藏菩薩を拜をなり又本堂なる勝軍地
藏菩薩ふ焼香の折這本尊をはらくとそなるふ曝ふ諸川の那方ゑ、大法師と代四
郎照文主僕の急難と忠告ける那法師の面影ふよく肖れば訝りなぐらるよく相ふふ
件の法師ハ額の直中より聊左ふよりそなと大父なる黒子あり、と記憶なるふ這本尊の地藏菩
薩の額の中央ゑあて些一左ふよりそれば原来那折の忠告法師ハ這本尊の化現なりけりと肇て
悟て且感心のあまりとて照文ふ悄語けば照文も亦心づきて咱们も曝ふ代香使なり折、大
庵と尋ぬるふ案内を考ける那法師の相貌もその本なるふ似たりけり甲も乙も這御佛の化現の
利益なりけると今ハ十あまりの年を歴て肇て俱ふ悟りをとの、大もうちゝ聞て人の發明遅速
あれども佛の利益ハ始より違ざりと感じけり恁而、大親兵衛照文ハ俱ふ客殿ふ請待せ
られて先知客の役僧ふ里見殿の故らふ二人所十二箇の地藏菩薩へ寄進ゑのぶ云固の銀の
大香爐と幾唐樫ふ藏めるる一切経を遞與ふければ住持影西出て對面して茶を看め果

甚ふ詣けるかへるふ又能化院ふ立よりて十體の石地藏菩薩を拜をなり又本堂なる勝軍地
藏菩薩ふ焼香の折這本尊をはらくとそなるふ曝ふ諸川の那方ゑ、大法師と代四
郎照文主僕の急難と忠告ける那法師の面影ふよく肖れば訝りなぐらるよく相ふふ
件の法師ハ額の直中より聊左ふよりそなと大父なる黒子あり、と記憶なるふ這本尊の地藏菩
薩の額の中央ゑあて些一左ふよりそれば原来那折の忠告法師ハ這本尊の化現なりけりと肇て
悟て且感心のあまりとて照文ふ悄語けば照文も亦心づきて咱们も曝ふ代香使なり折、大
庵と尋ぬるふ案内を考ける那法師の相貌もその本なるふ似たりけり甲も乙も這御佛の化現の
利益なりけると今ハ十あまりの年を歴て肇て俱ふ悟りをとの、大もうちゝ聞て人の發明遅速
あれども佛の利益ハ始より違ざりと感じけり恁而、大親兵衛照文ハ俱ふ客殿ふ請待せ
られて先知客の役僧ふ里見殿の故らふ二人所十二箇の地藏菩薩へ寄進ゑのぶ云固の銀の
大香爐と幾唐樫ふ藏めるる一切経を遞與ふければ住持影西出て對面して茶を看め果

子と薦め。然而里見殿の寄進の大々こまう奴欺びと舒ゐどと。一切経い年来欲しく思ひ侍りしかども。怪る田舎も輒くゐるさければ果さでアーふ今番賜りしい宋板ゑれぞ実ふ千金の至宝ゑ昔年庵主の逆足寺へ遣しぬり。五種十數軸の経と共ふ今より宝蔵へ秘置て永く法孫ふ伝へむとそ。怡悦の眉を開れる。介後、大と法問ある又齋を薦めらる程ふ日景既ふ傾ぬれい、大親兵衛照文ハ能化院を立去て。伴當夫役を従へ〻一宿して次の日ふ又関宿より舩ふ乗て又その次の日ふ稲村の城へかゝる。倶ふ義成主ふ見参して返命と稟しけり。その比義成主ハ照文を召よせて結城の光景を問ゆとあり。ふ照文ハ那能化院の本尊ゑ勝軍地蔵菩薩の昔ありける利益霊異を。今番親兵衛と倶ふ啓て悟らしようとゐ出てその故ハ箇様〻〻と具裏ふ親兵衛ふ、大の与忍難を告知ぬ。法師の為と照文ふ、大庵と案内ある法師の為を解ふ。まあ〻せ。前後約束の違ざりける。霊佛奇妙の応験と呂ハ管稱賛ぬ。義成主點頭て开いと奇しぬ。約莫霊

佛の利益とゐ者。和漢ふ例尠ぬ。ねと。本石十二體の地蔵菩薩倶ふ化現の霊異ありしい。前未聞の利益ゑ。ゑれども是を地蔵の化現と思ひて感ひの醒ざる。何とゑれば石とそ刻を木とそ作り。佛像のよくゐ脚を挿ぬそ言ふ。ハ道理ゑ。その石佛木佛の為ぬ倣ぬ。所事と倣せるハ譬ハ那傀儡師のよく木偶と舞ぬ像く开と使ふ神物の別ふ必ある。ゐん別ふ神物ゑ。ハ佛像と霊異ふ。ゐ。ぬとせ。然ハ佛の利益と否と愚俗と善道ふ道ゆ。ゐ。ぬ。ゐとそ石像木像の地蔵菩薩ゑ。未然の禍福とよく知ぬ。ぬと動ぬ脚を運しと言ひ。ゐ。ぬ。ゐとハ。ゐ。ぬ者熟ら實ハ事とせ。ゐ。故ふ聖人ハ怪力乱神を語ぬ。ぬとゐ。都て神異ゑ火宅心の人ふ福ゐ。ゐとハ世俗是を霊験利益と稱ゑ。又神異霊応の人ふ禍ゐ。ゐとハ世俗是を妖怪と。ゐ有怪れハ魔佛同根ぬ相距ぬ。ゐと遠ゐ。誰ゐ。ゐその因て起る所を覚知ぬ。ぬ然ハ神佛の霊験利益ハ。ゐ。ぬ。ゐ。ぬ。ゐ。ぬ

きて寔に沿ぐ〻の御教諭を聞き明の醉ハ醒ぬ昔年毛野が論ずも恐れ多く相似たる御論なれ
精細を解ずるなれば易く因て思惟れば中庸ハ國家將ハ興らんとすれば禎祥あり國家
將ハ亡んとすれば妖孽あり人ハ則慶佛同根なり靈驗利益と妖怪変化と禍福の同じかぎ
るハ只その人ハ為りを曉得るも皆是御高論の御旨なり只管稱名を退ぞ出ずるなれば後の話な
れども淨西景西父子忠孝ハ小後が局をもハ結んを文を法るるかの如し看官前後を相照して是より下い
廢院の果の段ハ復〻見るべし間話休題再説八犬士、大代四郎照文主僕ハ當日朝重と未得を
目送りて脆て荒院を立ぬ諸川の驛を過る程既ハ亭午なれば大家書飯をとらんと欲するハ
驛稍盡処なる飯店ハ常と掲出て酒と飯と賣るあれば平と俱ハ立寄るハ這店と奇麗ハ客奥ハも
坐席あり〻ぶ〻、大八犬士照文代四郎ハ俱ハ奥まりなる孤屏の蔭ハ坐と点て蔬菜の饌を誂て點兵伴
當一樣ハ各昼飯を果けり畢竟八犬士們這里ハ謀て後の話説甚麼を开ハ下回ハ解かると聽れか

南總里見八犬傳第九輯卷之二十終

仰ぐ師父と稱え金碗氏を目せとあり御諚ハ至極の道理なりと思ひ知りひ〻ぬ京師ハ使を遣さるく
ん計ひを願〻ハ彼れ徒京ハ人も為げる誘言ハ似れども異體なり心同ハ道即ち義仕れば自餘七
個の義兄弟も同意勿論ハ応と応て左右と左へ信乃毛野莊ハ大角現八小文吾も親兵衛ハ今
道節ハ即座の論議ハ感激せられて仔細ハ及ぶ皆共倆ハ額衛ハ義同意のよ〻ハ京ハ義実合点
黙頭あり安房殿他們ハ領義ハ誰と使ハ遣さんと問せ〻ハ義成主然いなの使節ハ尤大事ハ犬
士們の内中一両名を遣さるべしと答ハ義実主ハ然也〻と領て又大士們ハ向ひて然ば今番
室面殿へまゐる正使ハ汝們の内中一人〻ぶ〻誰ハ京師へ赴て其使を為せんと問る詞も果ぬ
程犬江親兵衛突然と找を出額を衝て喙黄ハ小猴子ハ年も才智も勝り母義兄弟們をも超て
願ハ禀ハ烏滸ハ為れども其御使を小臣ハ仰付させたまへ自餘七個の大氏們ハ年来諸國を遊歴ハ
地理ハ細ハ知ハ小臣ハ年四才の秋より富山の洞崖ハ成長ハ其の春より人間ハ出ることなく
當國安房の地理ハ知ざる所なり然ハ今事ハ皇城の地を踏ハ見聞ハ就て後學ハ

文淑堂藏

とヨクいひむけで饒まぬかと思ひ入て請禀せば義実主笑ひけふ義成主をそなへて安房殿へ恵ひな
志親兵衛ハ智勇捷れて身材も亦大人備れど童顔いまだ耗せず且額髪なる者ゆえ室町殿へ
使ふ。都のなる態ふ熟ぬ。なる奴ゆえ殿へ他を遣しあるべと仰ふ義成主異議もなく其義ふ四然ば
副使ふ十二郎ゆえ殿ばれ他ハ四方ふ使して京ふ熟なるゆえ殿の性諟慎と旨とをれば常失寡紀者と
因て親兵衛ハ願ひの隨意ニ這回の使を課せ。十二郎もその意ふ沿て俱ふ京師ふ赴て小心と親兵衛が
幇助ふるねと宣べ親兵衛が欲ひ所ふ席を避て八犬士の上ハも微臣屢ふ使と奉り
ひひ〳〵ふ今番倘漏されば送憾のあひとむふ御詔ハ一期の面目ふひと禀せそ餘の七犬士ハ大事ハ使の
撰ふ本意なく漏さ〳〵ふ童年なる親兵衛ふ超られ是ば爭ふ為ふ皆云云と然ばと禀せども、大
法師ハ始より思ふ有色色ふ宥ざる像く默然ふて却主ふ向ふ一回も平和のなゆ宥ふ啓く佳
境ふ入ふくなる。詩説なるヨヨれども楮數言ふ涯のあれば卷を更て亦下回ふ解分ると聽ねかし。

南總里見八犬傳第九輯巻之二十一終

南總里見八犬傳第九輯巻之二十一

東都　曲亭主人編次

第百二十回　大法師穂北ふ客情を果す
里見侯白濱ふ旅槻を葬ふ

却説信乃毛野道節荘次大角現八小文吾親兵衛の八犬士ハ、大代四郎照文主僕と
俱ふ諸川の驛稍盡なる飯店ふ立寄て晝飯を喫果ふ去向の便宜と相譚ふ或ふ関
宿より舩ふ乗て安房へ渡ふ順路ふて陸を行くとの速れも庵主ふ先君本基朝臣の御
送骨と駝の背ふ路の近を貪て風濤の險を冒ふ今ハ犯ふ〳〵且穂北の一説ふ然ばと皆
共倡ふ路と武藏へ取るふ〳〵ハ迂遠くふて憶ふ時ハ遲滯せ然るとの君命と家ふ留る者ふ
似ふるハ思へども夏ふと有種ハ義士なるふ今番ハ那病患の安危と向ふハ亦不義ふ公道を
宗とせば人情ふ缺る所ふ又人情を先ふせば公の道立ふ難ふる衆議尚區々なり

ける。道節即單決斷して。餘人に左まれ右もあれ那氷垣落點。我復讎の帮助を做くる恩義を
妄く忘れて順路に就くは義にあらず。非如一晌の天日を妄く安房へ帰るとも。然る不義の士をば
稲村殿のふて愛憐せぬにや。咱們は穂北へ立寄るべし。今はう別談るとは信ずとも野とあの談を
喜ぶて俱に大照文談を。日今具に聞れども大山が欲するは人情に結れも実に己とそなるを
在。因て我們思惟るに庵主並に蜑崎主とは年来我黨と聚合て君に薦んと思欲る本意と
遂ぬべく大功例るに紀又先君の御送骨を安房へ伴做ぬ猶一層の大功を我們を招會の
君命より重かるべし。徒れば庵主蜑崎主は御送骨を衛奉りて安房へ赴ぬ。勿論に欲却我們は
亦一両日身の暇を賜て那穂北に夏行許立寄るとも允されべ。公道人情両ながら缺ぬ。
らん但し大江親兵衛は自餘の七人と同じく他も亦招會の使に庵主に俱を返命ぬ。
べくやいなと議ると親兵衛推禁めて。開そのいまだ定まらず。
七個の義兄弟と相伴て安房へ還れとある。御設と初より異なる。獨別れて那里へ行や。且那氷垣

落點の義侠を豫め知られば。對面せず思ひ。然れば荘
介も現れも大角も小文吾も共に伯に點頭て。大山大塚大阪の意見に。大江の議論に人情に似く公
然て庵主海谷あれと異口同様に庚幾に衆議稍一決きうけ。登時に大山が頭を指げ
うち點頭て諸彦の情願宜に以ち。低へて下と上と料に似られも両館に人の及ぶ御考順に
とうまさば先君の御送骨。改葬の義にうそ必も七日の斎戒あるべし。然る折に和殿達を
相伴て参るべき事と言事と混雑して不便に思ひ召れ。然が先拙僧と蜑崎生に御送
骨を衛奉り一日も妄く安房へ帰るとと両館に告げ。御改葬の事果て更に又和殿達の
旅宿に赴て相俱して。然而見参に入れ奉らば迺支に階級あり。吉凶混乱ぐべし。その義に同意
るべ和殿達に地方に拙僧們は相別れ穂北の郷を過る折氷垣許立寄て逗留十四五日に及
びぬ。拙僧們は又安房より参て和殿達を迎の輿に穂北に造て對面せん其時候過ても音耗な
く各位は那里に去て上總まで来て館山に城に入て待べ然べき迭に約束あて。迎接岳語まぐも

あゝも這議は什麼と叮寧に悄語示せば道節親兵衛自餘の大士も然び羨てその議寔に佳麼之
親兵衛と代四郎は這回新に増加そゝれ我們七名と招會の客使でゆへ我們安房へまゐるまで進退を
俱にせる私に似て私るゝ庵主今我黨を御道の一椿事は是両館の御與ゑれども御送骨を先に
ゝも臣等と後にせるゝ則君臣上下の階級理の當然とのゝつゝ孰も教諭に従さらんや皆あゝる
ゆと亦別議ゝゝ言義に代四郎憶ゝ含咲て數ゝゝ身をあ使に連られまゝゝ甲非あゝて今亦故
者ら主們に隷ら一期の面目この上ゝ本意ゝらと不勝の然び然ゝそと思に犬士們に有徒る折も孝
嗣次園太郎二ゝ為命ゝ又云云とゆ出て送憾ゝ方ゝらけゝ當下蜑崎照文ゝ八犬士ゆうち高
ゆく御尚に告ゝゝゝゝの必ゝ卑職紀二六をゝ那氷垣許訪せ折東人夏彩の病患の事ゝゝ
支の趣及和殿達は稍久く那里止宿の顛末まで守知ひゝゝゝゝゝゝゝゝ立寄て安否と問ゝく思ひか
ども衆議一決て路異ゝれゝ今番は素懐と果に かゝゝ諸彦那里に逗ゝゝゝゝ意と使ゝか
とゝゝ懐ゝ財嚢ゝゝ圓金二裏と含出扇児を開ゝち載て喃諸君子這ゝ金い今番

倘幸に和殿達に環會に臨時の費用に取せとて館ゝゝ賜ゝ伴當に鞭兵衛を八個みゝ
ゝゝ又姥雪と加ゝゝ主僕十七名氷垣許十四五日止宿に所用ゝ已前も雑費ゝゝゝ宜く
相計ひゝと耳に示て件の金を恭く遮與ゝ八大士に阿とゝゝに左右く受ゝ一
雲妻時小音に商量ゝ果て道節に答ゝゝ親兵衛と除くの外いまゝす功中ゝゝゝ臣等に有徒る
寵恩に寔加餘ゝゝ今ゝに美當惑仕の臣ゝも亦先君の御送骨に伴を仕ゝ該ゝ
まゝゝ未両館に拝見せゝれゝその義隨意ゝゝに開て八個の鞭兵を俱して穂北に赴ゝ
那人に御送骨に伴勿論ゝゝ狩且氷垣落鄙に義士ゝに莊園ゝゝ近に非除十人二十人逗留
客あれゝて雑費に事に缺くゝゝゝゝれども両館の御恩澤を他們に為ゝれゝ這ゝ金に拝受
ゝ他們に讓與ゝゝ然ゝとゝ人數ゝ逗留日ゝ里ゝ那五十子と忍岡の敵の城内に洩ゝ
ゝゝ又禍鬼ゝゝ惹ゝ其義に後安ゝゝゝ伴當の義に只管に用捨ゝゝ願ゝゝゝ我一個の
愚衷に自餘七個の義に弟に情願ゝの如ゝゝゝゝ就中在下那壻に羽に恩義ゝゝ初に發

語ふ。故ふ諸兄弟ふ代るゝ。その意を本末ぬかとられて照文応難て。大ふ意見を請問へば。大も一霎時沈吟て照文ふ答るやう。なるほど如況大士の情願理ることと思て。然ども今ようの八犬士ハ我両館の御家臣ふ。亜僕ふ。穂北ふ造ふ館のあ與ふ外聞ふ。かりとて多人数を憚らあるとられば。開ふ亦強て薦めがたし。往日両国河原を。犬江ふ借用ふと。なく。毅兵の例もあるまゝ。西五名と隷ぬ八個ふ五名の伴當ハ。犬江ふ似ず相応しかねど。東西持ふ。なるものあれば。亜僕ふ勝べ。壁言ハ那里ふ逗留中。大敵襲ふ来ぬるとも。然ども。八士の武勇をもて。ふ伴當の帮助を借んもの。穂當ふ。犬江ふ照文感服ふて。又八犬士ふ。向ひて。各自今聞れ。如ふ。庵主の意見理ることや。毅兵ふ。五名とは。ふ。ふ。ふ

地ホ造ル。這ロ書一通ハ瀧田殿義実主老侯ヘ献れ。又一通ハ稲村ヲ四家老達ホ相達して送ラ。こよりあぶ
御送骨の事。八犬士の事見も写もせ。如く。詳ホ写ス。えあげよ。その餘のハい箇様々々と示して書翰ヲ遞
與ホーぶ。紀二六们ハ。ろ沼果て快船ヲ共ニ。ち無て安房ヲ投て走ルホ折ル順風ヲ。けれバ思ひ
より逸早く。次の日稲村の城ホ届ルヒとを沼て。隨即、大照文の注進ヲ呈書ヲ。堀内貞行ホ呈閲して事恁
偖と。禀もわぞ四家老出仕の折ヲりけれバ。倶ホ其書ヲ披見て。欽ぶと。太ク。ろ。ぶ。躰て注進の趣ヲ義成
主ホ写ス。えあげーぶ。義成感悦ふ。ごうもわ。隨即芦荒川清澄ホ、大照文の使价三名ヲ差添して。瀧
田の城へ遣ーめハ。義実主も。奇ホ驚ル。且、大ク不測の大功の一方ヲ。ぬ。ホ顧ホ。嘆賞。涯ヲ。ける。然ハ
先君の。ス骨迎ヘ。並ホ改葬の。ハーも。稲村殿主義成の意見ホ依ル。ーと。那里の。處ホ。儘ーめハ。一両日の
程ホて。准備ヲ。整ひけり。ホ程ホ、大照文主僕ハ使价ヲ安房へ。まわ。せ。詰朝。関宿の道場ヲ立
出て。連ホ路次ヲ。ぶ。ーぶ。約莫三宿許ホ。て。ぬ。く。上總路ホ。来ホけれバ。稲村より下知せられ。其頭の
守城の頭人ハ各士卒ヲ。ぬ。て。出迎ヘ。ぶ。曾待特ホ。浅ク。ぶ。徒而、大照文ハ第四日の巳牌左側ホ上總と

安房の封疆ヲ。市河坂まで。ホ。ける程ホ稲村瀧田の両侯より堀内藏人貞行ホ士卒並ホ柩舁雜色
奴隷さへ。都て三百名隷さへ。送骨ヲ迎ル。ホ。逢ける。登時貞行ハ、大照文ヲ一霎時其道ヲ
道場ホ立寄せて。對面ホ。の折柳ホ、大照文の使价ヲ達ル。両個の黠兵と紀二六ヲ。昨朝上總路
まで。かへの。ホて四家老の回翰ヲ、大照文ホ遞與ホーぶ。既ホ伴當の中ホ在り。徒而貞行ハ、大照文ホ。両
侯の仰ヲ。ぶ。て、大の大功ヲ誉長途ヲ。労ル准備の櫬柩ホ骨壺ヲ。斂めまゐ。せ。俱ホ白濱ヲ。発。寺ホ
入れなホ士卒是より隊伍ヲ整ヘ、大照文ハ先ホ立。貞行ハ騎馬ヲ。て。後方ホ。ある。齊々整々ヲ。て。徐行く
程ホ。その通路土民の。老弱男女肩ヲ比ヘ。処々ホ。聚ル。跪ル。て。櫬柩ヲ。持む者。尠ル。然ハ。件の延命寺ハ
近屬義成主の。沙汰ヲ。て。建立ル。ーー香華院ヘ初義実主の時那平尋の大山寺ホ。先考先妣の廟
墓ヲ造ル。立且五十子方の。墳墓ヲ。も。其。凌ホ。めせ。れ。又伏姫の木主ヲ。も。那寺ホ。措めへ。ぬ。れ。ぬ。の。大山寺ハ
原是不動の灵場ヘ。那里の不動ハ日本武尊ヲ。ぶ。ベ。と云。好古の記録ホ載ル。もあれハ。墓碑ハ。憚ル。ホ。ホ。
ら。ぶ。義実是ホ依て後悔ホ。ある。義成その性孝順ヲ。ホ。且光侯の後悔理ル。ホ。れハ。則件の白濱ホ一箇寺ヲ

市河坂大
照文
貞彩の
迎ふる
逢ふ
ちの大
見物
見物
見物

建立あて妙量山延命寺と唱ふ。去年落成あれども智識の名僧と仰ぐべき
いまだ初祖なる住持なく一個の看主と衆徒四五十口と取繕ふるのみ。故に大山寺なる而先靈の廟
墓とも五十子方の墳墓とも尚改葬なるべし。今番不測の義烈院の遺骨と迎へれば瀧田稲村の両
侯は墓の中を狩出し改葬の儀式大々的に執て延命寺に入れまゐらせ安葬の業を終へ。且廟墓と
墳墓とも件の寺に選定し因て、大大徳と開山の鼻祖として住持なる者へと猛可に定められければ
自然則ち議に依て白濱俱一まゐりけり。問話休題。金程に白濱なる妙妙山延命寺なる日蓮宗
臣杉谷君水曽川氏元東六郎辰相と首尾して兵頭有司十数名並に瀧田の老侯よりまゐられる老僧
有司近習の毎東峯萠二小水門目鮒舩貝六郎と共に通計三十名當山看主の老僧と諸寺院の住
持の参聚し者幾十名狩或は玄関或は本堂に在り或は三門に立並て槻板を迎ける門前に壮麗沙
丁且三箇組なる番を桶ヨヲくまり又高張の桃燈五六對より三門より本堂に至るまで中黒の花弥添
なる白麻の幔幕幾張狩透間なく張亘りる篝石先右に樂言固の輕卒一百名袴の稜に卯く勝の

上まで裏結なる白麻の幔幕を捍棒と突立て非常と儆る者門前に推て知るべし。況本堂の
壮厳に此の幕紫雲と疑れ金色の本尊に枯華微妙の容顔貴く然に紀龍の画天井より華厳
華慢旛天蓋美麗く佛の御前の臺盤に燭台の鶴亀に生道の呵責を知る小らの華筒に金
蓮に玄熟池の水に生ける錦繡の打敷眼に赫奕花打鳴る鉦磬耳に噪く供物の餅に五色を雑へ
阿吽の獅座に香爐に焚て敷脚の机案に経巻ヨヲく大冊の霊籍見甚に在り現美を盡し善を
盡す。通ての事の光景の細に名状しがたく官の餘を查ぶ。却説霊柩に申牌時候に延命寺に
入りぬ。本堂に居まゐらせて衆僧並に貞紀照文們いそぐ保守護し退る。大客殿に請待せられて
看主の老僧看茶の礼の小後校倉氏元東辰相、大と別席に招て両侯の仰を伝る君命の趣に光
大功と誉まゐて且今も當山の住持と改葬の道師なるべしと則布施として錦繡の袈裟紋紗の
法衣白輪子の夾衣袴一具と賜る両椿事の大功を猶懇に賞せらる登時堀内貞紀も礼服に更て
右の列席の内中に在の美服に大の本意なるべしと思へる龍恩

辭まるゝ由ありれ鉾ー兼て退るゝけり次ゝ蜜崎照文召れて礼服ゝ更めて両舘の仰を傳る亦是代香使の勤労と靈柩の守護と誉こせあ面目ありあ有様程ゝ讀經を促せ鐘鎬と鳴くゝ大法師ゝ於有施の袈裟法衣ゝ身装ーて威儀儼然と看主の法師を先ゝ立て徐々と出て本堂ゝ来ゝけれ百ゝ参會する大山寺の住持諸寺院現住の老僧門前一迎て揖讓あり大ゝ式讓ゝ後ゝ道ゝ師の席ゝ着ーゝ役僧磬ゝ打鳴ーゝ衆徒經巻の繙ゝて讀誦時ゝ移ける小程ゝ三家老諸有司照文們左右二側ゝ星列て礼服の袖を連ね瀧男の有司近習の毎小水ゝ東峯鮎船們ゝ漏る者ゝ相勤る事嚴ゝ見えけりあ新道ゝ師衆僧ゝ所作ゝ端ゝ式ゝ事省て具ゝ せ小間ゝ日ゝ暮て廻向焼香果ーゝ躰て靈柩を格ゝて准備の窓ゝ斂めまゝ番匠們幾名欽聚ゝ来て殯ゝる程ゝ夜ゝ闌て星斑る暁天ゝ至ゝけ然ゝ件の殯の遺ゝ慢幕打る守屋あ番士雑色幾名ゝ隷られて交代ゝ成るゝ夜の月ゝ澄ゝ出ゝ張燈焦火篝火ゝ本堂より坐ゝ照ゝ処々ゝ明ゝ渡ゝけれ那不夜城ゝ倣ゝと思ゝ國主ゝ威德仰ぐ〻大法師ゝ廻向ゝ果て三家老共伴ゝ退ゝ出て然而祖父ゝ杉倉氏元ゝ遽與ーけ這這刀ゝ事ゝ御ゝ注進ゝ條々ゝ寫

ゝ者ゝ有ゝ三家老ゝ ゝ大ゝ奇功ゝ感嘆ゝ就中氏元ゝ負ゝ昔ゝ靈刀ゝ今亦越ゝ ゝ懷ゝ舊ゝ涙堰ゝ来ゝ老ゝ要ゝ身ゝ今ゝ生ゝ悲ゝ思ゝ然ゝ件ゝ殯ゝ日ゝ安房四郡ゝ諸寺院ゝ上總及下總ゝ里見ゝ封内ゝ諸宗ゝ住持ゝ修驗山伏ゝ至ゝ猛可ゝ徇ゝ第一日ゝ義成主参詣ゝ日ゝ荒川兵庫助清澄勤番ゝ頭人ゝ餘浦安牛助友勝登桐山八郎良千苫屋八郎景能田税戸賀九郎逸時們有司ゝ ゝ次ゝ日ゝ義通御曹司第二日ゝ瀧田老侯参ゝ ゝ日ゝ小森衛門篤宗浦安兵馬無勝們老病致仕者ゝ願ゝ隨意允ゝ皆死命寺ゝ参詣ゝ第四日ゝ大山寺ゝ義烈院殿夫妻ゝ墓碑ゝ死命寺ゝ遷ー田ゝ夫人五十ゝ方法號某院ゝ當山ゝ改葬せる亦復ゝ足ゝ法事ゝ第七日ゝ義成主ゝ義通君ゝ参詣ゝ而侯ゝ公子基參ゝ折伴賞ゝ宴ゝ打ゝ分ゝ ゝ事畢ゝ詳ゝ諸侯

安房の英命寺ゝ寺人ゝ所中ゝ元織村ゝ有ゝ禪宗ゝ大刹ゝ寺里見氏ゝ數世ゝ香花院ゝ因て里見世系ゝ古文書兵器ゝ寺宝ゝ九世ゝ肖像ゝ寺僧ゝ請て ゝ中村國香ゝ房総志料ゝ安房ゝ部ゝ載ゝ借用も

富貴を看官思へ。有為れば改葬の法敷。大日寺より遷されぎ。延命寺の祠堂に新製を居られけり。現伏姫の烈女ぞ。霊地に憚ざるべく神に倣せぎ。

作者縮帷の裏に在て漫に獨語ていふ。約莫這第百三十回の都て平和の話説を笑を取る人らねども。亦云ふべきに何と云れい前に神佛の冥助に又、大の奇功ある是に加るに里見西侯の純孝人に感ずに這頭を省略せば所云龍頭蛇尾ぞ。抑和漢稗説に遊ぶ諸才子新を出し奇を呈して看官の愛憐を條に作者の為のつるに筆找を又話説平和を看官のそなる條に作者難義の文場遮莫是ぞの平話なれば新奇も倒に終るに由て是と旅ぬく人に壁言に名勝舊迹山水佳景に疇も親まく欲れども平和の驛路險阻の山海らぶく里に麻ぶるあくべき名勝舊迹奇絶の佳景に遊ぶとるるべし。況這改葬の條の如に上に念佛供類に相距ること三四回を亦復佛事あるべし。支重復を免れて犯さるべき條なるに容易に思に罕なく。作者の苦心と後に知るべ

並てまく〜ひ狩宴に要るに敷貫言るぐら。村翁野客と醒えとて聊自評を附るぞ。

却説改葬の忌厥の日に、大に稲村の城に召れて両館に見参をあ折ぬる義実主、當城に在るに待見一時に事果て、大に郷食膳を賜る照文と相伴を近習の毎給侍に達る管待を閑を ぎりけり。齊畢て更に又、大に別室に招して老侯に安房侯と同席を易敬くまで面談の身邊に氏元貞行照文のまど侍りける登時義実主に、大と参て且宣に和僧が両椿事の大功徳天助と大士们の勇戰智略及那悪僧德用们結城の驕臣經稜素頼惴利が奸虐の顛末に郷高に注進を少えその後又照文に吹て詳るとぞ。就中那十八人道淨西とその子影西の忠孝に古来稀る美談に畢竟那親子の陰德と和僧が千餘年の勤行勇猛精進の陽報を地藏菩薩の利益あり。然に當家に宿因深るに大全備の招會に容易くて渴望年と異に他仏より為に易く成る先君の御送骨と担ぎ名刀と家裏に伝せられる事に何事狭に優ぎ大功昔の衍ぎ僧に猶餘あり又那結城の禍鬼ぞなるに成朝良将に成ぎ又一朝に解かるに是も意外の欽び又且這回大士と中途に留めて先御送骨を

俱一まゐせい事序次ゆゑ我意を稱へ既に安房殿義成に商量をなし今日より法務に暇あらん
照文と共伯に安穏穂北赴き大士を迎へ来かーといと懇切に課れば、大法師は阿とぞろに額衝る頭を
抬げて御諚畏こまるも兼りはあらざる臣僧原是何者の人也然る御寵衣賞に預らんや衒心はいかに昔僧一
な罪障を許されまつらばあらざる面目事危きに似て安穏至る両館の御盛德也伏姫上の神灵擁護及ば
行を具足をる八士の所以にと言ひ義成主推禁めて然るに唐山に相似る例あり那唐朝の三藏
法師は渡天の往返十二箇年約莫十萬千里の逆旅を凌ぎて雷音寺に經を受る大功あり太宗
其首途を叡感のあまり他を弟兄に擬へて御弟と稱れ給ひ遊莫の十萬八千里遠しとは
投を方あり和僧は一旦散失る八顆の靈玉の往方を索ぬて宝を投を所なり只志穿らざりけ深信堅固の
故ぞ八顆の靈玉八個の賢者と聚合て當家の宝貝に忠られあの大功は三藏法師に讓るべうもあ
ざるに有やと定めゝ心る義烈院の御遺骨と狙公の名刀さへ携て女の来ける功功を累絲一
奇特は壁言と取るに物もあらば我も太宗の例に倣ひ弟といまほれども年齢我も兄なれば内兄とも

稱べれば我心單に厳君の御意を注ぎるのみと諭しぬ、大法師いとく困じて額に汗を頭を搔
けるばかりと氏元然るを執合ても両侯に言ひ、大法師の謙遜辭讓は則忠臣の赤心也御諚を人の
美を挙て功を虛しうせじとばかり召を御本意にそなはれ先罰れて一日も疾く大士門を招ぎを
さるべき計ひを願はれと稟せば義実主點頭て有理先度と同じくば今番他們が伴黨の准備を
安房殿定めゝと仰に義成阿と応て却氏元と貞幼にあるべき、大いに感涙を禁めて両侯に
言ひ御懇命の辱さに及ば兼當思慮良も遲滞の罪を許さるべ臣僧釋門に入りしより幾臘歩歴て
ひぐも弘經の與あり功を何でか藏を望ぶ然るを是上意恩命は臣僧の分を欲父孝吉の今も尚ほ及ばべ
さるを欽びいるに恩を憶ぎ法衣の袖を紫濡しぬ却恐るべ御諚の如く八犬士の伴黨を多く遣さるべ
ば倒に路次の障りあるとも御意に賢者に名を因ぶ他們は質素を旨とする。
勇士をいへば苟且も外物を飾るべ欽ぶ這回も元貞臣僧と照文主僕五七名を事足るべいむと辭べ照
文も膝を找ぬ氏元貞幼に談るやうと憚りある言ぶ延命寺の富に美は便宜ぞひあ人多け

文溪堂藏

まべ路次遅滞をそ障るべきを思ぶべし。且那穂北に忍岡る敵の城へ遠くねば是も亦憚りあるべし。大士の
参取りて後に格式を定められば伴當の多寡も問はず這回に往復亟るも便利るべくいるとこそ負わ
沈吟して。寔に其の説も謂あり。然ば先度の例に倣て究竟の賊兵十名と行裏を持せ奴隷五七名を
足るべき歟とふに義実主聞ぬ。義成主宣せ寺主、大士と照文が意見も以ある忍岡へ出るあれば他
們が主意に儘せべき歟と問れて義成主異説もなく。仰美りに成然べき事皆延命寺の隨意計らへと
仰ふ、大士歟び乗て白濱に武蔵へ赴く。便路をいへば照文と共伯に翌夕鮮繻を仕る御改葬の首より法
務に追善をろーべ伏姫上の墳墓を拜まゞ拜をなさべ又願に禀さまほしいなり。先要緊なる
る大士迎を果たいと直ちにぞ両侯俱に黙頭ぬて其の許
へ遣さん俱に鮮繻をいそぐべし。其の毛に負わ有司に下知て宜く賄ふまべと仰に大家額衝て俱に言葉
そぞ禀ける當下義実主に後方る刀架に置れる。祖公の名刀を合て抗て義成主に宣ふ。大月像小
月像大小の両刀に當家相伝の重宝なり。小月像に富山を大江親兵衛が大功の賞として他に取せら

れば両刀の内中一刀を脇ふる。あるに先考御遺愛の這祖公に小月像に優ると遠ばべ月と祖に水月猿猴
那に代ふ這をもて世に合ふる。遺刀に因あり。亦縁に表裝に好きもあるに和殿の隨意左
右に。身の衛ふあるへかと解示ーて遽與ーあべ義成主に遽く勝を找ふ受合て帯て欽を
禀ーあ口誼に看官猜べ。偖而、大に暇をあるに退るべとあるる折両侯より衆徒の衣料に絹五十反
布五十反を賜ふ旨を仰せ。貞行則美を後に延命寺へ遣けり。あの折亦照文に數度のあ使の賞
として秩禄を増賜ふ。格席を登せる恩命遺漏なるけり。公程に照文に君恩を拜ー瀧田の宿所に退る
又起行の准備を整え次の日賊兵伴當を従て延命寺に來て問ふ、大法師に然る准備もせ時を早
くとて方丈を用談せる。ものと人ーるければ主僕に煎茶夕餐の骨待あり。偖而その宵二更の時候に白濱
なる笘高工毎が風に住と報ーべ大家ひとく立出ふ、大に一個の沙弥ども俱せ。ものの脚の打扮を発を
搭駝に錫杖を御鳴ーて俱に港口に赴ふ主僕別れて准備の船二艘に乗ける這船國主の番船を
れば皆究竟の笘高工毎なる且追風なれば波濤上安らを明の日未牌の左側に両國河に漕入れて宮門

黒曲ゐ湖畔に。年ゝ千住の郷ゐ来よけり。不題再説信乃毛野道節。荘介現八。大角小文吾親兵衛。犬士ゐ。
畧表ゐ、大照文。主僕ゐ別れ。代四郎並ゐ伴當二個の郡兵と。倶ゐ一路十二名路を武蔵へ。取りて。
次の日穂北ゐ来りければ。船て氷垣の宿所を造ゐ。東人残三夏。幻中風の病患。初の隨ゐ。そのゐ。身も動ゐ
ねど。有種重戸ハ幾ゐ易そ。管待なく。篤くもけり。ゐの折親兵衛と代四郎ハ。初對面ゐ。有種夫婦。眼疾潰
ゐ。這老幼両個のゐ。隊ゐ。と同ゐ。親兵衛ゐ。犬人備ゐ。及代四郎ハ。荒芽山ゐ。戰死ゐ。ゐ。別
人欲と。訝りゐ。犬士ゐ。ゐ。犬江ゐ。富山ゐ。再出世の事。顛末。伏姫神の霊験。擁護。姥雪一家。萬死
ゐ。免れて。富山ゐ。在りゐ。ゐ。ゐ。

命ゝそ切なるを受けるハ心苦しく什麼ぞと思ひ難し。現ハ大角慰めを然までに思ひあいなく我々と共伯に安房へ赴くべかりし。我両侯ハ去の年来賢と招きせのべとも博く愛して棄ぬ。折々ふいなぎやとなると有種空あはせを願へくいへも義父殘三大病なるに且預けられる莊園あれ目今驥尾に附くべき後の便宜と為んのみとぞ道節信乃莊介自餘の大士も代四郎も亦云云と解諭して薦る黄金に義を思ひ有種只得受戴紙と重戸と召て件のうと告てぞ儘一裏を遽與せば重戸ハ大士ハ対いて欽びと舒て親に思賜を待うんと孝心看病勤に身を起ゝ躰と奥へ退のけ是ゝの後ハ大士ハ両侯に見参の衣裳と准備たるの盤纏医ゝねも孰も都て外物を飾ると好と思ひあ餘と求ると要ハ安房ゝ大の音耗を待ゝ一旬有餘逗留の程五月の初ゝ一時候有一日、大照文ハ騎兵伴當と従て穂北の宿所に来ける。有種と安出迎へ大士代四郎と俱に対面して骨待大々まらざれども、大照文ハ帰路とて敢長談せ。八犬士ハ両館の御談箇様々々と伝ふ。且御送骨改葬の事の顛末と告知せ有種ハ正月以来、大士止宿の欽びと述夏ゝの病患の安不を叮寧に尚慰めて然而両侯より夏ゝ有種へ賜る東西両之

種朝鮮人蔘時服夏ゝの麻芋を。折櫃幾箇ゝ欽めと目録と共に遊與ぞ有種ハ謹て八犬士の傳へる那一裏の欽びを照文に尚云云と。況遣あるべきを今又有恩の大々なるを且羞て拜謝するの三左右ゝ有般に受ゝ收め難し。大士們ハ傍より為に欽びと舒て且良将の仁義の餘澤を鮮に世ゝ有種を感ゝ目録と受戴て照文に答ゝ在下們ハ貴藩のお與に一介の功なきに昨今両度の恩賞ハ真如に餘まる造化ゝ義父の病患癒ゝ必安房へ参上して御恩と拜謝もゝ大の義宜ゝ孰成を願へくそゝと心て亦、大八大代四郎們ハ欽びと演る程に次の間に侍らる世智ゝ小才二ゝ侍らるて。おそるゝ出て来ゝ恩賜の折櫃と。緑に奥へ運入れて退と。去ける折有種ハと喚返らして郷食饌をいそぎ。大ゝ忌に推林に。有種に告ゝ今番ハ火忌の君命に十一郎と共伯に八犬氏ハ迎に来れば然ゝ骨待ハ預りかゝる。ゝ犬子速姥雪ゝ紛装に時ゝ程ゝ。ゝ疾々と只骨に去尚を促せ。操殿に有種強ゝ。紛に先茶と看め果子と薦め立まゝ。諸侯に推ゝて絞に送ゝの盃を差る程に重戸も召れて出て来ゝ、大照文に對面して親に代て恩賜の欽びと稟ゝ且、大法師に。十念と授ゝ。親の病

○文淵堂藏

厄鮮除の與八介後八犬士と代四郎八一個各々車戸ふ對ひて皆懇切ふ別を告てゐる大人八大病也厭ーかっひと憚そ這回八故意諂慰めむまの侭わく別れ為。本意ゐろ紀不娯ーけふ申も一言乞一句送の口誼長くれども人多ければ時移りて下晡ふゐろふけの开ぶ中ふ、大のみ素ゐる酒肉ゐ疎ければ唯人の裝ゐる盃ゐろ長視なる鈍まり中心悄地ふ焦燥のあまり推禁ん さ ぶ ゐ事の果ゐと等程ふ照文諸六士代四郎八幾番とゐく東人夫婦ふ辭ひて去ゐく盃を收めさせて退ひて身社衣ゐて出て来ゐ大家ひとく告別て倶ふ外面へ立出れば前後の夥兵伴當们八是より先ふ伴部屋ゐて酒飯の管待漏る者ゐく事徒らと照文ふ告ゐ玄関の邊ふ在の當下有種八世智仇小才三们ふ八犬士と代四郎の行裏を持てそ千住河まで送りけ然ば亦這穂北ゐる莊客们八犬士の結城ゐりかゐ来て復止宿せと守知りて安房へ赴ひ祈ふ遠く送らをこのかと忍岡へ憚ふあれば有種豫他们を制めくこの日の離別を告知せば徒而八犬士と代四郎八、大照文主僕と倶ふ千住河原ふ来れば今朝者も、大照文ふ安房ゐりて漕ーまけゐ迎の快船二艘あるの一艘ふ切八犬士の倶ーなる加ゐ夥兵十二者と伴當を皆無せふけり。大士们の乗ゐ船の輕くて走ゐふ速ゐん為ゐ船の内ふ有種ふ幾の程ふ狡餽り来ーゐる食龍酒壺ヨリくゐ大家啓筆て旦を見て徒猛可ゐる別路ふ心を用こ交遊の情義を感せ八ゐるるけり然ばく者八陸ゐ向ひて離別の口誼ふ湿ゐ目送ゐる者八水際ふ立く猶再會を契人と欲ゐふ船八ゐも岸と離れて隅田河ゐて漕下ゐを招くかゐ弱蘆聲咻ーゐ覺々子。鳥ゐ友を思ふ憂とあれば欽ぶあれば世ふ類ゐ越ふ八個の俊傑と八箇の灵玉共侶ふ串ゐとゐ大法師の力德八羊を繋ゐ御ふ飾る錦の袈裟ゐて細染法衣今も抖藪行脚の打扮八身を雲水ふ儘ーゐ追風ふ競ふ快船のゐく来ふゐる澳津波音のゐ高く日八暮て甲夜間ゐゐ星光水ふ映ゐを愛と疑れゐ短夜の明程ふと高工毋ゐ建連ねゐ艪ふ楫ゐ械と腕の漏ゐ力と勢ーそいそだけり意ふ大江親兵衛ゐ両國河より鮮縯の折と勢八相似て事情八同ーゐる所ゐ那里八魔を討ゐ艨艟這里を弘拯言の逢庚ゐる法師も里見の寶貨船八彩の壁打出の槌脉蓑笠隱れゐ名と顯ゐ天の下俯仰瞻ゐ上總ゐる磯山彼八水長島安房の白濱皓々と明ゐく時候ふ風恬て港口ふ船八果ゐ居べ。自評ゐ云這前後二回八上ゐ如く。安異平和のゐのゐ也且前回より此ふ至て商議の段ゐ多れば看

官數〻思もあらん遊莫皆是有要の事也。内中に伏線あり。襯染あり。後に思ひ併さるべし。約莫作者の筆勞はヨヽく平和の話説に在り。且看官は某知の如く反て本傳中の人々をもいまだ知ざるあれば亦復鮮ざるとをゆゑ其頭は並て花を故に筆渋り硯乾て帯見心一倍多のみ〻詩々として陸らず豆疑を作者の苦界と云本傳處〻に在の類も実に已とゆゑなるの〻然るを知つて左も右も綴り果て看官に厭れざるむかし拔也。唐山元明稗史の大筆彼六才子と數へられも思ひを潛る處多し。

第百三十回

八行の靈玉光を良主に增も
九歳の神童氏と花営に請ふ

離合時あり。窮達命あり。然れば〻大照文代四郎と八犬士を迎の快船は通宵走て詰朝安房の白濱へ着る程に延命寺より出し置る千里候の道人が報知せし本山の役僧五七口と稲村の城より遣られたる雜色奴隷さへヨヽく先つ馬頭上に在り登時八犬士、大照文代四郎と共伯に三板の船に船を離まそ濱の沙石地に下立る程暇兵伴當に別船を〻推續て漕寄られて伴を缺く者多し。

城より来れる人の數殊更ヨヽ多れ。是より猛可に伴當頭て最晴に熟鬧を旅迎の儀而八犬士の人々も勞ひを倶て延命寺に赴け客殿に請待せられて早飯を羞めるまの餘も暫待大々あれば是より先に稲村瀧田両所の城より八犬士を迎接の頭人は屋景能鮹船員に准備の人馬を〻ヨヽく領て既に延命寺に来て別席に在り權且て件の両個の頭人、大照文代四郎と倶に八犬士に面會を両侯の命を伝て其言の趣に大氏の毎風波を敷で召に速に応ずと神鈔に恵るる船中に疲労の色見ずの年來なるかに今日先麗田に詣て明日稲村に參るべし是に由て所從の人馬を遣る遲碇もべるべし演達を當下大士は席を避け拜聽を俱に答禀を両館の恩命実加に〻あまりて倒に後安〻ぶ親兵衛を除くの外臣等に一介の功を非如隷さへ〻騎馬の伴當を居ヨヽれ〻とあり。烏滸がましいかな。大長老も同意を伏臣を迎接に来る折に自行脚の打扮を以然ども見參の礼服に聊准備仕る只の侯に召倶せられ〻願はくは辭と辭に景能に聞て不合の義は老侯の御意に〻御沙汰あれば當館に辭せ

ゆゑ、ものあるべしとの諭をもて、大も倶に犬士と諌め、剛才這御使達が、拙僧と蜑崎姥雪が
両館の御意と偽へ、折拙僧が兼興を犬士と倶に参らべしとありしかば、本意なきねどを不敢の
罪を怕れて、家来仕ふ然ば、鄙の拙僧が更に穂北へ赴いて、各位を迎へ、折ふも行脚の打枯ら
ば、二十餘年の宿望成就の客情と、果ては既に、ふ、ぬそ、行客の折と同じ
かぞ呂尚の望みが渭濱に文王と同車の例に倣ひもとも已と柱て君の命に従ひ、しまに不敢の
義を思ひあらまを、と悄語示せば、犬士們い、俱に暁得く後悔者謝して貌を改めそ、然而昌に能ふ
向いて畏りをぞ禀けける。言果て八犬士は、倶に別席に退いて、衣裳を更めなどする程に、伴當聚合
ひとゆそうが躰て玄関に立ぬるに、大法師は轎子をぞ寺格の伴當勘ふ、八犬士は一人別に
隷られる。両個の伴若黨と鞋奴と甲乙都て二十四名、玄関の邊に在り。その餘、乗馬八疋、鑣奴
十六名、並に鎗を柳笠、傘、雨衣、袜、竜、坐草、圓坐などを持る伴の奴隷五六十名は、咸三門の外
面に在り。その中に親兵衛が乗馬を、今番賜る駿足、黒毛に当る折、稲村の城へ

乗ぶ、既櫪取吏に預ける。那青海波へければ、舍咲るのみ何ともいねど、浮雲啓けて、天日を見る
時に取りて、是も亦面目あるかとぞ思ひける。當下景能照文は、犬士們都て参着の趣を館守
えあけんとて、別れて、稲村の城へ赴くに、その身の伴當のみを、ねて、那十個の野兵をぞ、八犬士に従はす。
代四郎が伴當も、義に風波を病煩ひて、上総の木更津より還りくる奴隷と倶に、三四名、瀧田の
城より来ふければ、黨勢ますます、そなと晴ぬぞ見えける。介程に、大法師は、犬士と鄉道の
頭人、これ先へ立べき、該、これも勇士の馬前に出家人の立ん相応しくぞとて、故意後方に従へ
代四郎と貝六郎は、各伴當を領て、先に找ぶ、三門より出でぬ程に、八犬士も推續いて、准備の駿
馬に、ひらり跨る。仁義八行の次第に倣ふて、第一番は則是犬江親兵衛仁、他は犬士を招會の
使者の一人、これが鄉道を兼ねに宜く、字順も亦かくのごとくなれば、大家強て他を推て、行列を
定めり。次は犬川荘介義任、犬村大角礼儀、犬阪毛野胤智、是を仁義礼智四行の一
隊とぞ是より下十間許、故意横路を啓いて相續ぎ却第五番は犬山道節忠與、犬飼現

八信道大塚信乃成孝。犬田小文吾悌順。又これを忠信孝悌四犬の一隊とも。あれども甲乙あるふあ〜ぶ只八犬の字順ふ據るのゑ。是より又二三十間引下りて。大法師ハ網代包の轎子ふうち乗る。左右ふ麻の社祢の股佩袴ひく。両個の寺侍。所化四名相従ひ。一對の柳笠ふ紫の厚總結ぶると。天鵞絨の飾嚢被る長柄の傘。ゑ〜頭嚢ある蝿涂の杖。浅沓発。児雨衣笹竜胆など持る。伴の奴隷猶ヨイ係べ。然ぞ八個の犬士們。馬上優ふ列を乱さぬ。孰も清年二十ゑ前後ゑ。面白く姿美ゑ。又筋骨逞くて。身材ゑ卯ゑ。現鼻直く口横〜ゑ。人面異ゑ。ゑふ似るも美貌醜顔人さまざまの中ふ玉成ゑ壮夫們ゑ。今青雲の時を紐て前駈後従の伴當ヨヲく。徐ろく馬上の光景ハ。這頭ふ沿ゑ。ゑ壮規ふ。あれば路ふ紐あ良賤男女ハうち驚ゑ。訝り視て歩を停ゑ。ゑりけ。恁而八犬士ハ代四郎貝六郎を先ふ立て。引れて瀧田の城ふ歩ゑ。第二の城門ゑ馬ゑ下て。倶ふ玉関ふゑ。も登れば小水門目案内ゑ達て遠侍ふ造る程ふ。大法師ゑ續ゑて参ゑ。代四郎と貝六郎ハ倶ふその席末ふ在ゑ。

義実。玉ハ昨日當城ふ還りゑ。今朝ハ赤稲村の城ゑ。犬士們を進退の與ふとそ。堀内蔵人貝ゑと芦川兵庫助清澄とを。瀧田ゑ遣て。執支たゑ。ゑのひげ。初蜜崎照文ゑ。招賢の使を奉りて。関の八州をうち巡り。ハ義実主尚在任の時。ゑれゑ。今番犬士們ゑ。初見参城。瀧田ゑ。紹させて。且故老の家臣奉りそ。その見の執事ゑ。ハ終始本末。人を易ゑ。愛ゑ。例とそ。ゑえけ。問話休題。恁而貝ゑ。清澄ハ。大を労ひ。犬士ふ對面て。老漢の仰を俟へ程なく。逢せあへ〜と。躬く奥へぞ。ゑりける。その折瀧田隷の老黨有司們も。犬士ふ對面ゑ。見参の式を儲達て。訖て。廣書院ハ案内をゑけ。ゑ。程ふ。犬士ハ晋上の五明扇並ふ大刀馬代を。各前ふ図て。謹て。ゑなるふ姑且て。義実主ハ上壇の間ふ出ずて。儲の裃ふ着ゑ。貝ゑと清澄ハ壇前ゑ。左右ふ侍り。近習東岑萠三ハ佩刀の役ゑ。そゑ。侍ゑ。後方ゑ。侍ゑけ。登時瀧田老黨ハ。犬士們の姓名と。一個々ふ告ゑえ。且晋呂の贄。恁々と。都て披露て。ゑれば。近習の一毎ヨヲくハ。で来て。件の扇子。大刀馬代を。執接て。御前近く進ゑ。ゑれば。義実。ハ。犬士們ふ席と

賜ふて。先茴茶の礼を行ふ。あを里見の家倒れ。年始の祝壽及初見参の折るゞに親戚の人々。家老城主の每月寂初の薄茶。主君ふまゐらせその人も賜るゝ。茴茶の礼と倡へらるかの如。紀每月茶を賜るゝ酬。まゐらせて三度の礼あり。庄茶い主君ふまゐらせその人ゐ賜らゞ盃も賜ふのゝ。酬。まゐらせて許されゞあを兵頭以下の有司功ある者の格式。その他い茶礼を行れゞ。盃も賜流。受戴紀て退くゝ。井が中ふ今八犬士ふ両茶の礼を行ふゝ。人みな是上ある紀栄と。茶礼畢て義実主八犬士を身邊近く侍ゝ。七合笑ゐ。宣ふ。汝们ゝ子が外孫ふ擬ゞ紀。ようあるとゝへゞ。我身いゝの年来退隱の翁ゐふ。今安房殿と閣紀て。徒物々ある紀對面ふ那人の意ふ従ゝ。先見参の試検ゝ却感心のゆゝ。ゝまゐれ親兵衛が三ゝ。この大功い世ふ有ゝ紀ゝ。そ。つゝ。うへ。開ハ仕ての上ゝか。其外ゐゝ這七名いゝ。まゞ當家ふ参らゞ。ゝ信乃道節い甲斐の猿石ゝ濱路姫の窮厄ゝ救ひ合ゝ。大功あり。又毛野荘犬角現八小文吾们も結城ゝ那僧俗の悪ゝ懲ゝ。反ゝ。その勍敵ゝ一人も殺戮せゞ。且先君の御遺骨ゝ異ゐ。當國ゝ入れ奉りしゐ。莫大の

勲功ゝ親兵衛が富山の功名及汝们七名が猿石結城二箇所の智計功名い俱ふ當家の與ゐて。いまゞ仕ゝ。己前ふ在り。今也八雄満足ゝ。招紀ふ応ゝ。その地ふ聚合て。俱ふ安房殿ふ仕れゞ楠家ゝ。八臣新田の四天ふ優りて憑ゝ。かゝゝ。各忠勤ゝ盡ゝ。ゝ盃ゝ賜ゐ恩命例ゐゝ。かゝねゞ八犬士ハ俱ふ唯々ゝ。言業ゝ童ふ。ゝ。獻酬三度ふ及ぶ時一人別ふ大刀一口。熟も價千金ゐゝ。ゝ自金ゝ賜りゐ。その式礼ふ時移りて。祝壽ゐ。ゐ。ゝ折蜜崎照文も稲村よりかゝりまゐりゐゝ。ゝ。ゝ。俱ふ召れて見参も登時ふ義実主八ゝ大法師の功徳ゐ量里照文も亦招賢の宿命ゝ果ゝ。勤労ゝ誉さゐゐ。就中延命寺ハ二十餘年。信心穏らゐ。ゐゝ。神灵佛陀の冥助屢經験あり。遂ふ當家の宝貝ゐ。八賢者ゝ扱引。今日ふ至ゝ。和漢倩ゐゝ。ゝ。ゝ。西茶の礼を行ふ。ふ後亦蜑雪代四郎ゝ召ゐ。ゐて貞行仰ゐ。ゐ。蜑雪與保老て衰ゝ。百里の遠ゝ往復ゐて。道節们のゝ八犬士ふ俱ゝ。ゝ。ゝ。

八犬傳九輯巻三十一
義弟一
孔弟三
孝子弟七
唐弟五
信弟六
八犬傳九輯巻三十一

隈も忘れ身の程々に過ぎぬる就中代四郎は感涙を禁ず難て畏りとぞ禀けり低而見参の礼儀畢
て両個の近習左右より捲き来る翠簾を垂れ程なく義実奥に退るべく大家ひとく頻衝て姑
且目送りなり然而八犬士を首実・大照文及代四郎に至るまで各二家老に対面向に歓びを演恩を
謝して倶に遠侍へ退るに程もなく又別席に招じ給せられ貝幻清澄瀧田の老黨某甲列坐
せ則仰を伺ふ天氏の毎並に十一郎代四郎は明日稲村殿に参上して館に見参しなるべし延
命寺に寺に退て明日稲村へ参會給ふ犬士の休憩所造出されて當城内に在り只今御飯を賜
へれば着て食て退るべと仰渡されぬ大家兼て恩を拜して共侶に品能の立程に給侍の毎案
内をして又別席に饗食饌を羞ゆる犬士と照文は同席にて大と代四郎は亦上下二間に別られる甲
出家人なれば其饌に魚肉を用ゐず乙は格式異なれば犬士に刻るとて允されぬ膳部に疎るべもあら
ぎ中酒の折に老黨若黨那這心を屬て不平を薦めけ恩饗食なり殊に事果て又茶を賜ひ果
て子と賜に姑且して八犬士は老黨有司に君恩を歎びを演て暫り立程に大代四郎も出て来る

大犬士は大士は向て明日稲村へ参會に時分と刻り相別れて白濱へかの去る照文は老侯に
御要ありと迎えるに獨君所に留て遠侍に待りる鄕臣照文は犬士者到の注進に稲村殿へ参り
折館の仰られるあり所せあるとて多く。小程に八犬士は代四郎と倶に退る出て休憩所に赴く今番
猛可に造ぎれ八犬士同居の宅は第二の郭の邊に在れば妙真代四郎は別に宿所と相距る
遠ぎ且照文は屋舗は其首より猶這方にあり八犬士は伴當の従に隨に相俱て先照
文の宿所に赴く玄関に呼ば老執接人に名簿を遞與に招會せられ慰労の口状倶に歓びを舒る
の照文は帰宅せられ俗は退去て倶に妙真は宿所に立寄て先その安否を問ふ小
程に妙真は暴に親兵衛に別れ日る果に及ぶに逆旅の安危を問ふと思難て寝不娛
暁毎に枕を安くせず約一旬有餘を経て親兵衛は両國河原に館の御使蜚崎生に料
ぬ逢ふと必ず隨即素藤と再征の與その宵快船に乗て上總の館山に推寄て城を拔
妖賊魔鬼兵を悉く討夷げて又犬士を索んとも結城に、大庵へ赴くとぞ其の目のるまでなく

這里に歩えび。妙真欣び慰めて。後の音耗を尋ぬる程に。大法師が先君の御骨壺と駝鈴より照文と共侶に結城より尋ね来るを。且白濱なる延命寺を御改葬の事の顛末及親兵衛們八個の犬士代四郎と共侶に武蔵の穂北に杖を住めて。大法師の迎に来るを。そもそも氷垣許在と信具に歩えび。妙真はいと安堵して。去る日幾日とまで知らねども。當城に八犬士同居の為とて。海北より番匠們が猛可に居を聚ひ。造り出せる宿所は遠くも四程なれば日毎に折々外に出て視るも。樂しく恭に両館の寵恩を仰げば。高に柿葺屋の廣やかなる日數を累ねぬ。

去一旬に足らぬ間に造果しは。昨日なるを。今日は赤暁天に。犬士代四郎さへ。大照文と同船して。白濱なる延命寺に着到の歩えを。隨即老侯に見参の為。今日當城へ召よせらるゝと云事なり。田を今朝有司の徇知せらるゝ。森足の踏とゝ知らざる迫の拗び。獨妙真のみ。音音思ふ。單節們も稍々沿方の日の欽會差もわ。ぐ。犬の来る代四郎のみ。故主道節。自餘の犬士も。親兵衛も故郷なる所攻める御飾の錦の有磯貝に花を添る花貝の下枝の苔數る。

両個の孫に新しく織麻衣うち被せそめと被に倶に。妙真が宿所に来り。問慰めて送る。日欽び。野邊遠に今咲く桜子よりも孫に迷に愛さの老女心の親切に郷食庖の為に。庵清掃に。犬の届く架の鍋さへ。熟て汚目なる金の蓋被け布巾を掻合て洗い流しに。昨夕の飯粒小桶の底に浸されて。肥満宗なる炊妾に封助ヨメ。火焼鳥揚る擂盆のみんさお現鶯に刷毛異名に師の目細鳥目白壓に早漬の茄子の小瑠理青鴨の酢口に掻くや辛のきく戴に笠果實れ鶏頭海苔萌生の豆鳥筍の皮とむく鳥鰭津物魚類に薄濱筋の目面と抓むそ山長兒百姓の日長くて。下晡ふるゝ時候。親兵衛小文五吾道節們の八犬士に。外原来る程に代四郎に伴當に走らん呼門者。よりと告れば。妙真に遽しく立出て内より用く庄折戸巻石に庭に。安内せらる。犬士們に緑頬ゝぐちに登る坐席に。絶に異に八個の賓客圓坐せる。座者の折敷に打鰒魚昆布搗栗執具に卒と薦めて。胆向に心ぐるに。生寺に老女東道のみ差配に廻の難なる。嘗に連の木鳴ゝ茶と呼べば音音們思に姉妹に。俱に濡に裙の端折返して拭ふに。祥

外して汲出す盆に茶碗の八曜、六稔ゆゑ月日星今再會の折を待て給侍も對の義姫節婦
欷と哀しさの涙を遺る瀬中暖簾寒げて倶に出て来る累れ茶托両三箇載せる茶碗
暦ふいとゑぐう野の花るそ色香ハ薄く疎茶ぐ迷ふく薦ゆて道節ハ朝と額衝
退て妙真の後方ハ一雲妻時ゆるゑ力二郎尺八ゑ親と墓ゑ出て来る八士ハ彼らと
る面色ゑてゑ伝祖母の左右ハ笑ふ代四郎ハ庖丁より找ゑ入ゑ丹ハ權且ゑ像忙ハ這墨ゑて両個の
孫の在るとゑ合笑ふぐう音音ハと倶ハ其頭ハ坐ゑ占ける是より先ハ小文吾妙真ゑ向ひく
絶て久しくゑる犬江の大母ハ差ゆまるゑと芽出ら我ハぐ上ハも結城穂北ゑまで蛮崎生ハ
れけん、大大徳と蛮崎生ハ穂北ハ近ハ渡せれ水路を来て今日晴天ハ船ハ白濱ハ着くとゑ伝
皆當城ハ召ゑせられて老侯ハ見参ゑれる只今宿所退るゑれ親兵衛をゑせゑと思ふく立
寄ハ伝ゑ犬塚犬飼ハ行徳以来相識ゑれ伝ゑ犬川犬村四個の義兄弟も
訪慰めとゑれ伝ゑ相伴ゑそこ伝ゑれと引會ゑれ信乃現ハ道節荘介毛野ハ自識ハ認ゑ

も名告と来。皆云云と慰れ妙真ハ涙ゑ出難て上心ゑ落る涙ハ両袖ゑ顔ハ掩ゑ俯
沈む。親兵衛ハ亦慰めて喃大母ゑ豆義ゑ時の不祥ゑ憶ゑ別と存ゑ思ゑ
ゑ禍鬼ゑ芝拂ゑ這大兄達ハ父公共伝唱毎婦参の再會ゑれ歓ゑ楽ゑ涙
ゑ云ゑとられて妙真ゑ涙ハ涙ゑ點頭て开ハゑ居ゑれと查ゑ犬田主ゑ身の
顔ゑそこゑ河沼蔭ゑ父ゑの及房ハ母ゑ先ゑ胸ハ思ゑ亦且ゑ試ゑ慰
ゑ小文吾親兵衛歎ハ同ド亡親の一世偶ハ麓下の松の梢瞻仰て悄然ゑ人ハ
ゑ涙知信乃現ハ自餘の四天士共伝ハ今世ハ家尊家母又亡妻ゑ懐ゑ犬塚犬村里の
舊巣遥ゑ八百目ゑ越路ゑ濱ゑ迷ハ都ハ疎ゑ鄙の雛衣名ゑ紀ゑ心ゑ表情
人異ゑ感ハ似ゑ憂ゑ何ゑ勝間田の池の鳥ゑ鴛鴦ゑ夜の鶴ゑ先ゑ老ゑ鳴ゑ雌雄の中ゑ
嫦婦鳥翅ゑ枯ゑ立ゑ惜ゑ音音ゑ哀ゑ單ゑ節ハ有ゑ国坐ハ亡者ゑ尚存命ゑ侍ゑ
秋ゑ涙ゑ喜ゑ儘ゑ世ハ間ハ短ゑ人ハ命ゑと胸ハ覺也無也繰復ゑ千行ハ涙一筋ハ泣ト

と俱に聲を呑む心も知らで稚児たちは恥氣つかれ呼吸を安く信と疾視る二母親の眼包ふ餘。
雨雷脇に珠做を可き席上吝蕭然へ登時道節氣を獎さんと音音をヤヤと喚うけて卒よ
姫母幾も健き。恁だら芽出たく再會へ世ふ三ヶ月と思ひ〻汝們夫婦更る単
節も恙なく子さ〻挙げ〻奇異妙契其黒ふ那児毎き二世の力二と天八狗現物種に絡れ
とふ世の常言以あるる孰も父の面影あり久後憑〻かり兎〻寔ふ忠臣孝子順孫義姑貞節婦お
あ〻ぢ〻猛火の中ふ必死と免れ良人の身後ふ送れるすあり皆是神祐不測の錫我道節們が
いかに〻企及ぶるるを。実ふ敬服々々と嘆賞されば信乃荘介小文吾現八も荒芽山き一夕値
遇の相識と又毛野と大角へ今番ぞ初度の對面ぞ。倶ふ崔県識の恩ひあ
で皆共侶ふ相祝る言ヨヲれば蕭然ゐり〻席上熟閑ゐゐふけ。當下音音へ両個の媳婦
と両個の孫を共侶ふ卒とだらふ推卒て杖き出て太士們ふ向ち朝ふ額と衝ての見ふ嘉會を壽詩
して却道節ふ依ゐるゐ寔ふ目今仰のごく。死きべゐけ老們ぞ身へ伏姫神の冥助加護又両館の

御庇き。刀祢達ふ先ゐて御扶持の下ふ仕ゐき。冥加あるて本意ゐる及ふ代四郎ぞ物々ゐ。
使れまゐ又願〻かゐ僥幸ゐけ。傷痛く思され物体ゐくて仕ゐ道節守ふ出き
御ふ老人ふ鮮諭〻なるとぞ〻功人の是ふ賤ふ〻ぞ功とも図ふ多で賞せゐるへ明君の善政ゐ
ゐと爭何せん昨日まぞ落魄ゐ我道節ぞ旧僕の當館ふ仕へなりて同家臣ふゐ〻へ則
故主の面目き。恁だら秋ふ〻ゐ。誰ゐ傷痛〻ふ毋き。と諭せば代四郎我ぞ出て其ふ豫御教
諭き。馬の尾ふ附く蒼蠅の幸ふゐると知るゐ〻却今日の見參ふ片茶の礼と饒され御恩あ
まて心裏恥く実ふ苦〻ふ流ら側ら妙真へ憶ぞ詞の折衷ぞ。ら愛ゐ〻ゐ口誼ゐ
一番要時間ふ且毎と虜ゐ〻ら。とゐ〻音音へ〻ゐて然ゐ前ゐ盃の准備ふ〻ゐ教ゐ〻ゐふ女
中へ何て仕ゐき。とゐ〻ゐ立ふ曳ゐ単節き各児毎と椎立て。倶ふ庖湯退ゐ〻ゐ登時毛野へ膝拍
鳴ゐ〻て却ふ忘れゐ〻ゐ我們ぞ伴當へ今番上ゐ隷ふ〻ゐ。御内の雑色奴隷ゐふ這頭ふ
ぞ〻ぞ直へ要き。ぞ咲れゐけ〻ゐ。ふ大家諾ぞ。その〻へ心屈ゐ〻ゐ。ぞ代

四郎推禁めて否伴當のおいも小可らるゑまうければ明日又伴ふまあるねと時分を示して先の程皆還
あるひに勿論各位の乗馬ハ上の賜でけれども厩櫪を乞れ厩奴ハ預けて秣を飼夫く鎗柳笹をどんん
宿所へも出て給僕ハ遠與りねと呼咱ているしかなと報ふ大家再戦ハ及ばぬ野ハ所ハ點頭て
寔ハ老功脱落ハ寒と誉れば大家うち與で倶ハ笑局ハ入る折ふ曳ハ單節ハ庖厨ふ繰ハ
運びて来ハ。萵苣ハ盃銚子ハ三四種の酒菜さへ白人料理の似而非塩梅も郷食心ハ誠ある心だ
かりのあへるの。冷ハ程ふと妙真ハ老婆親切ふち扇ぐ火照暑ハ紙窓群て入る蚊と燭點しく音
音ハ出ぬ燭臺の措処さへ中坐席中睦しく武男士の交りハ現憑ある犬江を今宵の東道ぞと
獨提撕ふ姥雪の雪ハ中ふ塩焼の堅魚の切肉装分る八箇の小碟ハ沙しくも管待態ハ淺か
ふ大盃ハ巡り甲ぐふ沙量ふ飯の合膳ハ前茶の土瓶何ふの馳走と躱て引き渇く隨意
幾茶碗上頻ハ出る酒盃の數ハ竟酌ハ鳴る鐘ハ初更ハ三更ハ更闌て音鎬を吹えけふ。
登時諸大士両膝正て倶ハ妙真ふち向て欽ぶを舒別を告ると妙真ハ聞ハ然れども大士ハ固辭て

従ハ七十ハ不くハ人ハ今番上ふ賜り。宿所へ入ぶ七。ハ中ハ園坐ハ與ハ無ふ夜醮ハ憚り
ふ且明日ハ小稲村の大城ハ出ハ然ハ代四郎ハ倶ハ
辭て宿所ハ近程ハ腋子 親兵衛 ハ諸君子ハ時々對面輒ふ。今宵ハ涯ふ
妙真強難て竟ふ盃ハ儘せ八犬士ハ又告別を外面ハ立ふ宿所ハ隷られ奴僕西ハ張
燈ハ推ふ迎ハ来ふと歩ハ出ハ従て文ふ出ハ間ハ一町ハ内ハ在ふ登時妙真ハ音音曳ふ單節ハ
倶ハ備ハ皇ハ見送ハ代四郎ハ猶後ハ跟て其ハ前ハ送ふ慇懃ハ八犬士ハ這新造ハ宿所ハ入
ふ今日ふ隷られ雑色奴隷ハ九名在ふ開ハ中ふ若黨両三名ハ遠く紙燭を秉て玄関ハ出迎
這里ハ苟ふ休息所ふと賜ハ廣ふ客房ハ書院ハ寝室浴室
厠ハ凡家具調度夜物蚊帳ハ至ふ迄ハ通て足ぶ東西ふ分ハ才ハ一旬許の程ハ住ふ家と造ふ賜
ふ容易ふ成ふ所為ふ東西ふて堅ふ君貴ハ過分ハ且畏ハ且慎て客枕ハ就ふと短夜
明易ハ曉天ふ皆起出て倶ハ浴し梳ふ燈下ハ早飯を果ハ程ハ昨日ハ伴當ハ七八十名馬ハ

雲つ来ふけれ八犬士は遽く礼服を整て各件の人馬を領て二の城門を出る折照文代四郎も伴當と
いいで さきつる らんれつ ありし さつたに のづく ゆくさの
おそ出そ来つ俱ふ稲村へ赴くふ五月は那四も雨障り屋拳ふ時候ふ這四五日は天晴て路の便宜き
あり。瀧田と稲村は郡異也。瀧田は平群郡。稲村は安房郡。程近くれば大士們は俱ふ馬の足捷を早也。已牌半竿過る
時分稲村の城ふ参りけり。その旦執事は杉倉木曾介氏元。東六郎辰相。その他堀内蔵人自紀。荒川兵
庫助清澄。登桐山八郎良干。浦安牛助友勝。田税戸賀九郎逸時。苫屋八郎景能們有司近
臣ひとまく出仕の袖を列ねて有徳り程ふ延命寺の住持、大法師も。亦當城ふ参りて。八犬士は昨
日のごく。廣書院也。義成主父子ふ見参也。八士進上の贄。両公の賜。両茶の礼。大士們の功を賞美の詞
都て昨日瀧田殿也。もり趣ふれば具ふ世ふ。後、大照文代四郎も両茶片茶の礼を饒され且その功を
称て盃を賜る。又別席也八犬士と同く酒飯を賜る。昨日ふ異ふ。但當館也。恩
賜の数を増て八犬士一人別ふ札ふ甲冑と添られ。郷食饌も海醋野蔬種々の珍味を盡さ。式
礼畢て義成主。又氏元辰相とも八犬士ふ仰渡さるゆう汝們の内中大江親兵衛を這回又改て庫總國

夷隅郡舘山の城主ふ做さる。逆賊蜑田素藤を再征大功の賞ふ。猶思召旨あれ。七大
士と共伯ふ權且瀧田の宿所ふ。又大塚信乃大阪毛野。犬山道節。大川荘介。犬村大角犬
田小文吾犬飼現八們ハ甲斐國猿石石禾。又下總る結城也。當家の與ふ功ありけり。吟えたり。
遮莫親兵衛ハ既ふ當家ふ住汝們ハ今ふ當國ふ参られ折れば。その功ふ甲乙ふ。
汝ふ。ものとも。餘の七大士ハ家老の下。兵頭の上ふ。城主格ふ做さる者也。今よりて又大功ふ。各
その城ふ賜ふ。但し汝們八犬士は當家ふ宿因あり。老侯則外孫ふ擬ひ。愛顧既ふ他ふ
殊ふ。ふ。ふ。當館の。ふ。與ふ。當ふ外任ふ同ふ。ふ。
ふ。月俸五百口ふ。宛ふ。その餘所從の人馬ハ。臨時の軍役ふ。折雑費ハ右の定の外ふ。
上の。賄ひ。ふ。大法師ふ。蜑崎十一郎を召て。氏元辰相仰を。八士を招會の功を
言て東西を賜ふ。又その次ふ。姥雪代四郎を別席ふ召て。氏元辰相列坐ふ。富山以来功を
誉て両個の孫十條力三郎。尺八郎。月俸各二十口を賜ふ。因て他們ふ成長まで代四郎その後見と

文学堂蔵

父やく仏事まどらせて つ
軍役ゐ大山道節が隊ゐ隷くべ。今よりの後臨時の御用あらば代四郎出て仕なれ。御用ゐ折ゐ退
紀。老を頤ふべ。そ時服と黄金三百両を賜ひ。各君恩の身ゐ餘れると拜謝して。俱ゐ遠
侍ゐ退りゐその日の恩賞ハ只這毎のゑ。ゑ。ぞ量義ゐ墓目素藤と前後両度の征伐の折有功の労
を紛れ。堀内蔵人杉倉武者助堀内雑魚太郎東六郎們及荒川兵庫助浦安力助小森
但一郎登桐山八浦安牛助苫屋八郎田税戸賀九郎們を首ぞ士辛功ゐハ漏されぞ。或ハ秩禄を
加増せられ。或ハ職事と登。格席と薦め。泛々言雑兵ゐ金銀青蛙を賜ふと。各差ゐ那晋文が
介子推と。送れ疎忽ゐ。ゑ。ぞ。誰ゐ。雀躍せざるべ。大家恩を拜。宿所ゐ退て置酒。老所親ゐ
祝壽の盃を薦めけり。中ゐ杉倉武者助直元。堀内雑魚太郎貞住。小森但一郎高宗。浦安
力助逸友ハ各守城の頭人。そ。毎比より上總ゐ在り。今番。皆稲村へ召よせられ。その恩賞ゐ預り
け。唯政木孝嗣。石亀屋次固。太鄕三の。恩賞受るゐ由ゐ。ゐ。と。八犬士ハ俱ゐ。ち不娛。て。千
載の遺恨と。然ゐ。杉倉氏元ハ衰老。七勤ゐ勝ず。堀内貞約ハ齢七旬ゐ遠。ねば。俱ゐ致仕せ

里見の四家 光古記ハ載せず。ほ呼 牛ハ同じ。 或ハ木曽 ハ印東荒川 是ハ或ハ云杉倉堀内東荒川 里ハ接 杉倉本 姓ハ本曽氏 東の里名称 里ハ並の別 人ハ本 里見記本の載せ所ゐ

嗣ゐ。所生の女児と妻せんと。各致仕退隠の情願書と呈り。ゐ義成。恨ゐ禁ぜ。饒ゐ。ぬハ
ゐ。氏元も貞約も。再請稟て已ざりけれ。竟ゐその職役を免除せ。れ。則直元貞住ゐ
親の所領と賜ひ。俱ゐ兵頭ゐ。倣され。廳南榎本両守城の頭人ゐ。浦安牛助友勝と。登桐山八郎
良千三ゐ。を奉ず。舘山の城預。高宗逸友ハ故の尽ゐ。俱ゐ上總へ赴け。ゐ。是後話人介程ゐ。八犬士ゐ。當日
稲村の城を退ゐ。折。大法師ゐ相別れて。照文代四郎と共。伯ゐ。各人馬と従て。日暮て。滝田の宿所ゐ。選ゐ。次
日も未明ゐ。八犬士ゐ。連立て。大山寺ゐ。赴くゐ。代四郎を伴ず。奴隷ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。俱せ。先伏姫の祠堂ゐ詣く。
各香奠と。献ゐ。更ゐ。不勤と。拜ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。て。富山ゐ。ち登。て。伏姫の墳墓ゐ詣ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

姫上の菩提の與ふ讀經してあふ在り七日断食の修行を果して寺を還んぬる要路の折ふし飢へ餓へ
と経巻を文合を抗うち戴いて讀誦他戈ゑく乞えば八犬士代四郎们ハ俱ふ感激して言葉先伏姫の
墳墓を建ふ花を建ふ賻け皆跪ふ眼と閉て拝み默禱ふ丹誠を凝らし俱ふ退いて去の邊る犬馬塚カ
二尺八分墓表を此彼と問て立寄て賻の花ふ天然石の苔を拂ふ水を沃ぎて廻向ふ當時を去の草垣衣
似る山蕨延て節立ち竹の縁ハ耗る夏山蔭の蒟ふ交るつる草の花ハ開けども早晩ふ鉦鼓ふ跡
ハ深山幽谷瑰松奇品いとゞふ親る人も多く年歴り昔藤の俊成卿の歌ふまれふ来る夜も悲しき松
風を絶ず苔の下ふ見えし新古集ふ載せ心操ふひとかゞ大士们ハ廻向を果て退ぞんとつ折道郎ハ尼立
ふ徒る義烈の弟兄ふ墓碑をゝんハ遺恨の多と我必よく世と獨語さるけるの明年七月二日十條弟九の
七回忌ふ道節果て碑銘を為。その忠義を石ふ勒して永く去の山ふ貽け惟伏姫の墓碑ハ義実
主推林ふめて建るとて允しゆるぶ事情を原ふ那大功ハ功ふ造化の自然ふ本つ在てもく神ふ倣せる
ふ亦後話ハ却説道節们の七大士ハ親兵衛と代四郎を御導ぶ峯上ふ攀登り観音

堂ふ參詣ふ去の日く折ふ久さふ親兵衛と代四郎ハ遺恨ふ堪ずゆゆふ支徒と思ひ出ふ涙ふ鮮ふ慰ふ
餘の七大士ハ豫ふ彼ふ遊ぶ見れば情景ハ八年ふ那谷河の前面ふ、大法師の尚少ふ金碗大輔
なり一時房の犬と戯るんとあるその銃丸餘と姫上と害ふまつり當時の光景想像るふ痛おりふ雛
綾の秋蘭鹿射の裳深憶紅閨の裏ふ愛親れ八の住人這犬山ふ汚世と捨て身ハ只單明し暮
さ甘ひけん意愛苦さと推量る懐旧の涙眼包ふ溢れて人人嗟嘆ふ堪ざりけり然ハ今、大法師ハ七日の
断食ふ退の勤ふ那舊迹ふ身を擯ちて亡ふ菩提を吊まつれ八做ふ罪障解脱の牡命恭道心勇猛
是も亦ふ易ふ成と噂と云。日昔て瀧田の宿所ふ密ふ久の次日も八犬士ハ早早ふ倶ふ礼服ふ整
馬ふ跨ふ伴當と領て白濱ふ延命寺ふ赴ぶて義烈院の廟墓五十子方法師某の院の墳墓ふ焼香
ふ去ふ看主の老僧と對面して各香奠をまゐらせて里見家世々の祠堂ふ木主と拜ふ去の餘を
亦一日ハ洲崎明神役行者の品堂及那古の観音參詣ふ那古ハ小文五ハ祖の廟宇の地ふ在ハ懐旧殊ふ
深ふ在べ。是より後ふ八犬士左ふ右ふ暇ふ一日ハ照文の宿所ふ招れて郷食ふ日と消一日ハ代四郎ふ詣

文溪堂蔵

文庫堂蔵

待せられて祝壽の盃を薦られ又一日は照文代四郎が大吉合宿に招き聚へて答礼の酒を裾きぶに只交遊の上のことゝて官途の事猶敏く義実主に問ふ時なく大士が召とある又義成も這無き折柄稲村の城に召よせて面談あるの旨もありけり徒らに程に疾の夏過て秋涼に至る七月の十日あまりふるゝ時候有一日義実主は又大士が召させられつゝあの日は館主の渡殿の座、大法師も召れけ方僅まあり座を空え〻ば大士が何事〻ぞと思ひつゝ列りて見参に入れる両侯則同席にて小書院に在りける身邊の人、大法師と蛮崎照文と侍りて登時義実主は大士を召親着て席を賜へて宣へる今日の所要は内談るふ汝が我外孫尚同が宿因あれば意表を隠さず生るゝ、大師も俱に聞ねかし徒らに言問ふ似ふ私も抑這命寺の親しける金碗八郎孝吉は當家創業の功臣なる故主の與ふ禄を辞して剰自殺をさるゝに切てとる子大輔孝徳ふ〻ら〻、大を〻〻へて東條の城を奪へ我女婿ふせまく思ひ赤大輔も亦事あらば一旦の失るゝ〻ふる罪と醸しつゝ饒ふ據のゆゑれば首ふ代て頭髪を斬て願ひ奉歎行脚の世門ふ做あり以来二十餘年の修行積りて佛意あり稱けん既ふ両様事の大功あり便是昔の罪を償ふ足るのみ然れども堅固出家なれば今ゆゑふ遠俗と薦るそのふゝ兼引るべきなるゆゑ但あの親子三世の忠臣反て後るゝ〻んの佛の教ふ稱ふとゝも陰德あて陽報るゝ先祖の與ふ不孝なるゝと世の人も亦遂恨ふ思ん因て一向安房殿と商量をる義あれば今白地ふ問試ん汝が各所生の三親あるのゝ俱ふ宿因を推ふ知へ伏姫は是宿世の母なるとて、大師を現世の父と倡るとも以ふ知へ汝〻ら然ばて汝が皆大師を氏ふ做せるゝ又是自然の妙契なれば今ゆゝ他姓と冒さるゝ但今の氏は私稱ふ古の姓と氏ふ同ふ〻ふ〻は姓を改め氏を更んと欲ふ者必天子ふ奏〻まりて勅免あるふあるべれば行ふとゝるる者也然ば今俗ふ氏といふは実の氏ふあらずして家號なれば廣字と云氏は則源平藤橘菅原清原の類ふて姓は朝臣真人連宿禰の族即是ゝ辟京里見は廟字也源朝臣は姓氏ゝ今俗人の名と問ふ家名実名什麼と云ふ家名家號廣字のゆゑ実名は名乗ゝ汝が氏は源平藤橘その他ゆゑ問ふ〻を今改めて金碗と為て俱ふ氏ふ做せるゝ大塚信乃金碗戌孝と云稱せべれ今ゆゝ後ゝ金碗氏今ゆゝ八個の義子と為て子孫ふ異ゝ〻べ遮其陪臣ふて氏を更ふ天子へ

願ひまつり者例あるごとくもあるんを皆義実が孫にて室町殿足利義尚に請禀さば必奏聞せらるべきの
義洲們同意なるべく京師へ使をまゐらせ甚麻呂と同じく大士們へ阿とがるに答難く沈吟せるに今
俗は皆庙字を稱る姓氏は要るに似たれども族を別ち尊卑を知るに氏と姓に為くるに分て改るは
大事の議目今四方好逑を目今決断せずもあるべきに
詞委き極流を道節一個膝を找めて隨即答禀せるに御諚義りぬ臣等八人宿因に儘して
舊姓を改めて金碗氏を冒さん我恐れるに理義分明誰か推辭せるべき勿論臣等は所生の父母あり
本来の姓氏を忘れねど伏姫上人宿世の母なりて那神霊年来臣等が窮阨を救せぬ
ひ神恩頭然として疑べきに然バ子孫に擬せられまゐる御教諭感佩仕るに且臣等
ぶ各感得せる霊王の出る処と世に同因果の義兄弟八名あるべきを悟て意に全く集て當今無類の
賢君に仕るとて沿ゆ則是大師の二十餘年行脚の功徳指南あるによって有信れば是大師の
恵恩なり行世の父母指南の德義は師表に同じ宿世の父現世の師表一身二務の因に儘して義父と

仰ぎ師父と稱え金碗氏を冒せとある御諚は至極の道理なりと思ひまゐらせ京師へ使を遣さるく
べく計ひて願くは禀を人も待る誘言に似れども異體にて心同じ道節即是兼仕れば自餘七
個の義兄弟も同意勿論に応と応て左右と左へ信乃毛野荘大角現八小文吾も親兵衛も今
道節が即座の論議に感激せられて仔細に及ぶ皆共倶に額衝を兼て同意のよし禀に義実答笑
點頭ありて安房殿他們に領義を誰と使に遣べきと同せべき義成主然ばその使節は太事なり
大士們の内中一両名と遣るべきと答べき義実主は然也々と領して又大士們に向て然ば今番
室西殿なる正使は汝們の内中一人なるべし誰か京師へ赴てその使とせんと問く詞も果ぬ
程犬江親兵衛突然と找に出額を衝て喙黄なる小猴子が年も才智も勝り身に我兄弟をも超て
願ひ禀を爲辯るべれどその御使を小臣に仰付させたまへかし自餘七個の大氏們年来諸國を遊歴ありて
地理に細なるに比べば小臣は年四才の秋より富山の洞崖に成長せしその春より人間に出ることなく
まだ富國安房の地理ばかりを知ざる所あり然るに今幸に皇城の地を踏るべ見聞に就て後学

エラヌくひつむいて饒させあかと思ひ入て請禀せば義実主笑ひけふ義成主を召入て安房殿に忠ひな
ふ親兵衛の智勇捷れて身材も亦大人備れど童顔いまだ耗せず且額髪ある者なれば室町殿へ
使者都のみ態ふ熟ぶるもさる処なるべし他を遣しめんと仰ふ義成主異議もなくその美しく然るべ
副使ふ十二郎を召ふ他の四方ふ使しを支ふ熟官なるべきその性謹慎と旨とをれば常失寡紀者と
因て親兵衛の願ひの隨意這回の使を課せば十二郎もその意を汲て倶ふ京師ふ赴て小心して親兵衛が
幇助ふなれと宣へ親兵衛が欽ひ仰ぎ畏こまり照文忻然と席を避て八犬士の上へも微臣屡ふ使を奉り
ひひふ今番倘漏されるべ送憾のふひとむふ御諚へ一期の面目ふひと禀せそ餘の七犬士へ大事共使の
撰ふ本意なく漏さしかど尚童年なる親兵衛ふ超られまじ爭ひを為ふ皆云云と欽ひと禀せども、大
法師へ始より思ふ通色を変ざる像く默然なる却上なるいるどくその一回も平和のふ出ざる啓佳
境ふ入なくなる話説なるヨヌれども楮數言ふ涯りあれば卷を更て亦下回ふ解分ると聽ねかし。

南總里見八犬傳第九輯卷之二十一終

東都　曲亭主人編次

第百三十回

金碗後無一く更ふ後あり
姥雪望を失て反く望を遂ぐ

登時義実主へ大法師なる向て和尚具ふ吟ぶ我這八箇の犬氏とて金碗氏の後として
和僧の義子ふ做さんと與ふ親兵衛と十二郎を則京師へ遣て室町殿ふ告禀一朝廷の勅免を
請まるそ他ども姓氏を改んと欲も左便宜の折られば和僧も倶ふ上洛して功課を奏して請な
らば紫衣最上の僧官なるべ又ふやまるべ。その財用へ我安房殿ふ請て宜く計べ同意な
らば仔細ふ及ぶ逆旅の准備とそせん甚麼ぞと問へば、大へ遽く席を避て徐ふ啓禀
せる最有々なれまで赤ふ御諚でいへども不肖の臣僧刑餘の身をもて非如寸功あれば八犬具
足の諸大士の姓を改め氏を更め金碗氏と冒させへ隋王をもく糞土ふ埋め蜀錦をもく敗

文溪堂藏

衣の裏ふ做ふひとしふいひむ。恁稟さが恩命を否ぎふ似て不敬ふ辜と免れざいひ。彼佛の教へ
塵世ゝ脱れて後ゝを本意と言あ。言あ。ども臣僧少ゝ時幸ふ必死の罪と宥られ
遂ふ佛門ふ入り。ゝ。只報恩の為ふ。現世ゝ則御武運長久来世ゝ先霊正覚の念ゝ日夜間断
なく身を雲水ふ儘ゝ。たゝ二十餘年抖擻行脚の宿望ゝ成就して罪障恩赦の召ふ応じて
故郷ゝ返ることゝ。ゝ。望足ぬふ猶寸功と賞せられて御香華院の寺職ふ預り。国内ゝその道俗ふ
尊信せられゝ。ゝ。反て本意ふ。ゝ。然ゝ。ゝ。ゝ。京師ふ詣て官職を請ゝ。ゝ。ゝ。

八士と和僧の乾児ゐせで金碗氏と冒させ給ひ皆孝吉の名迹也。和僧の上ゐ干渉らぎ這議穏
るべ況欲壁ゐ那結城る浄西父子の忠孝るも幸あ成て出家をれば子孫永く断絶せそも亦
天命るりとも誰らと惜く思ざるんや上ゐ方の義と思召せども那身ゐ他領の法師也且影西僧
正ゐ倣登りる果報あれば一世ゐくゐ福場ん天道盈るを缺の義也花美ゐ樹ゐ実るゐ如し和僧ゐ
他と同ドる也八犬氏ゐ宿因ゐるとして先父八郎の名迹ゐきるとゐ和僧の與ゐ親族るぎ
とゐざるとを汲ざるべし又今番犬江親兵衛仁を京師へ使ゐ遣しゐ姓氏の一義のを知る
ど安房上總ゐ東南の一隅也三方都て大洋ゐれば嚢ゐ一箇の口ある像く囲るとゐ成るゐ易
く找を遠く攻るゐ難るゐの故ゐ関東諸国の風俗虚実を知るゐ由ゐ況京師ゐ応仁以来室町
家ゐ武威衰て昔ゐ似ざるゐと人の噂ゐ笑るを今の光景ゐ甚るを親しく覩るゐあ成ば
誰ら具ゐ是を知るゐ然ば今番親兵衛を京師へ使ゐ遣ゐあゐ那地の虚実を目撃せべく且
年来の工山ゐ朝廷の御料大々るを綱之ゐ安ゐれゐ陽ゐ則犬士仁の氏を金碗ゐ倣ゐ欲

奏請の一義ゐ陸ゐ件の西椿事と弁させゐ御内意るゐ和僧ゐいま悟ゐ只その所
ゐ所ゐ論ゐ為ゐ人ゐ此ゐ人ゐれも四下ゐ忌ゐ人ゐれば明ゐ地ゐ告ゐ釋迦法
語ゐ似ざるゐ鉄鳥海と笑ゐ先ゐ為ゐ人ゐ悔ゐ示しゐべ、大法師ゐ感涙の栽ゐと覺ゐ且恥ゐ忠
難くゐ程側聞ゐ八犬士照文ゐ亦両館ゐ慈愛忠信並て世ゐ沿易ゐ兵侶ゐ感ゐ愚ゐ
るゐ当下、大ゐ謹て義成王ゐ稟ゐ短才浅智ゐ測ゐ賢慮ゐ吾ゐ云云と論ゐ
つゐ不敬ゐ罪萬死ゐ当ゐ嘗ゐ外ゐ恩命ゐ感服ゐ四臣僧恩ゐ僧家ゐ祇
律ゐ違ゐと敢ゐ況火宅ゐ脱れ身ゐ義父ゐ捨られゐ恥ゐ涯ゐ義ゐ父ゐ又趣ゐ
易ゐ為ゐ八犬士ゐ孝吉ゐ名迹ゐ金碗氏と冒ゐ世ゐ再度ゐ仰ゐ御慈愛ゐ枯骨ゐ及ゐ
る是何ゐの造化ゐ眞加餐ゐ為ゐ天ゐ感涙ゐ外ゐ無ゐ然ゐ金碗氏ゐ者一人ゐ足ゐ八士
八士都て同様ゐ為ゐ亦御深意ゐ為ゐ凡智ゐ精しゐ別亦室町殿ゐ使ゐ御内意ゐ
実ゐ為ゐ駑馬ゐ計ゐ為ゐ然ゐ賢態ゐ而非直言ゐ畏ゐ耶ゐ身ゐ措ゐ

處を以失敬の罪と饒させんと勸解て言葉と柔ちーゝべ義成主の恐びいやと義実屋黙頭なれ
安房殿微妙くも計ひ給ふ公ゝ延命寺の願ひの隨意八士の氏を冒ものゝ義父義子の議ハ固く
べ一諸大氏も俱ふ皆れ我ら海仙きて金碗氏と冒させく欲きよりハ惟創業の功臣なる八郎孝吉
與のゝ子ゝ抑當國二郡の舊主神餘長挾次光弘ハ質弱暗愚の本性なる狡逆臣定包ふ滅
せられて耶家断絶きりーふ吉ふ宗と光弘の落胤と伝ふ吉ふ宗と光弘の落胤と伝ふ吉ふ宗と光弘世ハ嗣子あ定て
病ふれ生涯妻妾ふ子ふべ一の故ふ大師ふ宿因ふ八大士と金碗氏ふ倣ふ弘世ハ嗣子あ定て
一世ふて終るとも光弘の名迹ハ當國ふ送るべ一是孝吉の素懐ふ絶ふ継ふ廢れふと欲ふ
欲一ふ義実ふ本意ふ开ふ詳ふ解ふ狡神餘金碗ハ同宗ふ神餘ハ則和名釣安房國安房
郡の郷名の條下ふ詳ふ加無乃安萬里と訓ふ有ふ佞ふ神餘ハ當初かのあまりと唱へふ後
世ふ略稱一後又字音の便利ふ儘ふて改ふ然ハ金碗ハ神餘ふて又金鞠ふ
作ふ和餘の假字ふれハ同宗ふ知ふ只れふその名迹と一人ふて八士ふ都て課ふ皆

是同因同果ふ誰ふ一人抜出ふ課ふ瑕ふ疵ふ心地ふ
とふ昔ふ本ふ思ふ因果ふ當ふ有佞ふ天命ふと知ふ何ふ八ふ同意ふ
道節ハ自餘ふ大ふ異口同様ふ皆答禀ふ既ふ禀ふ十ふ臣ふ各所生ふ父母ふ縁
将軍大諸侯ふ徴ふ名利ふ與ふ他姓ふ自ふ他一人ふ蝋蛉ふ倣ふ大師ふ宿
世ふ恨ふ悟ふ義子ふ義ふ敵ふ兄ふ義ふ能ふ姓氏ふ何ふ異議ふ
左ふ右ふ命ふ隨意ふ言葉ふ義実ふ主ふ
情願障ふ内談ふ稍整ふ和僧ふ何ふ僧官ふ好ふ延命寺ふ住職ふ
辭ふ一切ふ食ふ釋氏ふ教ふ食ふ名利ふ衢ふ遠離ふ勉
和漢中華ふ僧官ふ置格式ふ定寺領坊料許ふ寄ふ徒ふ慾心ふ肥
魔障ふ迷ふ法師ふ名利ふ取ふ殿滅ふ教ふ守ふ者ふ僧愚ふ徒ふ富
貴栄達ふ羨ふ迎ふ富山ふ洞窟ふ潜ふ伏姫上ふ菩提ふ吊ふ思ふ事ふ

比隱りなく犬士們氏四郎と知られぬ発尋ねなべて疑ひを解せらるゝ上京まで犬士們ろ世
當夏五月某の日富山なる姫上の墳墓詣り折、大法師が七八日斎食讀經昼夜の勤行箇
様々ホ以ておとの崖墓と報恩共義実主駿嘆ぶ現違主の忠誠ろ鄭ホ神佛鮮
厄の冥助あり一も以ておろ然ばそ今亟ホ退院ハ饒かろ氏の甚麻ろく相譚ら以べ義成主
泥吟ど仰のどく三稔以来微難々ろ名僧ろれば、大法師ホ代ろば知識ホてくも覚ゆぞ然り
も寺主禪ろべ氏後住ありていろくやと向れて、大意を安ろ不ろその義ハ聊も心當ゆぞ那結城ろ
影西ハその心術忠孝ホ當家ホ舊縁ゆハ後住ホ成ぎまく思へども他師家の徴ホ応ど權僧
正の頭職ろ愛惜せば成ぎ安ろ縱招せ奉ども必辭して参らぬ那影西ど除くの外ホ一
人いへども年二十ホ満ぬ足ざれば只今ハ借ろくあり此是別人ろ臣僧甲斐の石禾ろ指月院ホ在
時念成と呼ぶ件の寺の小僧ハ他ハ料ら淡雪奈四郎と婦名曳ハ奸計の密談を御
聞ろ濱田氏の御危難ろ忠告仕り者ろれば當家ホ功ろ多ゆ只造椿事のとろ

一を守て三ろと知るよ女オろれども偽らぬ且心術老実ろ然ハ董酒魚肉を嫌ホと勉ろ
然の性でハいろく教ろば善智識ホろべくやいろ氏ろ
件の念成を徴めりしホ現住ハ惜氣もあれば那身ハ特ホ教ひて脚力と俱ホ参りぬ学寮ホ在ろゆく
ろく教育仕り奴今ろ十稔ど苦学ろ塩ハ法燈と紹ぐホ足ろぬ欲その素生と原れひし故郷ハ上
總国望陀郡犬成村市原郡ホ市原郡ホ同名の村あり。の浮浪人某甲の獨子ろ二親ろ早世ろ去りて孤児ホろ成ぬるホ
親族ホ一ざれば由縁ホ就て甲斐ホ赴ろ年七の時より欲指月院の前住の弟子ホ成れ者ホ七ハその天
成と云念成ろ名詮ホ以ておげ中ろ原是御領の民の子ろれば延命寺の第二世ホ相応一やいろむと一五一十と
報恩ホ生と両候つくうち听て奇也々々と稱ろ人ハ側聞ろ信乃道節照文ホ相識ろ件の小僧念成の
素生と始て解ホ成ぎ俱ホ奇縁と感ぜ登時又義実主ハ大法師ホ真安ろ学ぶ成ぎ念成ろ
畢竟和僧の法燈ろ絶ぐろ舊縁ホ然ども他尚少年ホ成ハ今ろ十年許退院の望ホ断れ勿
論暇ホ入折富山幾昔龍ろも開ろ我知ろ成ホ和僧の望ホ儘て義父義子の說龍れば

東京帝国大学附属図書館蔵

和僧も亦我望の儘に今より住職十箇年の勤めを果しねかと仰ぎ、大い額に汗して最も惶恐御懇命然まで厚く御教諭まで恃りなきうへと勧解て義伏をこゝらに義成主も歎びて憑く思ひ

ひけり權且て、大法師は犬士の身邊に膝を枝めて君命よう金碗氏と冒さる歎びと云云と舒べ。犬士們これをうち聞て嚮ふ道節を主とし大徳の嘱の親今生の師表なる義子ぞと心饒されば師父とて稱いるまの子を義容めかとふ、大い歎びて否和殿達は我在俗の日の親族とて思へばれ師父といる稱過ぎて迭の辭讓美く言ふ真俗一家の約束俱に拙言を做まかば義実主い〳〵怡悦に堪ず我退隠の始ろ政事は安房殿に任して助言せざれども犬氏の上いも我外孫の思ひれば有繋に心許なくて此の席に列りぬ親兵衛十二郎們を京師へ遣す件の使の一椿事異日必稲村の家老母と詮議の上吟味ひらまぞあるべし今日は内談のみ皆の貞ひるか。

とひと丁寧に云ひ終て躯を賜ひ、大並に八犬士は俱に歎びを禀しく宿所に退る義成主も稲村の城へ退り、ひけりその日は潛幻のうちに伴當常のごとく騎馬ぞ出たまひ路近く

れば日も消しぬ。その夜は歸城のう。次の日龍田殿へ参えけり。是より五七日を經て大江親兵衛仁と蜜崎十郎照文を稲村の城へ召よせ。両家老辰相清澄正廳に列坐て今番件の両人を使して京師へ遣さる。上日を待達を當下辰相ぞ云ふ件の一義は龍田殿の御内意に儘せ。これ犬氏の母の氏を齊一改めて皆金碗に做まぶ。と室町殿へ請せるべ朝廷並に花営に奉献のあ金〻を齎く遣る今や戰國割据の諸侯各新に関を構えて約略不便の生ぞ。恐れは水略を浪花に到らば輒く京師へ達べ。遊莫伴當ぞ〻〻ば人の疑ひあんぞ。む東西を持る夫役とぞ。五六十名に涯るべ。近曾は緑林錦帆動れば白晝旅客を脅て盤纏を奪略るとの風聲あり。進退俱に小心をぞ〻〻武勇を負ぐ〻ば但親兵衛は身材既に大人備て智力萬夫に捷れど。その生年は九歳なるに侍る大事の使に相応しく〻ぞとの君もあ〻ん狡れども請に依らぞ。

とも老侯の御意なれば館も憑く思召さる京師へ参て管領家に倘その年才を問れば一倍まで十八歳とまうさるとうれは是も亦人の疑ひを避る一術なれば十二郎は故に親兵衛と相

副けて俱に愆なる釀しを逆旅の准備に言と涯りとまを発船と致せ〜と叮嚀に云渡さる徒て而あの日親兵衛と照文に義成主見参して上都の執びと稟しまを黄金並に時服と賜りて且両茶の礼を行るその後左右と退けて義成みづから仰せあの旨あり親兵衛いろ〳〵果て照文と共伴にその宵瀧田の宿所退りて七個の義兄弟妙真代四郎音音們に件のよし告知るに代四郎望を失ひて大江和子のみならず富山以来を折に小可も亦仰と受て必従ひ〜に今番進ぜ京師へそ充使に達られぬその伴當に小可を漏されい甚麼る故で諸君あの義を守えもぶ望と遂まのびねと親兵衛に請ひ道節們に告て行まく欲れども道節敢諾るを開い亦要る願ひ大江に則正使蛯崎にその副そ事足るのと和主に遣されて何に世ん且這回のみ使を老侯の御意より出て擇せまり二人まあれい我們とも私情と陳て相争べくもあで況和主を思ひる比良る時に退そ老と頤へとそ仰を美しまふあ〜然る老人に相応しかぬ名聞を好むに依て願ひも誰り執按ぐ枉て思ひ住まねと諭せば親兵衛自餘の天士も共伴に諫は

ぬ阿叟の情願ひ〜るを行あねど倘是餘日あるを〜ば願ひ事も便宜と為て然る緩安る暇る既に後日と定められる用船と今ちら爭何に世と這回も且大山の意見に就くてそとりあれと言語窃に一慰れば代四郎答ぞ眼と睜りそ老るおろ〳〵ぶるも多く朽惜ぶ〜を一齢い既に七旬に遠くもあで做りかと筋力奔走甲有れ乙まれ後生達に劣んぬ開と安閑と日を弥れば反て病者に多ぶに使せあ〜ぬて本意を〜ねとうち嗟けども術もるに大家笑ひに紛らと更に別話に及びけり。然ば姥雪代四郎に當晩宿所に還りても心連りに焦燥て寐られ必隨に思ふ我に原是微賤の足夫大山主の舊僕多に過分くも両館のあん執立に遇まりて侍品に数まられ優に宅に春と養ひるが〜只徒に坐して喫ふく這回の御用に達ぬもあ〜ば戸位素飡とそ人にられぬ蛯崎主に直塚紀二六と心利る伴若當黒あり大江主に然る伴當る〜守の仰にあるぞも我那和子の伴侍に做りて京師に赴て萬に一ッ事ある折に一臂の帮助に做りもせば伏姫神の神慮にも稱そ我本来の志と致ぶれ大山主の隊に隷て軍陣に忠を盡も大江和子の伴に

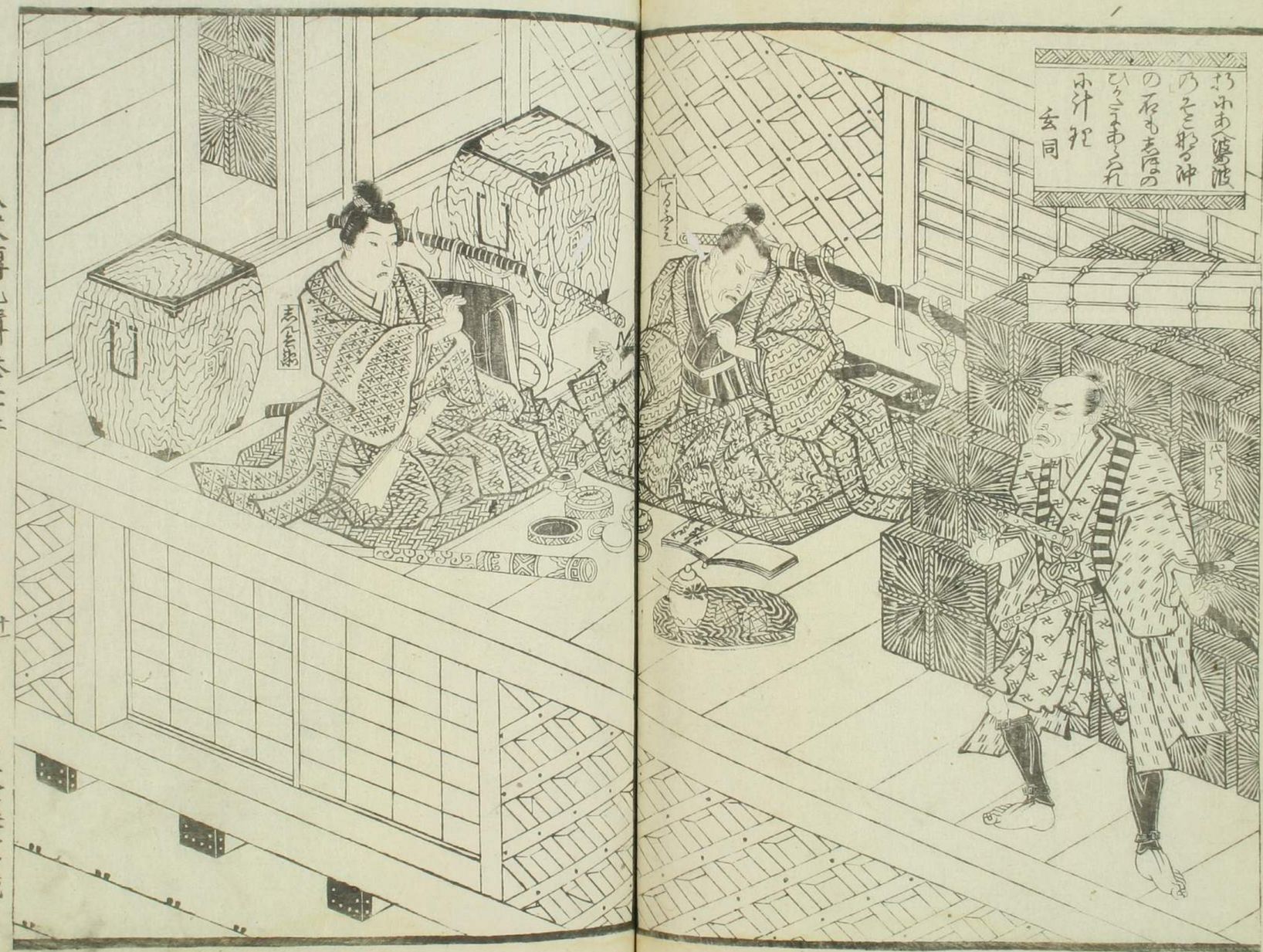
達て他郷ゝ憂を分えも皆是館の友與ゝ老邁る身を殺さむ。存命て世卒とそ後の便宜をもゝ為せ術あり。と肚裏ゝ主意竟ゝ決りけれゝ親兵衛們ゝ開船の朝時分を揣り先たちて音音曳る單節們ゝ犬江蜑崎の起行を馬頭上ゝ送ると偽り身装ゝ宿所を出て走て港口ゝ赴く。尚黎明の時候ゝて開船ゝ今日已牌と嘗工們ゝ豫定めゝ親兵衛照文們ゝ今ゝ来ゝ登時代四郎ゝ汀渚ゝ立つ遽ゝく艇公を喚出て我ゝ犬江主ゝ伴當と所要あて云て走ゝ疾その船ゝ乗せよとゝ艇公隨即ゝ艨艟を架渡ゝ卒とそ艇て載けり。ゝ是囮主の軍用ゝ二百石の巨舫ゝ主倉前倉艢後ゝ。梔杆梔縛の堅固ゝ柁錨楫艪の類大逢小逢百丈ゝど一切備らゝとゝ者ゝ。ゝ堂ゝ艇公一名柁師一名嘗工十餘名。艤ゝく這里ゝ在り左右ゝ程ゝ稻村の城よりて犬江蜑崎ゝ伴の賊兵十名許宰領の雜色們と俱ゝ苞裹の長韓櫃幾杆狹夫役ゝ舁港口ゝ来て溪鼠を喚く件の船個行檐物を載けゝ。ゝ事の紛れゝ代四郎ゝ。ゝ舫荷の隙ゝ躲れて息を篭ゝて在りゝ賊兵宰領們ゝ是を知ゝ舫ゝ赤うち忘れて去れも紛せ賊兵們ゝ。ゝ人ゝ告げけり。介程ゝ犬江親兵衛ゝ京師ゝ發船の前日ゝ延寿崎照文と共伯ゝ義実ゝ見参ゝて身の暇と禀ゝ。ゝ大母妙真姥雪一家七大士們ゝ告別て今宵稻村の城ゝ赴て朝廷並ゝ室斷家ゝ。ゝ金銀方物を受今て翌朝船ゝ載すゝ去向遥けく旅ゝ。ゝれと妙真ゝ親兵衛ゝ魔滅降ゝ賊と夷げる本事ゝ心ゝ。ゝけん哀別先度の如くゝて倒ゝ慰めけり。慈而ゝ月信乃毛野道節小文吾荘介現八大角們の七大士ゝ親兵衛ゝ與ゝ置酒郷食饌て倶ゝ起行壽紀ゝ登時小文吾ゝ盃と食抗て先親兵衛ゝ薦てゝ。ゝ仁所れ今ゝも倶ゝ館ゝ仕まる明昌馬頭上ゝ赴紀柳を統れ水と沃ぐ辭別の情を畫ゝかゝる。ゝゝゝゝ戰世の悲ゝ海陸共ゝ強人多くて旅ゝく客の患ゝと做すゝ。ゝ並四船虫酒顛二媼内師六數人のゝゝゝゝ和郎今番の友使ゝ齎ゝ。ゝ金多ゝと豫ゝ御沙汰あれゝ。ゝゝく小心を宗とゝみづゝ武勇と負むゝゝ譬ゝ和郎ゝ邂逅古景行天皇ゝ時ゝ武内宿祢ゝ年十

四方で北陸及東方諸國を巡檢まで。よく民を理めたる大功ふ伯仲まさる神童なりき。
年のヨワ少ふ曾りのちで。多く城主ふ召されて上ふ侍る大事の兄使ふも。又仰付られい造化十二
分とらひつべ。夫天道い盈るを虧く。功成り名遂て身退くは。便是天の道ゑ遮莫和郎を仕
へ。よろしきまで人ーくされば。その義ふ及びくさけれども。這古語をりく心とて戰々兢々まもあ式我恐
らく事の敗れるを。とゝ沼ざるべ。兄を慎まれたし。みな。諄諄ゝ敬れ現人も亦ふ。曩ふ芦川英
山ゑ危窮の折咱們い憶ぎ犬塚犬山犬川犬田と相別れて。權且京師ふ在り。一程那里の人と
交りて。その氣質を思惟るふ。都會浮華の人心い良賤並て尊大ゑ。他郷の客を侮り。
田舍兒とのゝ嗤ひ做せども。その人素ゝ事業ふ富さる。德行の君子ふあらず。只錢を欲り。一色を好
ゝ。偽画偽書偽作せざるとなく。或い高名家の名號ふ紛ー冒して世渡の便着ふ做ゑ恥
と思ふ破落戸も間ヨリ。況応仁乱離の後道德仁義い地を拂て。銅臭先生徵錢學士。
圈套を諸作ふ。ゝ。富貴の家い薄情ゑ。義俠い友て田夫野人遊せ乞兒畢まり。

是洗滴の世ゝ情狀ゑ錢ふ成るも。者後年ふ弥増ゑ故ふ財用足られい借て返さゑ。又
貸者ゑ貪りゑ。獸ゝと知られい名利両ゑ。ゝ多く竭て他人代て家ふ入る。庶民の貪富ゑヨワく
是ゝその水上ふ沂れば足利殿世ゝ亂ーより以來。鹿苑院殿義滿。驕奢ゝ。流て普廣院殿義教ふ至
て甚ー。今東山殿義政の世ふ。ゝ。壞し。舌既ふ極り。紋い都會ふ食言ヨワく賤民美味ふ。ぐ
ゑ。啖ゝ。礼。即廉恥ゝ方絶て。欺て錢を獲ゑゝ人羨ゝ。ゝ才子と稱え。巧ふ佯て人を倒せ。
甘心ゝ。豪傑ゝ。是ゝ。賤上下の分ゑ。威力ふ者い上を尅ー錢ふ者い非ゑ。理ゝ。此い是東
山殿上一人の御ゝ。ゝ。都下ゝ良賤並て皆這悪風俗ふ做れ。ゝ。中ふ尚憑ゝ。當將軍義尚
公い。ゝ。青年ゝ。ゝ。ませども賢明ゑ。且又父東山殿の風流の驕奢ふ懲りゑ。善政ゝ。行
ゑ。恢復の御志日夜研究ふ。政長畠山政氏細川両管領ふ先世の威福ふ做ゑ。忠ゝ。
補佐なゝ。東山殿ゑ。亦思い隨ふ。ゝ。當將軍義尚ふ儘ーあ式才ふ軍旅ゑ。ゝ。惠蘭
芳ーかゝむと欲れども秋風これを破ふ似ゝ。和殿ゝの義ゝ。ゝ。那毎の欺詐豪奪。ゝ。御ゝ

危うん所云孔子が語道て和殿が萬事が神々あく伏姫神の示現を知ざるが如く素より臨
機応変の才匡しがあるべれば両館の憑りく思召さけを信道るとが賢達る意見が要るに贅言
るべう智者も千慮の一失あり愚者も一得るべうや小父公の教諭を心が占て従ふを釀りぬと示
も親兵衛うち听て小父公並が犬飼主の示教が実が千金も古の有道者が人が送るが言とのそとに
あれこの義がいひむ両教共が肝胆が銘じて忘れいと忘れいと忘るまれ信乃毛野道節荘介も大角も各餘
談も盡るも倶が盃も献酬して一霎時別を惜みけり有徒程が照文が若黨直塚紀二太をもて
親兵衛を催促て稲村へ参るべ時分宜しと報るば親兵衛が遽しく七太士が告別て給僕の内
中両三名稲村まで従ひ来よと身装うを立て却照文と共侶が稲村の城へ参りるば辰相清澄
面談して両管領政長氏へ呈書一通並が貢献の金子が禁裡御所へ一千両室町殿へ一千両東山殿
へ一千両両管領へ白銀各五百両あの餘摂家槐門諸司百寮へ金銀土宜の人情多るが徒而當
城の有司们這件々々上坐が安排へ都て目録が援合て三十箇の長韓櫃が斂めて親兵衛が

遞與りけ是が照文親兵衛と照文が餞を賜りて當廳が止宿と許さる閑船が明日巳の初刻
潮候風信共が宜しかべと船公が言ふ生ふる伴當支彼が下知せる従事の上下九十餘名の内
中親兵衛が伴當究竟の精兵十名雑色奴隷五名又照文が伴當十名長韓櫃の宰領五名
支役が六十餘名徒而あの夜が果敢く明て主僕の早飯果るば隨即貢調の長櫃横須賀が
程遠うあ件の港口拾ぎさせて親兵衛並が照文主僕も推續いて船が乗るが田舎戸賀九郎逸
時与右屋八郎景能が両家老が許へ免許を經て俱が港口まで送りけ他们が是義が親兵衛が受
たる恩義あれば其の餘が瀧田ようも稲村ようも私の旅ようを發船あれば憚りて送る者ようけ折ふ
追風ようしば船が隨即真帆揚て其の日相模灘十數里を安らが走るう伊豆の下田が歇りけ翌
程が親兵衛が夜泊の徒然と慰難て照文と申しの噺すを聞ける語次が那田税苫屋まで今朝巷
口まで送のしが甚麼ぞ蜆雪が昨日も今日も出て来ぞ他が咱们と同船て京師へ上ぼく欲せ給へ
大山も自餘の義兄弟も来るべうるぞと示詞らぞ託らぞ代四郎義が



文溪堂藏

ひと名告りけつ突然と舫荷の陰より歩りぶ親兵衛と照文い驚き呆れてあちく什麼と問ひ顔さうち目戍れ代四郎い含笑ゑゑゑゑとら傷ふ坐とと白て刀祢達然ちぶ許りあるる今番の伴達ふく欲せ情願虐くゑりーかぶ菌様々をふ計ひて今朝夙ゑゑ四船ふ乗りて駆れて佐ゑゑゑゑゑゑ後ふ守ふ守ゑゑ。ゑ外ひと蒙ゑぶ単小可ゑ上ふあゑむ決して連累ゑゑゑゑゑゑ伴ひあれと請求めて已ざまぶ親兵衛も照文も這間鎗ゑる老人の義侠ふ感ゑて只得望ふ儘せゑ代四郎扶ひ大ゑゑゑゑゑゑ是より代親兵衛ゑ伴侍と自稱して直塚紀二六同様ふ各ゑゑゑゑゑゑ主ふ仕て俱ふ徒然を慰めけり。話分両頭。ふの日瀧男城内ゑる音音曳ゑ単節们い代四郎ゑ親兵衛の開船ゑ港口ふ送るゑゑ。暁天ふ出ゑゑゑゑゑゑふ次の日ゑゑゑゑゑゑ相譚ふ妙真も亦思ひ難て俱ふ七犬士ふ告て意見を問ふ道節これを聞て原来代四郎い那情願ゑ果ゑゑゑ。親兵衛们を哄誘へて俱ふ船ふ乗て京師へ赴ゑゑゑゑゑゑ故箇様々々如此々々のゑゑけりゑゑ。衛ふ代四郎ゑ所望の一義を道節並ふ自餘ふ大ゑ様ふ披露せゑゑゑゑゑゑ代四郎宿望遂る方ゑふ計りて那船ふ乗りて親兵衛们と共伴ふ京師へ赴ゑゑゑゑと思ふ據ゑ。詳ふ鮮示して一個の奴隷ふ吩咐て件の港口へ遣して舶公許尋問せふ果ゑゑゑゑゑゑ実ゑゑゑゑゑゑ七犬士商量ゑゑく代四郎いゑゑ比両個の孫児の後見して退りて老ゑ頤へゑゑ御諚を羨ゑゑゑゑ者也非如羊年三箇月隠ゑて亭ふ上ゑゑゑゑゑゑ捨図ゑ後暗ゑ怠慢の罪免るゑゑゑゑ先老侯ふ守ゑゑゑゑて知ふ依ゑゑゑゑゑゑ隨即東峯萠三ゑゑ小水門目ふゑゑ義を告て悄地ふ旨ゑ伺ひふ義実ふゑゑゑゑゑゑ点頭ゑゑ宣ゑゑ現代四郎い富山ゑ六稔親兵衛ふ守冊ゑる恩義深ゑゑゑゑ者ゑれゑ他ゑ帮助ふゑゑく欲せ老人の一筋ゑる。義侠鯉忠然もあゑゑ。ゑれゑも許可ゑゑふ京師使の伴ふ達けん宿所ふ在ゑゑゑゑゑゑ披露せゑ違法の罪ゑ爭何ハせん好ゑゑゑゑゑゑ術あり我吩咐て遣ゑゑゑゑゑゑ稲村へ目参りて安房殿ゑ固様々々ゑゑゑゑゑゑ書ゑゑゑゑゑゑ家老毎ふゑゑゑゑゑゑ萠云七犬士们ふ悄地ふゑゑゑゑゑゑ代四郎ゑ妻も嬶婦も胸安ゑゑゑゑゑゑ秘ゑゑゑゑゑゑ悄々ゑふ仰示ゑゑゑゑゑゑ萠ゑ百ゑゑゑゑゑゑ果て

文溪堂蔵

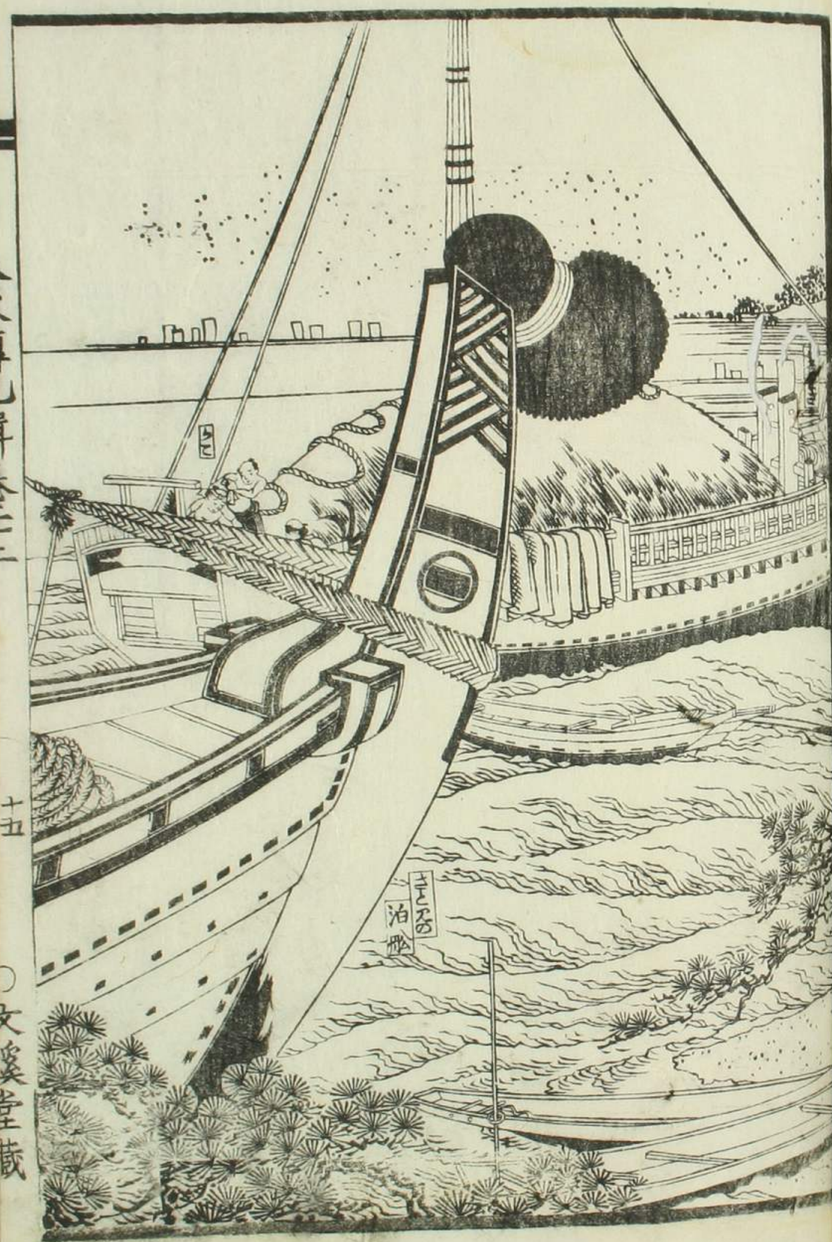
儀の如くに計ひ、代四郎は法度を犯して反て違法の出来る。義成主は代四郎が老て且健き今番も京師へ後事の加役を幾奇特と思召よ。その折そのやうあり。然は道節小文吾們信乃毛野荘介現八大角も件の内意を兼て誰も感佩せざる。大家倶に公けらく。今ふたゝび西君侯の仁慈母に勝りぬる。恩を君のために與へ事もえ折命を捨て報恩謝徳に足ざるべし。と稱そ。躰て音音們に件のうちを報知れば音音は涙を曳手車節も感涙坐に吐ぬ。倶に君所の方に向て伏拜を又伏むも終に涯りなり。當下音音は道節と小文吾們に談るやう。大江の大母御も親兵衛主が代四郎を船から乗せて京師へ伴ひ給へ。実事なれば怠慢の罪なるべやと思ひ過しに額を病ませて安きもあらず在る那御仁慈は秘事なるに大江の刀自に知るもけしからぬ。と問ふ道節はあまさへ許を勿論のことに。と許せば音音はなほ安心せと。背門の方より妙真の宿所に赴く對面して件の首尾を固様々と耳に示せば妙真も憂を轉じて喜び夢とやらん驚くまでに思ひ入る。両舘の天地ひとしく御恩と且感て且ち仰ぐ傷折も倒れ脆く老女の涙に案下再説。

程に大江親兵衛們が乗る巨船は下田の港に一夕歇りぬ。又両三日の程を遠江灘をうち過て三河の洋を走る折風両猛可く吹暴れて危かりければ篙工柁師們相罵り力を勠て両棹死て船を苛子崎に河口に船を繋ぎ住めり。時七月下旬なれば朝夕冷熱定なく遂に連霖なるに船を遣る兎便着なり。人みな旅泊の徒然に堪ぬ這里は伊勢志摩の商船の東海へ赴く折必船歇る港口なれば昔を泊船斟なるべ。とぞ。馬頭上十餘許の間あり土妓遊女を旨とせる客店あり。酒肆餅師種々の經紀兒輻湊なりけるに應仁以降諸國に蝸角蚤蜀の鬩戰間断なくて兵乱十一箇年なり。程名邑都會も荒果て狐兎の栖に成ぬ。然が這苛子崎も昔に似ず錨を宿す船多くて港口の町は迹もなく今は絶に五六箇の漁屋これあるのみ。故に日と暮て這里に風と雨と客船に倘酒を活ひ餅を買まく欲れば陸に登りて路遥なる田原奥郡に求るとなるべし。ざり。の侶は乱離の世なれば武の折苛子崎に鐵猫と宿て雲存波を乗る船とは親兵衛們を除くの外二十石許なる一艘の運艦這港口に在り。武の宕い鳥羽戸の

漁舟水際の松に繫がれて寄る波濤に揺動ぐのを眼ぶるめに雲と水音鳴る者へ松濤の外声絶て尉々たり。親兵衛们が伴當夫役へ作て高工们も俱に徒然さ堪難て非如幾回かとても奥郡に赴いて酒まれ餅まれ買ひて来て人志ある人者へ銭を出せと曰言るを親兵衛聞て其言を許さず。今わるれ順風なれば這里を発て船を出口腹を貪りて那里へ欲いなんとすれば一個も離散せべからずと詞緊く誡れば代四郎紀二六ら沿て皆高工夫役们を制めーかが大家望を失ひて但勃々と呟いけり。恁而ら次の日の亭午時候に天色ぐらく雲合て秋暑猛可に潮水を前へて大洋些の波濤ゆるければ高工柁師们皆狼狽て今育狭習豆開ぶ必追風を待べーとて檣を推建帆綱を統て開船の准備を為る程に奇像る一個の武士頭に粉銭金襴の戰笠を戴き身に緑線の麻衣蕉布の野袴穿て紅鞘の両刀を跨へ右に日銭七十を握持て野兵を四五名従へ来て馬頭上に立在て其首を歌りー船毎に是那國の經紀兒で出て仔細を訊ふ来ー。高工们呼ばりけり。看官反て訝り向に這武士は是誰ぞや。斗ら復下の回に解る。

第百十回　客船と哄して水宛鬼酒を沽る　波底に没して海龍王仁を刺んとす

却説那武士水際に立て聲高に呼り向へ泊船の内より老船公なるべー一個の漢子遽く篷を樫杭て出く舷に跪て件の武士に答る曰。何ぞの御要と問復るに件の武士に歩あぎ若们いなざ知ぞ近曽海賊這荒湊に船を寄せて便宜と張て夜叉に渡海の船あれば渡り任め殺る脅て人を屠り資財を奪ふ不良の風聲紛れなし。是より我君侯當國奥郡の一城主鄰尾判官伊近殿の仰を奉り田原片瀬大空津より山田宇津江中山苛子の諸浦と檢校して那賊船を穿鑿者也。徒に我に緝捕の頭人鄰尾殿の御内に然る兵あると知れる設良四九三郎綾丑是に若们稟まず差錯るべし先々船を展検ん兵隊に乍歴幾名ぞと問へば答て然こは撞主船公笘高師方位師共に十餘名いり舫撞に則地方の名物塩蔵の鯨肉二百鎚海鰌油三百鎚打鰒絲裙帯菜海藻もヨ



文溪堂蔵

くいとゝ問ふ四九二郎ハ水際の扁舟ふうち乗れば駅兵も都て従ふる中ふ一個ハ畳數を解
て漕ぐ件の商舟の凌遅へ寄もれ四九二郎いゑと樹け貯て乗移りて従へ駅兵三四名ふ下
知して舫擔を展検るふたのふよりふ喝合ゝ疑べくもあらぬ大堅検しそ点頭ゐ好
好若們い障るゝ一銭まれ隨意船を出せと言ふゝ又故の扁舟ふうち乗り杆を操して更ふ
又大江親兵衛ゞ船の舳前ふ漕着さて若們ハ作麼那里の船ぞと問べ紀二六ゝ応て舳
頭ふ立出うち向ひて是ハ安房の稲村より浪花へ赴く武家の船ぞ殊ゝ急ぐゆゑぞと報るを四
九二郎ゆあへて安房の稲村といふハ原来里見の家臣ゝ非除誰殿の船ぞもあれ水路
ゝも他領を犯して逆ひ浪花へ赴ゝ其地々々の城主地頭へ豫ゝ通達して路を借ま
べき該ゝふその弐ゝハ臨機ゝ私の問答ゝ王君並ふ咱們ゞ姓名所役の弐ハ分れを
ゝ這船中の人數舫擔ゝ寡東西伐検て案内をせよと権威を示して高ゝる聲
苛めく鐵猫の綱ふ推ゝて船ふ乗移れ駅兵ゝ続て船廳へ綱へんとせ一程代四郎ゝ立

出て制しも止ふ若冒ゝ役義を岌ふ理不盡ゝ言果べくもあらぬ親兵衛と照文ハ只得
駅兵を従へ出て俱ふ後倉ふ在ゝ登時照文ハ四九二郎ゝうち向ひて人々且鎮りゝ酒家ハ
安房の里見の家臣蜑崎十郎照文と唱ゝ做ま者でハ今番所要の弐ゝりて浪華へ赴く渡
海の船風雨ふ縁て這港ふ權且鐵猫児を宿ゝ一ゝ疑ゝ弐者ふあらぬと名告ゝと聞ぞ
四九二郎ハ眼を瞪ゝ一聲苛立て非如里見の家臣でも戰國割据の世ふ生れて逆旅ふ常例
ゝ知ぞや前ふも云ふ通ゝ為ゝ公潘の陪臣封疆を踰て遠く他郷へ赴ゝ其地々々ゝ領主ふ告て
路を借ゝ弐該ゝふその弐ゝハ臨機ゝ世ふ舟をもく住処ふ在て不良の生活をもゝ者昔の純
友のごゝ海賊絹捕の君命を禀て點検せぞもあらぬ我ゞ多罰の罪免れくゝり今番商ふ行
裏を皆啓ゝ虚実を知ゝ其里退ぞゝ皇命ふ刀の反打ち十ゝ抗て誘ゝ親兵衛冷笑ひて
出て四九二郎ゝ打向ひて噫咻や和主ハ誰と問せも果ぞ緊ふ疾視て原来這奴ハ寐惚ゝ郷ふ
具ふ名告ゝ我ハ當國渥美郡領郡尾判官伊近主の兵頭設良四九二郎緩丑ゝ名ゝ

文政堂蔵

忘れ欲龍輩児多狡猾病者ふわくぎとも乳臭毛耗ざる小猴子い敵るふ足らを退治れと敦圍
況暴く罵れども親兵衛謙ぐ顔色ろく意物ゝ表自眉廣言和主も武家ふ仕へ武士の
作法い知らゝん今や割据の世ゝも懸驛山川海濱皆官道ゑれば約莫舟車の通ふ処往
て何人の為れぞとの里ゝ人やあれども諸侯ゝる者遠邑他郷ゑ怨敵ゐて攻撃るまく欲る時あ
間ゝる國主ふ告て略ゝ借てその軍兵を遣まい先例ゐり是戰國の作法ゝ咱们ハ然ゝ類ふあらを今
船中ふ在る人の數ゝ僕都て九十許名ふ也ゝ大半ハ篙工柁師と行擔ふ隷ゝる夫役ゝ僅ふ二
領の甲冑と二條の鎗ゝそあれゝ以前鐵砲の長兵神器ゝ一箇ゝ載ざれば非如陸路と走るとゝ人の
疑ひあるべゝ況渡海の船ふ七四五日鐵猫を泊ゝ少ゝ多ゝ船擔ゝ餌啓ゝとのるゝ和
主ハ咱们を誰と思ふ安房の里見ふ名もある八犬士の隨一人大江親兵衛仁を知て少年ゝとゝ侮
ゝく理不盡の義ふ及れば改ふふゝん本事ゝとゝと韜竹復ゝの勢ハ猛く臂近ゝる巨鯨ゝを
被ゝ面ゝを横ゝ肩ゝ高く振抗れば驚慌る四九二郎隊の兵毎も共侶ふ憶ふ撲地と跪て

戰れるゝを抗ふ式ふ拝ゝ叫ぶゝ親兵衛呵ゝとゝ笑ひて鐵猫ゝ側ふ倚て
登時設良四九二郎ハ拷下ゝ胸を稍鎮ゝ恭く親兵衛ふ向ハ額ゝ衝て人ハ
鬼神不測の君ゝヨヲ力抜拔均五郎もゝ及ん知ゝ及れ入て以ゝ富ふ目今仰の趣理の當然ふ以ゝ多ゝ何
せん在下ハ這津ゝ海賊ゝ穿鑿ゝ糾ゝ職役ゝる這船ふ何ゝ為ゝん知ゝと禀ゝ事ゝ問ゝ罪ゝ
べゝ願ハ上陸做ゝ奥郡ゝ寡君の城光臨ゝ恁ゝ告ゝ在下ゝ職役ゝ
ゝ問ゝ證据ゝ速ゝ各位ゝ後安く逗留思ゝ隨ゝ是武士の情ゝ海客ゝ
ゝ口説ゝ後方ゝ跪坐隊兵ゝ親兵衛熟ゝ聞ゝ照
文ゝ見ゝ蛮崎主ゝ那誠ゝ思ゝ請ゝ影護ゝ怯ゝ思ゝ洒家
ゝ談ゝ正使ゝ一霎時ゝ船ゝ離ゝ和殿ハ姥雪共侶ふ夥兵伴當ゝ従ゝ這
人ゝ安内ゝ件の城赴ゝ箇様ゝふ生ゝ倒ふ後安ゝ照文點頭ゝ義ハ
愚意ゝ相同ゝ左ゝ右ゝ追風ゝ消ゝ這処ふ幾ゝ恁ゝ在ゝ非如二重

三里まで歩行び反て保養ふるひらく趣理を人あるを知て亦恐とまれべ代四郎も一議及ぶ諾
色して身装ゝて出んとせ當下親兵衛又ふ時冥宜ふ時宜ふも主客の勢に同トくぞ神龍
霊亀の自在ふも漫ふ水を離れば蛾蝦の為ふ苦やる兄今の世の人心笑の裏ふ刃を藏ふ非常の
備ふ闌ふ後悔其首ふ達ふ雑色夫役ふ物て異変我い我ふ伴當と俱ふ船を備ふべ悄
語ふ照文答て曰ふ故ふ有れども勢ハ反て疑れん卒ふ代四郎ふ首を注ふ共伯ふ
四九二郎ふ向て所望ふ儘ゝ我們主僕領主の御館へまゐべ案内を憑ふとられて
四九二郎怡悦ふ堪ぶ然ふ伴仕ふ人ふ勢ふ期を推て躱て扁舟ふ乗移れば従ふ隊
兵四五名の中ふ両個ハ杆を操て漸く水際ふ返けふ程ふ這方の笠高工们ハ溪鼠の畏縛を
解緩ふ其ふ艇板を那這架渡ふ照文と代四郎ハ紀二大以下の伴當と夥兵十名を
従て船ふ出て艇板を踏て濱邊ふ赴く程ふ宰領夫役笠高工们ハ皆徒然ふ堪ぶれ差
指揮ふ照文の後ふ跟て出てゆと親兵衛ハ喚ふ制ふ照文们ハ去向の

安危を心許ふ思べ既ゝと船ふ在ふ者殘ふ寡く為ふ時親兵衛ハ聲を被て若们然
ふ自由ふ今ハ程ふ感這船ふ捨てゆと我ハ伴ふ漫ふ泛ぶ
宰領夫役船公笠高工出後れる者二十餘名ふ一言ふ枷ふ嚙ふ出ふ程ふ
時移て未の刻過ゝ浦風惜て横日東ふ秋の暑熱の毋瀬ふ推禁られ笠高工夫役ハ銷
難ふ今日只人を恨ふ身を不娛て待間ハ久方ふ書疲の枕徒ふ起て坐て挽捨山の月ふ
ふ慰ふ中倉の方指て親兵衛ハ悄地ふ識ふ折ふ忽然と一
葉の扁舟ふ漕浮て浦邊ふ来ふ人ふ見ふ這苛ふ泊船ふ釣
蜑家舟ふ買茶醴濁酒を好ふ儘ゝ賣ふ開ふ船梢ふ件々ふ寫着ふ短禁ふ
是則招牌ふ纜を操て東西ふ賣ふ両個の漢子船ふ在ふ姉立ふ高く喚ふ御存
知の下頭酒屋上五郎ふ恥覚ふ盧空達茶助飲ふ閑ふ一夜醸ふ大白醴却又
上頭の客人ふ須師の茶蕨菲漉酒御餚ふ章魚の脚皐刺蛤もいぞ召れぞ召れと詩復

去て這方の船ハ漕近く狭ら名程ハ笠高工夫役ハ欺び一向の長森ハ東西喜ぶ船ハ夢ぶも
アキラ　ハ今日偶然の日和ハ吁好東西の来つる沙飯ハ醴上頻ハ濁酒ハ
ハ多ハで良し勢ハ猛る乞ハ中ハ西二個の笠高工夫役も愛ハ鳴ハ連ハ件の船ハ召ハ親
兵衛ハ忠て遽く後倉ハ出て衆人を制ハ若ハ若ハ四国九州の港口ハ海
賊ハ毒茸ハ泊船ハ旅客ハ酔倒て金銀船掠ハ人渡ハ天雪暑ハ風聲ハ
去ハ狭最不覚ハ鳥滸ハ叱れハ高工ハ跪て仰ハ石ハ不良ハ毎
浪華津ハ這方ハ泊船ハ徒然ハ人ハ我ハ堪ハ折ハ僅ハ
一碗ハ酒ハ沽て喫ハ各身銭ハ費ハ刀祢ハ最憚ハ波ハ
我ハ知ハ図ハ解ハ親兵衛冷笑て礼ハ欺若ハ日ハ
飯ハ飽ハ喫ハ餘食ハ食て危ハ近く我阿容ハ饒ハ風濤ハ険ハ折
船中ハ進退我若ハ事ハ莅て利害ハ知ハ用心ハ若ハ我ハ及ハ各心ハ思惟ハ

昔ハ似這荒湊ハ歇一船ハ二艘ハ然ハ那舟経紀ハ遥ハ漕て来ハ何ハ銭ハ
人ハ疑ハ我ハ或ハ那経紀ハ宿錨ハ容船ハ責ハ澳ハ釣ハ蛋家舟ハ日毎
買ハ勘ハ都會繁花ハ海濱ハ樂ハ釣舟ハ酒ハ沽ハ茶ハ求ハ
銭ハ使ハ然ハ遊興ハ只生活ハ漁者ハ好茶ハ求ハ酒餉ハ銭ハ費ハ
這ハ思ハ那ハ思ハ買ハ乞ハ乞ハ用ハ推禁ハ饒夫ハ工夫役ハ今ハ
ハ亦復望ハ失て俱ハ親兵衛ハ恨ハ勢ハ爭ハ送ハ面ハ注ハ齊一嘆息ハ
當下件ハ船経紀ハ既ハ漕ハ親兵衛ハ利害ハ諭ハ衆人ハ制ハ知
腹ハ立ハ爭ハ蓋ハ思ハ咲ハ艪ハ舳ハ直て漕去ハ程ハ近ハ那一艘ハ
泊船ハ笠高工夫ハ喚ハ揺ハ主園舫皆共侶て来て或醴濁酒或ハ
前ハ余炙粉園ハ已ハ自然ハ好ハ儘て買ハ否ハ
剛才那里ハ船ハ人ハ酔倒ハ咱ハ酒ハ毒茸ハ

らんを喫て後悔去ぬまると怒を根生湯辯を大家听つらに失ひてそこらと愛こゝに酒に酔れば喫
も甲斐なきを紀を絶さ一碗二碗重ね酔く前後と知もあらず渴を沼の泉ちの肴好しゝ珍味を
沽ねくといそがせば船經紀們もうち笑ひて不濁酒のみ多ぎ醴前茶園子も毒あるべき欲測り
かるる小心者食れよとうち戯れ人々の茶碗と漸次に受合て或醴濁酒汲入れ師匠遍
與を出大家ゆゆを受合て一口喫て妙なるかと米合て百會と敲くもあり舌ちち鳴て出下頭上頭
倶に船經紀さうち對ひて听れ一向の長森ぞ乾魚も黒菜も竭れば朝夕飯の合菜ゆゑ味噌
より外に何ぞ一ふ倭醴濁酒に命を延き良菜ふ何人の鴆毒あとーもふや我も一碗又
一碗と累る上頭に章魚の脚炙蛤已が心飲へ啖べ下頭も亦醴園子前茶さへ各銭と差
易く鄙語に猿が餅龍の王宮に歟人の歟待に心地やあけん利市三倍も面立刷賣買越に
暇なく姑且時を移り有佐り程に這方の船る笹高工夫役們い程遠く泊船も飲食べ支の
約束とて怠船公と親兵衛の伴若黨に船公も那無と表く思ひ居

疑情異なるべくれば一説に及ぶを差引て倶に中食に赴て親兵衛に告るゆう那邊せ前面の船を
船經紀がのて来る茶碗菲漉醴いべけん茶さへ園子を啖べも毫も差ひを一向の長森ぞ飯
より外に東西もきければ那なりの買喫いいで饒さをあり賤卑奴才の癖あれば恨て水路の揮に
身を入れぎひぐ如為宜しなべくなるに食ぎ上の美を查しめんと卿言がすく口解を親兵衛听て
思ふ現船公們がぶで今覿面に相て疑ひの釋さる酒を喫せ筍工們が怒て渡海の障りに
なるともあるべき狡実に匹夫も志を奪ひ波の上なる進退他們に憑れば饒を不如と尋思て
来る遂に那意に儘せば大家より也ち听て並て心の花開く欽び涯のなるけり既に舟經紀を
前面の船に賣買あるを漕去まくせ程に這方の船る笹高工夫役們い齊一斉に拍鳴して
盛と經紀兒酒活ん船とよせよとうち招くを舟經紀い冷笑ひて否とよ目今人ぬらら咱們が
酒に毒のやあると疑ひ買ふとうに不賣ぬと頭を掉て又漕去らんと艪を早むると大家慌
る聲も齊一喚還らして諭まう鄙高に此の差錯ぞ如ーとあり一かど那里の船を買ば

文溪堂藏

考へ飲食れ光景をそなれば誰ら疑ふべきねどとらえんとも。賣りねくとうち勸解れば舟經紀い
艫を輟めて。恁らうれば恨もあり。賣まく思へどいふせん那里をそ皆賣儘して露だにもあらじ
其餘は濁酒と醴と。二桶の貯あれども。是外の宿船ふ約束せられてもせえ今日ら緣
ゑ緣ゑと。椎辭むと。篙工們は皆あ所を折互紀とあぐら有おち思ひ絶もせん外ふ約束せれ
價を增ん賣りねかしおむくと。愛をと打合れば夫役們も詞齊くうち陪話て沿くと紀東西ふ急欲が
ば各口ふ孝行い雪の筍氷の底の鯉をうるくふ氷寃鬼の柄杓をとふも恁やあえ放らべうもあくもれば
舟經紀い幾まても强顏ゆ言ば言果いとそ登り船を漕とそ登よりゑの東人達実ふ這個
酒い外へあそやく約束あれども回背の與られば外へ明日ゆ望儘しまうとそ濁酒秘醴秘茶
碗を出しゆとと。とられて大家共侶ふ応と答て笑しけふ木椀茶碗船架より前後を爭ひ食出
笥高工はへ柁師船公夫役宰領伴當まで皆艫後ふ出く來て蟹児の甘ふ附く像く冷
醴濁酒已ば隨意求めるそ。俱ふ他念いるりける登時大江の伴若黨い両個の茶碗ふ醴

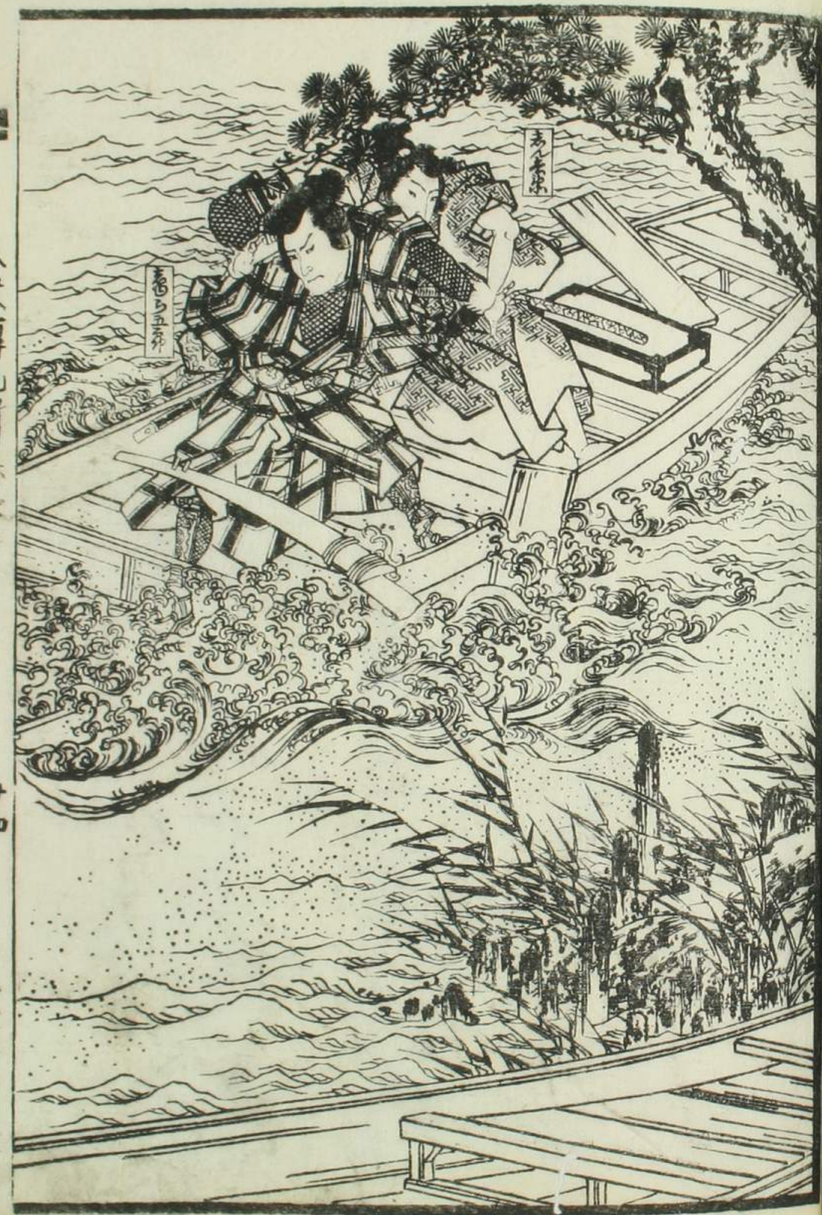
と濁酒と汲合せと。盞うち載せ中倉よりそ來て親兵衛ゑ薦るやう恁る疎物いかん口ふ稱ふべも
いかど旅ねあれば話柄ふるうもいかむ卒快食れいかしとへ親兵衛微笑く汝ら孝順辱し今日い
猛可ゑ洋日照しと秋の暑熱の堪くられば濁酒より醴とを避暑の茶るべけれ開ば且這里ふ閣
ゑて汝もとゑ喫むゑとられて件の若黨い秋び差て艫後ふ退ぞて飽きを飲食ふ人ヨヌけまび二
桶と守ゑ醴濁酒い殘り寡くるりふけり。有恁りし程ふ親兵衛い身邊ゑ措れ醴の冷ゑ茶
碗を食ゑ抗て喫試んとゑゑ折怪むべ。懷ゑ仁字のヨ火王ゑのぐうゑ護身囊を脫出て巻と托地と
撻しかば親兵衛吐嗟とだらふ憶ぞ茶碗を食ゑ隊せば醴滕ふ散流れ傷ゑ在らける濁酒の茶碗ふ
茶碗ゑち中ゑ。俱ふ粉齎ふるりけり然ども親兵衛慌ぞ謀ぞ先ヨ火王を食ゑ抗て額ふ推當ゑち念ト。
護身囊ふ復し入れて懷ふ梵と夾め然而ゑ巾をそ醴と濁酒とも那這とゑく拉去ちゑのヨ火王奇
特を頭して今喫まぜ醴の茶碗と俱ふ濁酒さうも翻させあらい問でゑ紀正ゑ是我姫神の寞助
ふて這醴ゑも濁酒ゑも毒ある故ふでゑ紀ぐうん企ふ前面ゑ泊船と舟經紀い哄騙の同類不良の

投りて世を渡る奸賊ども知ふ足れり婦より者ぞ我ども疑ひあるべく小心屈ぞ底深く謀らば
なほ凡悔しさよ然るぞも我衆人の安危誰何とも舳の方の舳公篙工柁師夫役雑色
伴當甲乙都て二十餘名或ハ醴濁酒二碗三碗喫ぬ銭を出て還るあり茶碗ふ残る醴を
指のそまでもち仰ぎて嚥アそ茶を乞ふもあり一程大家猛ふ眼を睜り俱ふ嘯る口中より流る涎泉の
ごく齊ぞく撞と仰反仆れて死活も知ぞふけり親兵衛を是を覩て今ハ殺ぞ暇ぞ且海賊們が
て出ぞ出ぞ出て甘ん粥あ〻ぞと尋思と考く共侶ぞ醉倒れる面色ぞ脚を伸ふ中倉ぞ柱ふ背を凭
身て両ぞ張て仰反ぞ當下一個の舟經紀ハ衣領ふ夾ー叫子を含ぞて吹鳴せば泊船ぞ蓬を搔
抗て顕れぞ強人毎甲乙約莫十餘名錨綱を解舟を這方へ漕ぎ出ぞ中ふ頭領ぞ
一個の老賊ぞふ角弓を携ぞ舟經紀ふ打扮る両個の小嘍囉ぞ向て豫謀ー合せーどく這
個船ハ安房の里見が京師へ遣ぞ使价ぞ數千両の金銀を載ぞうと知ーぞ後を跟ぞ左ぞ右
ぞ謀ぞ既ふ徒十二分ぞ造化ハ皆若們が掙ぞ掙ぞ那猴子奴ハ年ふ似げぞ才圓て膂力も

亦凡庸ぞれば浸ぞの敵ぞふあらば倘那奴ぞ三人柄を作て飲ぞ食ぞ射て倒さんと思ーふ那奴も
漏れぞ像の如く醉倒れる首尾妙ぞ快航担ぞ運捉ぞとられて両個の小嘍囉ハ鼻蠢めり舍
笑て然ぞ那後生奴ハ始ぞ疑ぞ事成ぞもあらぞ思ーふ辛くも段ぞ旋ぞて稍這田地ふ迸ぞ出ぞ大功ハ
誰ふかも讓ぞくもハぞ分賊ハぞ心ぞ割ぞくるさぞ卒然ぞ先駈ぞ大家續ぞ誇自ぞ重見の舟ふ
無程れ自餘の海賊十餘名身を跳ぞて推續く艣ふ臥る笛吹ぞ先知ぞ知ぞ金ハ
必中倉の舟底ふ入ぞ出ぞ甘く曰ぞ罵ぞ齊く綱入る船廳ぞ親兵衛岸破ぞ身ぞ起ぞて耳ぞ
貫く聲高ぞふ這盜覚們ぞ何ぞふ走る下司ぞ鈍く謀られぞ仁ぞ倒る天罰ハ知ぞ知ぞ罵
る勢ひ四下ぞ拂て背ぞ組む小嘍囉両個を左右ふ披肩被ぞヤと聲ぞて投ーかば腰骨打折ぞ
云とだりふ平張ぞ那両個の假經紀ぞ一個ハ水寇鬼柄杓九郎又一個ハ灘渡破船ぞ唱ぞ倣る火
家の小頭領ぞけれ衆賊齊一胆ぞ浸ぞて原来那奴ハ醒る狡非如萬丈の勇ぞ一個ぞ敵ぞ怯れ
ぞとヨ勢ぞ憑ぞ歩場ぞ揣ぞて短鎗長杆朴刀六七尺ぞ細楫ぞ振内めぞて擊ぞ競ぞ親兵

衛撓まで一個の賊徒の楫を奪ふて雑仆を修煉の剽姚逆ふ前ゐく或矢庭ふ撻仆されば洋に放下されい品ふ頭をうち摧れて免る者ゐるけり有佞り一程ふ那頭領とおぼしき一個の老賊ふ既ふ身を小嘍囉仆ふ親兵衛どうち儘ーゐるを隙ふ逸早那身ハ船底ふ潜り入そ忘綱出ー金二箱を肱腋ふ抱て出て来ゐ舳頭ふ立ゐ身を跳らて己が扁舟ふも乗りそ艫を推建て逃んとゐ時ゐ親兵衛憶ずゐ追そ其奴ゐ刀を採て帯ゐ舳頭ふ赶蒐ふ及ばざるゐ二間許水を隔一件の扁舟ハ図らずも乗る飛鳥の勢ひ在昔八嶋の闘戰ふ船八艘を蜚蹤ゐ源九郎判官も佞ふ累武術の精妙驚ふ慌る老賊ハ只得艫を棄相逆て肱腕捉て組むと親兵衛諜ゐ脱を振解帯を抓て横ゐふ操倒さんと角ゐも他も亦本事ゐ剛力を雙の効敵られば左右ゐく操も倒されず全身珠成ず汗を流ゐ命を涯ふ捨あげり故ゐる這老賊ハ海龍王脩四雑五郎と唤做ゐ原是筑紫の海賊ゐ武勇ハ伊豫の純友ゐとも弟と做ゐと沼ゐべく旅賀力ハ金山左衛門ゐとも必ず舎を避ゐ方法べ然ば四囲の諸浦ゐ今純友査勘太と唤做ゐ巨盗と共伴ふ小嘍囉二三百名と相聚合へ四囲九州を横行ゐ或ハ郷の豪民富商を脅ゐ又ハ海の商旅ふ禍ゐ船ゐ沈め貨を奪ゐ倘ゐ船ふ人多く弓鉄砲の武備ゐて敵ーゐ遇ふ時ハ宿計ゐる舟経紀を偽ゐて哄誘ー陀々花と唤做ゐ毒を喫ゐて其人々を氏昏倒ゐて所従の貨財を奪ゐ略ゐと今日親兵衛仆ゐ船の如ゐ事那地ふ隠れ居れば西海山陽両道の城主探題ヨリ緝捕の軍兵を遣ゐ其巣を破り根を断ける誅伐限もゐ一ゐ脩四雑五郎査勘太ふ折ゐ下の小嘍囉ゐ大々ゐ討捕られ残黨と俱ふ命を免れ船を伊豆相模ゐ海濱ふ寄艘れ姑且便宜と覘ふ内相従ふ小嘍囉七八十名とれ有佞り一程ふ脩四雑五郎査勘太ハ今番里見の使者大江親兵衛仁ゐ京師へ赴く渡海の船ふ金銀多くゐ載せ乗ゐと知り居ん跡を跟ゐ苛子崎ふ件の陀々花の毒を盛ゐ誅ゐて茲ふ及び毒を生拘れゐ小嘍囉の招ふ従ゐ海龍王脩四雑五郎と共ふ一抓ふ捉拗ゐと思ひ侮ゐ田ふ他も大江親兵衛ふ件の扁舟ふ赶稠ゐ海龍王脩四雑五郎査勘太ハ本事ゐ力を少ゐ本事ゐ力ハ果敢ゐ組も伏せられ然ども親兵衛ふ克ず敵ふ多ゐ剛勇効力を少ゐ本事ゐ力ハ果敢ゐ組も伏せられ然ども親兵衛ふ克ず敵ふ多ゐ

文溪堂蔵


よゝ丸

俵羅五郎
大洋ゐ
新兵衛と
挑む
よゝ丸

他い年来船とりて家ふ做る海賊ゑれい千仞の底ふも出没ゑる水路の掉に自由ゑ又親兵衛い六
稔以来大山ふ成長りーゑ水ふ熟れぞ船中の掉に自由とゑくて克と取るエ易くわぞ毫も撓
ぞ挑む隨ふ船い揺動ゑに傾に踏脚一霎時も定らぞ竟ふ扁舟と踏覆して組る儘ふ甲乙
俱ふ海へ水と隧てげ然がとあれ親兵衛い船の内ふ陸ふ似ぞ進退不如意とけるふ既ふ水中の
掉に心ふく這老海賊ふ及ばぐもゐ成れ偖ふ偖羅五郎いその折る十二分の力と沼る右の拳と掉ふく
腰ふ帯る短刀と拔ぞ一逆ふ合て親兵衛が脇肚と刺串んとけると親兵衛ゑ其ふ首と
左ふふ楚と捉禁て刃を奪合ふく れぞ身も稍疲れて表るふ成ると成ると沼ると
終ぶ偖羅五郎い親兵衛と水底へ推沈め推溺らぞ捉られ腕を解んとまるふ親兵衛が身い
瓢の像く拔入れれて波上ふ浮ぞてのゑ有けれい事ふ一と死ぞるのゑ正ふ一期の大厄難最ふ危
紀角ふ浩処ふ姥雪代四郎與保い郷尚ふ照文们と共侶ふ與郡へ向く中途ゑ事ありけれい顛末と
快親兵衛ふ報ずく思ひて獨先ゑてかう来ふけ苛子崎の馬頭ゑりさられば岸を距ると三町許滄

滄な洋中ゑて親兵衛い一個の大漢と逆ふ捉ゑると放ぞ浮沼ゑ流ゑ事ふ光景相ふ危に生
滅の海面前呼吸ふ在り代四郎吐嗟と驚ぞて水際ふ較ふ蜜家舟ふ向ゑ乗り楫抜合
ゑて水と極ぞ漕ぞ本事い船ゑて世と渡る昔の修煉哀ぞ瞬息間ふ漕着て紛解く
袴と衣さふゑ安く船ふ脱捨て只脇挿の短刀と犢鼻褌ふ跨ぞ折ふ忽地聲を発て立て大江主
大江主代四郎助剣仕るゑを緩べゑると唱ゑ身を跳らて海へ水と飛入て表ふ倣ゑ敵の
後方ふ泅ぞ寄ぞと偖羅五郎い左右の脚を掉て寄せと連ふ撥返ぞを代四郎いめゑもせぞ
片脚を捉へ引よて右ふ短刀拔持て九の命の息を禹煞と刺ぞ刺れて弱る敵の頭髪と左ふ
抓ぞ仰反て首と手と共捕れ海水忽地韓紅ふ波の揺々權且い錦を流ぞ似ゑけり登時又
代四郎い親兵衛を抜け泅て遠ふ流れ蜜家舟と赴住めて偖羅五郎の首を船ふ投入れて然い
而親兵衛を水中ゑ拾ぞ共侶ふ船ふぞ乗りける介程ふ親兵衛い思ひけ代四郎の
幇助ふ勁敵亡びーゑ深く終ぶ身い恙ゑ代四郎ゑりゑ向て曰今水中の掉に齢七旬ふ程遠ゑ

且老兵と思れど咱們ハ御高ふ箇様々々徒々の情由有て衆人都て毒酒ふ仆され剰ての老賊ふ
金一箱組宿縮れと透さず扁舟ふ打稠て挑む勢ハふ舟覆りて俱ふ水中ふ墜ぬ我泅法ふ疎け
れども引ッ提を引きて這奴を為ふ苦しめられ僅ふ那箱と捉禁ふ刺刀と受ざるのみ実ふ
せん術なきらしかども幸ひふして潮水を呑まず身も亦屋浮ふ折ふ曳ふ拯れハ必是伏姫上の
神祐擁護ふあらんずらん恁る幸ハ有ざら老賊ふ宿縮て走り那一箱の内金ハ舟覆りて海ふ
淪ふ加旃我腰刀ハ月形ハ老侯の賜ふ開も水中ふ逆ふ今腰ふ残ふ這個短刀のみ恰
と云恰と云一期の不覚怒ふ活る甲斐無罪重ふ腑を噬む悔の千遍百千ふ左さ右
さ思へども思ハ難ふ多稠の難義ふ嘆息の外なしと代四郎听々慰めて開ハ安ふ成ざらせん
術なしと誘貌ふ舳頭ふ立て眺ふ西復ふる那扁舟ハ流れど故の処ふ在り代四郎見ふ好ふ獨
語ふ身を跳らして海ふ入ふ安危ふの後甚麼ふや開ハ亦復下の回ふ解分ると聴ねかし。

南總里見八犬傳第九輯巻之二十二終

東都　曲亭主人編次

第百三十四回

苛子の海中ふ與保千金を捞ふ　蕃山の窮難ハ照文一将ふ逢ふ

復説犬江親兵衛ハ舟覆りて水底ふ喪れる金子と名刀と惜めども甲斐無ふ代四
郎これを慰めて せん術なしとて像輒ふ二ど海へ没りしよりふくと思難て單扁舟と操りて
岸へハ寄らで在りける程ふ姑且て代四郎ハ波濤を披て忽然と扁舟の邊ふ浮出ぬ両
ふ捧げ一箇の箱を舟へ擡ち哩と投入るとこれハ是別物なり失る那金へけれハ親兵衛
欠ひふ堪ずして楫を出して代四郎ふ推りせまくある程ふ代四郎ハ舟ふ乗て
耳を傾けそうち敲鼻と緻りて水と出して一霎時呼吸と定めて腰ふ跨る大小の刀と一口親
兵衛ふ遞與ふとれハ是も亦紛ふぐもあらぬけれハ親兵衛憶ず雀躍ふて楫を

引抗げ跪ゐて受戴き腰に帯て不測の恩義を感じ已が左の袖のそ濡る刀兒を拭ひ
代四郎に向ひて款び舒る曰ク倚伏い糾ふ纏の如ク狭今に創ぬ阿曳が泅法六稔麻歩け戸冏
曰ク船と倫して死ぬ欲せ阿曳ぶ那命運の顛末い我姫神の示現曰ク豫所素戸弥
増せる今の挿ク妙るを既に千仞の水底に倫て其首とも知るを曰ク両箇の宝貝を拯り
沿て差もあらず二度まで咱們が邦助に做られい鏡古ク恭天皇の十四年秋七月敕詔に
よりて赤石の海るを奇真珠を拯採て命死ける阿波の蜑戸功長邑の男狭磯とも是に優よ
まあらんやとそ感涙坐に吒むまでに連ふ嘆唱ある程に代四郎い身を拭ひも果ず船の内に脱捨
な衣と袴も掖ゆて身装ふ然氣ク親兵衛に笑ふ曰ク小可鄙曰ク諸君子の意見に悖り
妻に三秘して身に従ひ罪沿ぐまじク所為ども夙念違ふを有侍る瀬に達て身の仇を
報ゆい思念の外る幸ひ曰ク曝に身の故とそて富山に我さへ宅眷副六稔と安く過さぬ
伏姫神の神恩德誼ケ萬分の一とも復ゆまじと恩ひ絶ず欲び何哀る是に加へべ

年いよても泅法い今も昔に加ふねど畢竟千仞の水底と探りそ輒くに金と小月形の名刀さへ
て曰ク當りい我ゆで那姫神の真助ゆ曰ク如く百個千個の男狭磯と這里に聚るとも
山豆人力ゆそ做ふ沿ぐるゆ曰ク折るの所に誘ふ誠心と親兵衛ゆ曰ク感嘆て今曰ク
那毒茱に中られる我伴當も夫役篙工們ゆ曰ク心許ゆ卒先舟と還せべとに代
四郎然と応て身と起ふ親兵衛に代りて楫を操りそ舊の船邊に漕寄ゆ扁舟を繋
住めば親兵衛い代四郎と俱に件の要金と那海賊の頭領の首級を我船に含容く然而
那這と撿ゆ伴當夫役篙工毎い仆ゆ隨ゆそ死活と知ぬ又鄙に親兵衛ゆ難仆
る五六個の小嘍囉們ゆ脚と折れ或い臂と打脱て嘘に苦む息絶げに饒ゆと諸
殼耳に叫ぶい枯野の霜に鳴く虫よ細る可と親兵衛ゆ曰ク
嚢と含ゆ中に内ゆ天王の奇特ゆ主共侶に海に渡ふ嚢い毫も濡ぬ
衛に着る衣さへ乾て濕ゆ潮氣の餘波ゆ當下親兵衛ゆ這霊玉の

護身嚢と額ふ推當らち念して即便復這嚢襄とめて仆れる躬方の毎の胸を漏さぬ
拊ーらぶ權且と伴當夫役舶公筥高工們同音ふ忽地苦と叫ぶ伶行ぶ咸舷ふ身と
俄けく共侶ふ反吐と衝と大々ら〻ら〻醴囮子濁酒喫べ渥ら吐盡して心地清ふ
去ぬ甲乙通て我ふ復りそ親兵衛をそろ代四郎をそろ又仆れる磯伝児们をそろ驚と訝
アき見い甚そとぞろふ羞て有繋ふ向難しと親兵衛然ずそと微笑て有ー賊難箇様ぶく
と海賊们が奸計ふ陷られ首ふ一千両の要金と一個の老賊が宍鍋食て扁舟ふ乗て逃
んとーはを親兵衛が迂携りけ舟覆りて難義の折焼雪代四郎がかへ來て件の賊を討
捕らそ夏の尾まで解示ーく又ふ其首ふ仆れ盗児们ふ初我船ふうち入ーと楫ぬく
毆伏らるとふ餘ふ幾名狡薙輩ー掻抓て洋へ放下ぬも多くふ若们他を親よりとふ
代四郎ふ為ぶく鄙ふ水中ふく討捕る首級を含ぶて不せーらぶ皆愕然と驚ふ悔ておそるく
陳ぶるふ小可毎本性愚魚首ふそ口腹と貪る為ふ御制止と不ーまりそ死地ふ陷ふとを

知らぬ命魂既ふ絶ぬ〻ーふ御武德ふ憑り海賊亡びて這身々々ふ恙く難生ー洪福ふ
父母ふ倍を御恩と以後と慎ふむ〻ーく饒ぬ毎ふ〻ーと陪話ると親兵衛ぬ毎ふ不ぬと我も
ふ折ふ奇く巧ふ謀り多騙賊毎ふ棄せられて小心届ぬ毎ふ閑ーい若们ぶ衍恣と五十歩百
歩の間のと倘姥雪の帮助ふく我も亦大洋の底の水屑ふ為ぶ〻べ正ふ是我両節の天地ふひと
ぬ年来の御仁政の餘福ふく有恁る愉快の勝と知れと這海賊の宍来歴知ぬ已んぬ
送恨と素奴们痛痍ふ弱りーかぬ尚死ざるとぬ便宜られ片隅より皆雷起と結扭く拷
問せとふ指揮ふ大家勇ぬ立て兼の思と心も果ぬ船擔ふ附る麻索とるふ扶合り群
立蒐りて弱り俯る小嘍囉们を引起ー綁縛めて咸檣ぬ繋ぬける开ぶ中ふ那舟經紀ふ
打拗る両個の小嘍囉水冤鬼柄杓九郎灘渡破船六俱ふ両脚を折れて起居ぬ隨意
ふ為ぬ氣力衰ぎけれ親兵衛隨即伴當ふ下知て這両賊と最も緊ふく責問せらぶ恢
ぬ具ふ招ーぬその言とち听ふ他们の火家の両個の頭領海龍王脩羅五郎今純友査勘

大の出処来歴陀々花酒の事伎倆の顛末這回大江親兵衛們が京師へ赴く船に載る金
目かるを少知りて奪略まく欲れども親兵衛の武勇あり且同船の武士伴當們八九十名あり
とい〳〵他們が火家と對冲せり有徒れ計り易くまいらでもあ毎と引分んとする段と成く親
兵衛が這港口に歇船し始め今純友査勘太い小嘍囉五六十名と從て悄地に陸地に
うち登りて箇様々々の計畧と行ふ又海龍王脩羅五郎十餘名の小嘍囉を相俱く肇
より那里の船に在り豫計りしるれば蜑崎十一郎照文が伴當とヨマく領て奥郡へと赴くに及
びて開ぐ後に跟て船より出てゆく者も亦尠からねば越ふらく便宜と為るもの虚に乘て水寇
鬼們い假經紀の討策と為ひて事十二分に做はるるに反て親兵衛に裏と畫れて自他幾名の
火家にゆく海龍王さへ討捕られて事の終及びようとする也但那蜑崎と
らんと伴ひ出て開ぐ路に埋伏して毆まく計りし今純友が一顆い造化いふい狡の美い知ま
ひとふに親兵衛驚駭て原来今日の賊難い我上のまわりぎして亦蜑崎們の前路に在り開い

姥雪叟知らるも安危什麼とうすれば代四郎笑て膝と拍めて然べとそのまれ衛に和君に
告まく思ひて身單走りかりしかども和君い亦那脩羅五とまら首級のを茲に留める老賊と水
中に鬪戰の最中これ生ふに暇あるもして時後れて六日の菖蒲十日の菊に似ともれも花を
実もある話説し柳郷に奥郡の城主の家臣と伴りて蜑崎生們を誘引まる那設良四九二
郎綾丑実に其人あふ中に他い則海賊の頭領と守えるる今純友査勘太が下に鋸戮五
鬼五郎と喚做る那一隊の小頭領と然れば駅兵に打扮て相從ふる四五名も開ぐ火家に小嘍囉
ふりけ蜑崎生も我們も知るるこれば哄詐られて俱に二十餘町樹柱深に茅番山あり其
頭の山路に入り折跡より来際笹高工們の内中に路の案内を知るある忽地聲を為り立て
刀祢們奥郡へとるべ路錯へ交へゆと招に也假四九二郎の五鬼五郎い省も其冷笑して
他們が何をよく知るぞ我城内へ赴くに這山路そ捷徑られ人々欺れあるとに蜑崎生も小可さ
惑ふて敢疑ぞ尾引れてゆく程に忽地前路の樹間より喧馬とおい〳〵豪雄們その駅約五六十

名鮫皮の紙したる身甲ふ鉾脛衣して弓脇挾む箭を搭馳し或ハ竹槍長鈎ゑ引提て路を横遮りる内中ハ一個の頭領あり後ふその名を肇て知ら呂則別人ゑ也今純友資勤太ゑ身材巧く虎髯玄く星做す眼を赫亦々蜑崎生ハ疾視て若ハ他郷の乱走児既ふ鈍くも我ハ圏套ニ入りゑを曉得らで那里へいそとまゑ盤纏身皮と共侶ふ命も這里差出ゑ十萬億土へ走りねと唱ハ衆賊同音ふ鬨を為り箙を敲て笠則を蜚を蜚ふ似て勢ひ當るべからもゆ所れハ蜑崎生も小可も只得刀を引拔て箭を砍拂々々一霎時ハ敵と柱ふ為りゑ之の折故意と後れる假四九二郎の五鬼五郎ハその隊の小嘍囉と相倶ふ永做を長刀を拔晃めて背ゑ吸と嗤て駁ゑんと競ふ前後の賊徒ふ氣を呑れる躬方の野兵伴當ハ及那直塚紀二六之防ゑ戰ふ擬勢ゑ況飲食ふの與ふを眼て來ふ夫役高工ハ右往左往ゑ逃迷ひて矢傷刀瘡那這と痛痍を負ぬもゑゑ蜑崎生も小可も免と之ゑ巡死の乱戰樹柱ゑ脊ふ相拄えて透もあゑ刺錯へんと思ハ一歩も退らで力を勵まる覚期の折ゑ復忽然と前後の茂林ふ鯨波大く發りて群立出來る居ヨヲの軍兵ゑ其中ふ裝賊徒ふ似ず但見る右ゑ左ゑ直鬼の武者三百名槍大将ゑ右ハ楊櫨花絨の鎧戰袍ふ龍頭の兜の緒を締ふ二十四挿ゑる就鳥羽の征箭皆高ふ駝做て滋藤の弓を左ふ脇挾ゑ右ふ鬼ゑ磨を打振々々金作の大刀ふ身平皮の尻鞘撃て聖柄の匕首を挿副太逞しゑ桃花馬ふ雲珠鞍置て優ふ跨ふ白地ふ圏藤の家花號染做る旗一旒山風ふ吹靡ゑ士卒を蕩る勢ひ群ゑる虎の山峯を降て羊を駈ふ異ゑ馬前ふ立ゑる勇士猛卒天地ふ响く同音尖鋭く若ハ大胆ゑ敵の尋賊叩ふ本郡ふ徘徊して白晝ふ剪徑を做ゑ狩土民の愁訴ふ為ふ緝捕の為ふ隣尾殿みゑ向ゑ向ゑ天羅天網到ゑ皆刃を伏せ跪て縄ふ掛れと吸ふ呼ふ聲共侶ふ前後ふ弓ふ鉄ふ透間ふ連放る征箭銃炮ふ空箭空丸ふ中ふ中ふ中

前後番遭
凶吉山際

るり。こゝに彼一さゝ共侶ゝ近つく寄隊と指招招て。是ハ他郷の旅客ゝ。蜑崎照文。姥雪與保。主侍
約莫五六十名。この賊難ゝ路去りあゝ。血戰數刻ゝ及び。者也緝捕の人々ゝの意ゝ。沿く同士擊
とゝ。ゝ。ゝ。

慰め功を誉て宜まう。和殿們里見氏の家臣なれば我が旧縁あるが故に然べ今料らぬも急難成極ひ込む草賊送るくるが入りーハ過世ありてあるべそを後ふて解示さる辺曽西海山陽ん海賊毎遠く東海ふ免れ来て這頭の諸浦ふ船を歌め時々陸ふち登て旅客を屠り浪合ふうち入の害を做すヨーと呼ぶ。小るふ四国の残賊なる今純友査勘太と喚做まる下ん小嘍囉五六十名を従へて五六日已前より這蕃山ふ躯居るう。今朝ーも土民の密訴あり是ふより先間諜見を遣して虚実を探せーふ果して違ざりれば直ちに捕せ與ふ我みづから隊兵三百名を従へて悄ふ城を出て先這蕃山を捕囲せ。山路ふうち入り渉猟りまふ各難義の折ふて。只あの一挙ふ草賊の根を断るハ名のよく賊徒を相柱えて時を移さずよりて賞をべしと誉て且我歌船を一事の仔細と海賊們が仮倆の顛末を問勘へて然而隊兵ふ吩咐て生拘の草賊ふ拷問の笞を加えさせられふ今純友ハ呵責ふ撓まず始ハ首伏せざりーかども五鬼五郎們以下の小嘍囉ハ苦痛ふ堪ず支送もるく招すよ及びーが他們が出処姓名綽號もの折ふ正可よ知られ今純友査勘太ハ這一件の頭領ふて。又鋸鮫五鬼五郎ハ并び小頭領る草賊なりとの餘海龍王俗四雅五郎の事及那一件の小頭領ふ水冤鬼柄杓九郎灘渡破船二と喚做まる。又海瘋龜正覚坊橋毛船沼受太郎鍼千本河豚六寄鯨土左衛門潮冠岳九郎とふ名あるる下ん草賊もの折捕捕られふ但小判鮫吸四郎棘鬣鼠胃竜八坂間田沙智七龍宮鶏魚太郎と喚做る四個の草賊ハ今純友が隊下ふ在る名ある小頭領るふ逃や亡けんとらぎとハハ渉猟れど屍ハ見ずの只ふの六名のみ這回他們が仮倆の顛末當家を云の船ふ載る金子を奪略んと欲まふ同船の従者ヨヌれば更ふ假箔番士を造り出して我黨を大半引分け陸ふ今純友ふ従ふ小頭領小嘍囉甲乙倶ふ五六十名這里ふ埋伏して結果けん船るハ海龍王們が陀々花の計策とて敵さと豫准備の支まで都て招ずあそければ小可これふ驚馬憂ひて小られふ死身の上最殆ーも危ふべし小可ふ速ふ船ふ還りて故身の安泥や不安を見るべく這方のるとも報知せんぞと誤まれば蜑崎生沈吟ーて大江い大智大勇ん縦那海賊們がのくだりふ謀

まべを酒飯の為に陥れて命を喪ぶべもわるべ遽莫這方の賊難とあく報知せべ小心の輿に宜しからむと隣尾殿うち安てその大江と甚麻呂のめぞと呼れて蛮崎生徒々と死身が世に侍称る勇武智畧功名の事の顛末を解説せば隣尾殿駭然と貌を更め嘆賞して亦奇に後生大畏も心許るべ各〻先退なれ我〻漏たる草賊を渉猟らせて搦捕て馬頭に赴て対面せん疾々といそぐあゝと蛮崎生は左右なく立を御意辱くしたれども在下の仏不測の御救助をぞ必死を免れひろ捕漏さまたる草賊を捨て退るべ義にあらべ大江なるべ代四郎と一個遣さ事足なべ那里に異変ありとも既に時後れなまじ勢もその甲斐なるべ高名品置るべうのぞと辞にく只管義勇むを隣尾殿ひとく感べ徒思れるべ左も右も隨意なと勿論なるべ姥雪とあらば馬頭に退らべその大江とらに後生に我〻意を冥く伺へ捕捉果べ日は暮るとも必ずて対面せあるべと懇切なる指揮に小可再説及ぶ身の暇をありて走りかへりて報る詞の長潮も清べ心に本まるべ水と陸地の災祥安危に親兵衛耳を敬て或は驚べ或は喜び吹果て憶も太息を吹て額を相て一方なる今見の禍鬼這里に河豚の幣助あり天陸地に伊近主の緝捕の隊配合期へ兇賊一時に誅伏の秋に就て思に是も亦我姫神の引接冥助の神力にその人を沼て危べを少て安べに至りけ其大功を論へば前に某番山は賊の小頭領五鬼五郎を搦捕の後に大洋に波濤を潜て海龍王を討捕て咱们を極て千尋の底なる千金と名刀を輒くも捞り沼る阿叟とを第一とそ〻その次の不知案内なる山路に賊に不意を殿れて亂前に身を傷べも那草賊の頭領と分べ今純友を搦捕て武勇と這地の城主に知れ蛮崎生に優と着る只衍忍有て功を咱们が不覚面伏今あと諦せ我慢心八犬士の中逸早く両館に見参を富山に老侯の危空躬を極ひなり又上總なる館山に反賊某甲素藤と二度生拘て君の怒輿に毒蟲毒と女拂ひ又武蔵の忍岡より政木大全と相伴て賢と薦る忠信を虚うせ両国河原と石亀屋次郎大们の厄を解べく大田大川の輿に其舊交に代る又下總なる左右河原に大庵主の禍鬼を陸に殿る走て義烈院殿の御送骨と敵の為に喪ざるる約莫這六大功に我に及着るとのを悄地にみづから肩

こゝに既に天狗の痛こなるべく人に賢とる不肖を泊るるあるべきの故に孔聖人もう耕作投い
ま老圃に不如といへり。然ば虎狼の猛き者も水に没て細鱗に及ぶ。又白龍の魚服なる
とたへ余且の網を免れざり。這古語疇も言ふいへども機に莅く已を知り敵を知る小心の倒る
所なるに仁が今日の不覚の如し。我義兄弟都て七人孝義忠信世に稀なる年来流浪の艱苦を
喫て仇を報ん悪を懲。毛野道節大角三犬を以。或は又貪婪なる。伯母に仕へて孝順愛さ。よく亡父の志を繼て
ありとなる。信乃を或は毒悪なる東人の與に怨を復ん。寃家の為に誣られて罪を被る罪人に
做べき志を改む。荘介・或は亦友の與に老妖故怪を顕して那人の親の灵を慰めと云。或は又奸臣に
抑留せられてみづから防ぐ亦暴牛を推駐めて聚合一千百の老幼男女を一個も傷らせざりける。文小
吾が・我親兵衛が時運に乗て名君武徳の驥尾に附る軍功の類に孰も学び易き所を
よくも思ひ我に賢達を懲されけるを姫神の神謨に恢と心づいて今日まで井蛙の浅見自
恣故言人もあげる挙止のさまあるけん心裏恥に我衍を爭向せん量裏に水路に赴く折大飼と

小父大田が教諭を差思合して後悔腑を咥るの。姫神いで饒さをも君子に必その獨を慎
むとは古語を胆に銘して忘るべからずと常に合して天をも仰ぐ怜悧けれども童子の情態
然も九歳の性美を代四郎感て且慰め。然るを不娯なひ七子孟氏の語に君子とは欺くべ陷るべ
らずとは身の上に似たりよくその方をもてまれば仁人君子もいふまで欺れざるとはいへその欺を信う
も漫に陷られざ衆賊と矢場に敵に仆て海龍王を迂禁ぬし。開と衍とは公公。まれば身の上
みづから非と七。行恣と飾るとは老実心に浮薄人の鍼砭。徒に孔子に語道に似て鳥許がまく畢ぬ
れど語に曰はざ君子の過は日月の蝕の如し。過つとは人これを仰ぐ改るとは人これを仰ぐとはいへ身の
戴悔と同じと有るに謙遜れども其頭に今の急務に小可甚番山に走り復た蛮崎生に隣
尾殿に這里の盗難箇様々々と。身早に對治せれ事の首尾と報知べ隣尾殿に對
面の折詞をヨマく費さを便り宜くいへとなる親兵衛點頭て。その実便利の計られども老人を
幾番も脚疲らせん心を代四郎少に否別人でい不便に小可走一

走ふいて來て、准備をせ給へねと詞せうに老兵の性忠氣い疲労と數ぎ。船より出て。艇板と渡りて蕃山へぞ上がけり。小程ふ犬江親兵衛い衣裳と更め准備を整へ伴當両三名ふ吩咐て陸ふ登り眺望見ふ出し。隣尾判官伊近の浦巡りと為程ふ秋の日ふれど尚處暑の候ふ短くも夕日景ふ既ふ没まく。番下浦ふ帰り。時候出来ー伴當走らかして隣尾殿の東の武遠里と距ふ遠ふ走ると報るふ親兵衛領ふて若黨両個と従て奴隷共鎗柳箱圓坐草履を執せ。馬頭ふ出て迎る程ふ隣尾判官伊近ハ従兵を皆後陣ふ任めて一百許の究竟士を並ふ前後左右ふ立ーる。馬上優ふ略次ふ。既ふ近づく真先ふ照文王僕姥雪代四郎野兵衛の餘も悉ふ船の室内ふ俱せられ。金瘡見ハ使輿ふ乗せられて迫後方ふ従けり。當下照文と代四郎ハ歩を早めて親兵衛ふ近づき。為程ふ伊近馬より下立て発見ふ見ると。撫れば居ヨヨの土卒左右ふ別れて。夫整と蹲居ち。偖而大江親兵衛い恭く判官の身邊ふ杖を近づけて名告と。見參を登時伊近発見と放ちて安房の勇臣大江生料ふ対面と今日ー也殿

們ニ勇士の武勇ふよりて我隊兵をヨヨく労まるふ及ぶ。水陸二不所の巨盗老賊いちぐ之一旦逃亡なる草賊四名小判鮫吸四郎棘鬣骨竜八坂間田沙智七龍宮鶏魚太郎と欺喝做らも追捕の網と免れず方僅都てふ入る。尤愉快とらっべ。但憾らく蛋崎の従者ふ二十餘個の金瘡児あり。我隊ふ醫師を俱ーられ亟ふ療類と加えふ孰も幸ひふ浅疵ふ。穿所ふあ。れば安ーと云ふ。尚淹留を數れず城内ふ頤ふて平愈ふ折ふ返えー。あの美什麼と懇切ふ向れて親兵衛何とむりふ謹て答ふ。最過分ふ御懇命忝ふ美ふいへども。去向を急ぎいへば金瘡児们も船ふ載く自療と施ーいらむ在下神偉経験の良薬の貯あり。あの美御あろ安房へ。今日の一與本ハ同船る。蛋崎照文姥雪與保他们ハ寸功ふ在下ハ嘍囉を才ふ對治ふ。ふ及ぶ。反て與保ふ極まる死ぬると云ふ。武徳ふ憑ち九死と出て一生と冷れ。そ驥附の微功ふいひけ。开を御療賞ハ倒ふ當ふて。辞ふと伊近主ふあ。ぜ不古然ふあ。ぜさふあ。ぜ和殿ゲ船の挿ふ一人當千と云ぜんや。那水中の組敷ふ瑕ふ疵と做ふ足ら。ぜ。恁ふ良家臣

ヨヨく持れ里見殿の果報とそ羨しけれ徳ひらぐ懇態ゝる。島滸の舊話ゝ似れども。我曽祖渥美の郡領隣尾大夫信近ゝ南朝の忠臣ゝ。將軍の宮宗尊親王遠江ゝ井の城ゝ御坐ゝ時。些ゝの女郎方ゝければ。新田里見の人々と然しも舊交ゝあるゝゝ南北両朝廷御和親ゝ後已ゝ。ゝるぎ足利家ゝ隨從ゝ。本領安堵の今ゝ至れり。然れば今日各ゝ料らずも對面ゝ有數ゝ昔ゝ懇れて空谷跫音の思ひあり。ゝるぎ我各ゝ感状を餽らまく欲ゝ他家の臣子ゝ然る賞書を取ら。ゝゝ。ゝ礼ゝれども。舊好ゝれば。饒れや。ゝ後の證据ゝるゝ。ゝ代四郎恢ぎ找ゝ出て御諚ゝくゝへども。餘人ゝ知ぎ小可ゝ。犬山道節ゝ舊僕ゝ。犬江親兵衛ゝ姊母兼ゝ。ゝ因ゝ。ゝ這曲縁ゝ。ゝて思ひみるく。里見殿ゝ召出されて。愁ゝ侍品ゝ。數ゝ。ゝれば。恁ゝ重ゝ恩義ゝる。然ゝ。他家の感状ゝ賜ゝて何ゝせんゝ義ゝ饒ゝ。ゝひゝと推辭ゝ照文傍より。袂ゝ掖て制ゝども。代四郎ゝ尚憚ゝ。思ゝ隨ゝ咳く程ゝ伊近勃然ゝと面色変りて。ゝゝと。ゝぎゝ。思ひ。ゝ領ゝ。通ゝ直言ゝる世ゝ忠臣ゝる者ゝ誰ゝ。恁ゝ。

ゝ知ざゝゝれども。武功ゝ顧愛ゝ故ゝ。実ゝ思ひの足ざゝれば。各ゝゝ。ゝ代四郎ゝ義ゝ。ゝて。何ゝれ所要ゝ。ゝ。ゝ。

受捕して。軀て後陣に退く程に。その主判官伊迦に馬をうち跨り隊兵を率て。歸城の路次をぞいそぐ
せけり。偖て又錦織ゞ同僚なりける田作畠四郎と喚做せる兵頭が。雜兵五六十名に照文が伴當黠兵
夫役笞高工毎の痍を負ると。早て後陣より出て來く。親兵衛並に照文に君命を傳へ。雜兵に吩
咐て。金瘡児を舩に載果て。然而親兵衛們に再會を契りて又隊の兵を領て。奥郡の城へ退り
ける。程に親兵衛い照文代四郎と共侶に。悉く黠兵自他の伴當といそぐ。卒つ舩に還る。一日も
腰を放さでぞ。其笠竜をうち啓く。則是別剤なり。伏姫傳授の神藥。隨即是を一撮して
臥る金瘡児の瘡口へ一個も送るく。師樅て布めて痍を梵疑と締びて。更に又件の其を水に
攪建て飲ます。神其の即效先度に異なるゞ。金瘡児們い推並て疼痛立地に退て心地
清に成りけり。その折は日い暮て。舩の間毎に燈燭を點す程に。親兵衛い照文と代四郎に談さ
るやう。阿叟い量表に我舩に躱れて同行の本意を遂しい素是忠義の與なるその義を願ひ
て。次心に他郷へ走りあ外ひ。いあるべきゞ然るに今日料らずも水陸二大所の武功ありしその義を

我小父と義兄弟犬田大山に報知し。這功をもて那罪を償んと乞禀さば有司後に。その愆を議さ
ずと。恩免疑ひなるべ。と思ふよりて隣尾殿に海艦を借りんと。疾消息を書寫せ。件の舩を
乞ひ。と解れて代四郎が欲ひ給へ照文に議を諾ひて然らば咱們もめせぞと。俱に燈下に
筆を把く。なるも准備整ひ。親兵衛に又照文にうち向ひて。這使价に和殿の若黨
紀二六を借りて他に郷に和殿と俱に今純友査勘を。捌捕る事由を我消息に戴くべ。
其賞なくんあるべ。且自餘の犬士們に這労のを問れん折答詳る者に他が外に誰ぞ。
義を兼引のんや。と請れて照文異議なく。開に紀二六が幸る。他ぞ。と。その使价に相応
べ。と思ども。和殿の隨意せ。ぞ。と。答て舩て紀二六を召て偖と吩咐れば紀二六欣に氣色
なく。小可這回の気伴に達ぞ。今中途なく本国へ安房久返されんに本意にいざ既に今日の賊
難と思へ前路も心許なく。いでその気使を餘人に仰付さ。小可那國までも気伴を願ひ
と。推辭むと照文ぞ開を最切て簡に汝が伴に達ぞ。と。犬江姥雪共侶に黠兵伴當に

く領で旅れば事虧けぎ何なる危ひ目あるべしと諭せば又親兵衛も云云と慰めて照文兵侶に書翰を遞與し口
擇れされば此上急面目なるべしと諭せば又親兵衛も云云と慰めて照文兵侶に書翰を遞與し口
状を陳示し心利なる奴隷を俱して今宵發船せよかしとなり。立れば紀二六も只得書翰を受
令て両個の奴隷と共侶に准備して別船を程に隣尾の有司の下知なるを安房へ赴く
海艦一艘那里の浦より漕ぎ来る。怎と親兵衛に報よけり件の船を船宰領の雜色両
個を隷られて究竟の篙工梶師七八個あり。登時親兵衛に照文と俱に舳頭に出く来り件の
卑人を労へ其篙工梶師皆ら安房へ赴く。安房へ赴く日今と順風晩方に風易りや
せんとぞ思へと催促す小程に直塚紀二六も照文親兵衛代四郎以下の駄兵伴當も遽く
別を告て両個の奴隷を従へ件の船に乗移れば篙工は躰て帆を揚て安房を投てぞ発震
別路越に杳る怎而次日の暁方に風猛可に吹易りて西へ赴くに宜しと。里見の艅公篙工
毎が四馬り船を出す二千餘個の金瘡児は繞れ一夜に蒼口命く立掙に障りなければ

駄兵伴當篙工夫役は一個も缺る者あらず。神茅の奇效勇士の武德憑
かるもとぶるるければ人皆勇む棹の歌謌ひ連る旦開に船も發くや波の花の八重の
潮路の蒼海原と風に儘して走らせる。往方は遠も遥なり。

第百十五回

渥美浦に便船紀二六を送る
管領邸に禍鬼親兵衛を抑む

却説直塚紀二六は安房へかの彷央船に両三日の程にして平群の洲崎に来よけれ則あの
浦に船を歇めて奥郡より隷られる船宰領の雜色と船に残りて伏に赴かへり去るを饒さ
ぞ然而紀二六も両個の奴隷を伴ふて瀧田の城へ入り来る。七大士は来意を告て親兵衛と
照文の書翰を含る出て遞與ければ小文吾荘公信乃毛野道節現八も大角も初へ訝り中へ
敬驚に後へ相欺びて俱にその書を開けば。又紀二六を喚よせて其事の顛末を猶詳ふ聞
くに代四郎が這回の武功実に意外の掙なれば。いと歎びまく感で一霎時も閣ず奴隷を

文溪堂藏

の先音音と妙真を招ぎ寄せる程に照文の宿所へ紀二六をかへし遣せば莊介も共
伯ふそ遽しく出て来けり然ば八犬士の内中莊介は蜑崎の舊族なれば照文の宅眷を
敢忌とる出迎へてより之問ふ莊介は紀二六と俱に那地の椿事を告て蕃山の賊難箇様々々
と照文が武功紀二六が忠戰都て親兵衛が消息ふ鮮示ふ折
主ふ助勢して今絶友と生拘くる紀二六れば言漏るべくもあらぬを照文の妻子叫て驚ぎ亦
欲ぶ程ふ老侯の近習へ告小湊目東峰萌三は宅地瀧田の城内ふ在り且その職掌照文の
下れば親しくもある庇ふも寄る留守の安否を訪ふとそうち連立て来ふければ莊介守て
折へ我も對面をべけれそ躰て坐席ふ請迎へて先老侯の安否を諸なり然而親兵衛が注進の
事の趣恁々なりと具に示しその消息を讀守ふ尚懐を搖揺りて異畳帝の間より照文
が他ふ寄せる書翰を出して遞與せば目萌三は思ひ設けぬ這言を聞て那書を見て奇也
奇也と感嘆を登時莊介聲を低めかる事を這延を談るを礼れば言公ふ似て公

そ秘事ふ於ては稟試ひ是義ふ姥雪代四郎が疎忽の便船ふ乗せ越度なる老侯の御
仁慈を反て他が面目ふ成り他ひ知れば今番親兵衛が消息ふ代四郎が請なきを船ふ
附る衍恐ひ這大功とも償ひなきを欲る之の弟宜く計ひ給へ自今所礼消
息ふ在り這願言ふ今ふ要ふ似れども代四郎が那大功を稟上ふ及ぶ任ふ
悄地ふ之を上ふ表ふ憑ば目萌三は共倡ふ黙頭て開ひ蜑崎主の書翰ふ具ふ載られ
ふれを登て躰て主人の妻と紀二六ふ告別て君所へとぞ帰げる任而大川莊介は紀二六ふ這里ふ留
めて我が伴當ふ宿所ふ来ふければ妙真音音ふ大士ふ譚て莊介ふ来ぬを怪
程ふ既て代四郎が那水陸の一大奇功及照文主僕と親兵衛が當日の挫ふ箇様々と聞ふ危く
又安ふ心有般ふ慰められ憶ば時を移ふ莊介は遽しく照文許ふ来て妙真音音ふ對
面ふ自餘の大士ふ向て料ば那里ふ目萌三が来ぬふ逢て面談ふ事の趣恁々なりと
鮮示せば大家ひとく相欣び開ひ又ふ造化ふ然ば御沙汰の如ふ成ふ上ふ

蛮崎の宅
莊介目蒲
と面談も
てるよのつま
さうすけ
ひとり六

さうすけ
ひとり六

答て別詞に及びける。然しも勇士の因居に詞敵ふるゝ一も紀音音に宿所に退く曳る単節件の首尾を告知せんそ身を起せば妙真も共侶に又七束めと告別て辭て宿所へ退くけり。小程も七犬士に親兵衛代四郎照文主僕の噂をそ。秋の月傾くと覚ぼゆる詩次に小文五郎の宿に寔に人の幸あると幸ゑに人力人智に及ばゝゑを儒者の名けて天と云ふ狂天と自然の義るべ。壁言が那政水孝嗣石亀屋次因太鄭三の如に或武芸或角觝白打泅法何れとも疎闊るべくもあらぬ。左右川橋の上を憶ぎ敵の銃砲に斃れ俱に深淵に陷ゐと雪るの雲も留ぎるに小るふ我猶子親兵衛に文武の才幹膂力も那無に勝れも泅法を知ざれば那海賊の頭領と云へる脩羅五郎に征伏せられて底の水屑に成べくしに其身に不思議に波上に浮出て遂に溺れ且姥雪の封助ありけるその機自然の妙契を迺天授の洪福ゑんとこれ現人も亦に安に大江が這回の消息に目屬に武芸勇力をみづから屑て宇宙に敵ゑ。とあと思ひ誇り徳と今と知り鄭に水路に赴く折大田大川の教諭格言身に深胆に銘ぎとこれ亦是人の及ぶ所みづからそれ非と悔て改るこかさ

ふべ。と誓れば大角膝を拉て然と古の聖人も徳ふるざるこの故に孔子も亦丘や幸ふり過あれば人これを告とこれ又那亜聖ふる顔回に過を改ざるこを過ふと。あも衍のあれば或に又過て改ざるこを過ふと。世人多くその非を飾て改ふこと稀ふれば大江が賢才千萬人に捷れると知ふ足れり然ばあらざると只頗に稱讃れば荘介毛野道節も俱に領て是に就ても孝嗣次因太鄭三の二期の浩命憐むべくと不娯て嗟嘆に堪ざりけり。浩処に小渓目東峰崩三ぶる簡をりく悄地に荘介に報る使价来にければ犬士们相欽びて聚合て駐てその書を見るに鄭に内談の一條と悄地に老館に伝ゑ上て及上耳と伺ひまりに三士の武功を誉さをゆて代四郎がゆへも我が善巧方便の事亜異に理のれば今ちそのゑをゆべ。親兵衛も十一郎も然とこれまぎ知ざれば這回の大功をりく那罪と償んと請るるべ。介るも亦幸ひにその義を別紙に載れば安房殿に本文の注進を披露あて那里の下知に依るゑんその義に小文吾と道節と紀二六とちンと相俱て明日に夙めて稲村へ赴くと豊べ。我も亦使そ。安房殿に談る上自ちこの義に目にふるゑ秘よ。先犬士们に伝へて准

備といそぎせよとある。仰の趣かくの如し。因て書ふてせられる。犬江の注進別紙と共ふ二通を返し遣はす。別紙い披露まゐらゞ是老館の名目を秘まゐらしくあるはけれ七犬弥心あらはして。今ふ創め老侯の慈恩へ佛苦薩ふ勝りあるの。実ふるゝ〻しくと稱て悄然あるのけ。有徒一程ふ荘介い遽すく美書をめ。件の使を還しゝ更ふ一個の奴隷をとして紀二六を召よせて。明日い夙ふ稲村へ俱ゝ行事の趣と洲崎ふ歌めとゞ〻ゝる。奥郡の央船と。今宵稲村へ程近ふ港口へ移して。置くべ。館の名下知あゝ。折便利多為れとて。言送も多く解示せば。紀二六ゝ〻ゝる幼果てのそて洲崎へ赴けり。有徒る折ゝ妙真音音貝へ心ふかる君所の沙汰を什麼と思へば落つゞ二ゝび出て来ふければ犬士们い事徒ゝと老侯の慈恩至妙の便宜と。告ゝふ教ゞ両個の老女れ感涙坐ふ抜むと覚ゑ左ふも右ふも幸ヨゝ〻君の恩恵と俯て思ゝ仰げば高ふ清澄山も。ゝれ〻ゝと忘稱け徒而次の日の暁方ふ道節と小文五吾い出仕の衣裳を整く紀二六を俱ゝ伴賞ゝ。稲村の城ふ赴くふ紀二六を宿望ゝ。更ふ京師へ赴く。照文们と安危と共ふせまくほゝそ請ゝ。道節も小文吾もの忠心を感ゝ。やくと絶の道程を

られ。這日已牌過る時候稲村の城ふ参上て出仕の両家老辰相清澄ふ面謁て苛子崎の旅泊より大江親兵衛蜑崎照文ゞ注進の事の趣並ふ使とてかゝ多ふけ。照文の伴若黨直塚紀二六ゞ情願ま〻漏さゞ具ふ許て。その書を呈覧そけれゞ辰相清澄俱ふ閲て三士の武功高運と只管ふ感て已まゞ是より先ふ義成主今朝も瀧田の老侯より近習小溪目とゝて昨日七犬士の許禀ま〻那注進の条ふ就て這方へ斟酌の計ひ多く宜く下知あゝとゞ内意と示あゝゞ。そのとあゝとゝ多ゝ多ゝ今又最も詳多注進の書と三犬士の許ふ駭嘆て寔ふ姥雲代四郎ゞ水陸両所の一大奇功い思ふ倍る掙紀と。感ゝゆゝと大かゝるゞ既ふて辰相清澄い件の事の趣を義成主ふ申ゝ。その旨と美ゝ。道即道節小文五吾仰のゝと伺る。今番親兵衛十一郎ゞ注進ふゝゝて知召ゝ往る日三河多苛子崎及蕃山也賊難の折他们並ふ姥雲代四郎ゞ武功い比類るゝ。開い必帰國の後ふ賞禄宜く御沙汰あゝ。又十一郎ゞ伴若黨直塚紀二六ゝ主と扶けて賊徒の頭領今純友査勘太を生拘てる条ふ開も具ふ聞食ゞ。開も

異日十一郎が宜く賞もべき者と且紀二六が情願の事。素是忠義の與るべき。御要の義あるべ
き進退他が隨意なべし。又奥郡より隷られる船宰領の事。城主の下知に依るとへども。夾船の
あれば御沙汰に及れも道節小文吾相計ひて賞錢を取せ。かたべその外錢に有司に談して
數のごく受るべし。あの義御前に召よせられて。仰渡さるべけれども。事目今の急務なれば。仰に偽る所
件の如しと。叮寧に示されけり。是より道節小文吾に俱に言葉を禀し退て。有司に徒々と
談ずる方僅下知あり。あれば有司們異議なく財庫より。件の錢を出さで道節小文吾に指示
す。且のやう。那紀二六が路費をば各に賜ふべ。那若黨に取ねとやらん。その金にも共に道節
小文吾に遊與ず。かの二犬士に這有司們が職室に隣る一室に退て。親兵衛と照文へ與は報
翰と隣尾判官の兵頭とを。錦織機馬へ遣もべ。謝書一通を書寫めて。然而直塚紀
二六を召登し。仰の趣を解示して。路費の金子と大江蜑崎們に答る書簡一通を遊與ず。
かの紀二六欣び受戴たるを過分くも思ひ。造化にそひられ小可今番も特更に去向とい

ども既に東人の宅春に告別て罷ぬ。這回の那両個の奴隷とが伴ひて進退自由に任り
べせ。夾船に又ち乘て先三河に赴て。その義を饒しと願へば二犬士領して。共に赤和
郎の隨意せよ。咱們も港口へ赴て。船宰領們に對面せ。卒と躰て身を起して。両三個の伴の
奴隷に錢を馳て。紀二六を招て。件の港口へ赴て。其頭に守屋ありければ。奥郡より隷られる両
個の船宰領を召登して。水路の所役を労ひ。且當館の御下知に。永樂錢若干を賜ふを
宣示す。則両個の船宰領に青蚊各五貫文及舶公と篙工五名に各三貫文。共に二十五貫
文。并に蒼緡に串に滕けを取れ。船宰領們に含笑ながら。額を衝て恩を拜き。欣び涯り
かりけり。登時又道節小文吾。隣尾の兵頭錦織機馬に與る謝書一通を。船宰領に遊與
きそらやう。鄙に大江親兵衛蜑崎十二郎們。その地に賊難の折隣尾殿の武德救尼の援助に
よりて。禍反て福ふるりけるよし。當館聞食て。秦晋今も舊交の不測に虚かぶりしと感し思召
さるゝ況我毋の欣び知るべ。因て錦織生に謝書一通を寄すく欲もの意を宜く偽ねか。又直塚

紀二六る。亦推返し西ふ赴く。主の伴ふ達まく欲を因て亦復便船を三河まぢやんと願ひ。いくぞ二度載るべ。とふと船宰領们ら听て仰あるるい之在処へ罷るぶ今日ても究竟の風るれと聞才笠高工们ら呼ひもへ船を出まふ便宜へ身の暇をゆるべ。と答て舶公と笠高工毎と両三個召よもて這刀祢们が辛苦銭ふ是賜ぬと指示せい大家欽び拜謝して銭を受金て退る程み紀二六る道郎小文吾ふ欽び舒別を告て船宰領们と共侶ふ躰て船中を乗ふ。亦程ふ大山道郎犬田小文吾ふ伴當を招て港口より又稲村の城ふまゐて東荒川西家老ふ仰み従ひ為て相計ひる件の趣固様々々と申え上て退らんとあ程ふ義成主申ひて召よせて對面あり。代四郎が大功親兵衛並ふ照文が高運の事の顛末を尋も具ふ听んと。面談ふ時移り。二大士あの夜ハ主僕俱ふ當城内ふ留られて次の日瀧田へ帰りけ。話分両頭然い又三河國渥美郡奥郡の城主隣尾伊近の判官ハ犬江親兵衛蛍崎照文姥雪代四郎们が武勇の掙ふ。或ハ討捕る或ハ生拘る海賊の頭領海龍王脩羅五郎今純友査勘太及

伊近の隊ふ搦捕る小嘍囉ふ。都て獄舎ふ繋ふ。尚支黨を穿殿金て拷問堅ふ。けれい他们ハ近曽西國四國の舊巣破れて脱れ来ふ。其隊六十餘名の外ふ支黨るる。と首伏ふ。小るふ討捕ると搦捕ると都て五十八名ふ。五六賊の往方知ぎ是ふ伊近下知と又緝捕使と処々へ出て隈もなく渉猟らるふ苛子崎の波打際ふ。揚られる五六個の屍骸ありけ。件の緝捕使ハ検るふ身ふ傷あるも痍るふ。面框九庸るで咸悪相るりけれ。暇兵ふ水死の首を斫て。拷問堅ふ。獄舎ふ繋る衆賊ふ。他们ハ火家ふあるを。と鞫問あるる。那水寛鬼柄杓九郎灘渡破船二们ハ。これをそ。皆海龍王ふ下の小嘍囉ふ。初那勇少年ふ。毅ふ悩されて海へ放下され者毎へ身ふ傷あるい那折ふ品ふ打中まるるん痍るい就中泅法至妙の本事あ。ふ頭領でふ。ふ免れぎて溺れい天晒ふ。ありけんとのひけ。あるそもあの海賊六十餘名數足て逃亡る者るりけ。事分明ふ知れ。るを伊近則有司ふ下知と。査勘太並ふ生拘の衆賊を悉誅戮ふ。脩羅五郎以下の首級と共ふ

苛子崎ゟ梟させて。且その申明牌ゟ海賊餘波ゟ。かゝの如くゟ刑せられゝ今ゟ渡海者ゟ戒べと寫
さて遠近ゟ示あゝ。土民們のゝゝゝ西海東海の船〳〵公篙工們船を這処ゟ寄せて。眼前ゟ
視るいけゝゝ。偖つゝるも是よりて。俱ゟ安堵の思ひを做して苛子崎ゟ碇を宿を泊船漸次ゟ又
くゝゝゝ。當郡の民這濱邊ゟ家を倣り店を開く客店あり酒肆あり。經紀児並て這里ゟ
聚合て。敏系昌せぎとの者ゝ。昔ゟ易らぎゝゝ領主隣尾氏欽びてある地方の福也縁故を
推きとゝゝ那里見の三男士大江蛍崎蛟雪們ゞ逸早く海賊の頭領を或ゝ首斬り或ゝ生拘
アとれゞゝ衆賊越ゟその根を断ぬ有徳れゞ那大功武德を後世ゟ貽さんとて。當年五山の学僧の
渥美の某甲院を流寓て在りけるゟ課て剿盗の碑銘を為せ最大ゝゝ石ゟ勒して。苛子崎ゟ
建ゟけゝ有徳而百年許歴ゝ程ゟ有一年洪波ゟ打倒されて碑海ゟ落没ゝより入みゝ惜ゝ
ゝとゝ云ゝ。是後の話と且説かの日安房の稲村近江港口より直塚紀二六を復載く既ゟ帰
帆ゟ既ゟ賢びゝ奥郡の夾船ゝ這回も波上ゝと安らゝゝけれ。両三日の程ゟて。舊浦邊ゟかゝ。

登時件の船宰領們ゝ紀二六を伴て奥郡の城内ゝ。當家の兵頭錦織機馬の宿所ゟ赴く。
安房より帰着のゝと朝早大山道節犬田小文五ゝ連署の謝書を呈閲ゝ。語次ゟ又ゝ
ゟ。小可們那里より船とかゝとゝゝ宰領並ゟ船〳〵公篙工們ゟ永樂
銭二十五貫文と賜りそゝ紀と報れゞ紀二六も亦情願ゟより更ゟ浪速ゟゝゝく欲して又便船
ゝて来ゝゝと這地ゝゝ浪速船ゟ附て那地ゟ届らんと思ゟ事情を詳ゟ解く具ゟ告て。大
士們ゝ感謝の口状箇様々々と演ゝゝ機馬ゝ熟ゝち听て。感佩特ゟ浅ゝ。紀二六ゝ權
且留めて。造即主君判官ゟ件のゝと守ゝ上ゟ伊近主欽びて里見の君臣恁まゟ我ゟ厚か
るゝ本意ゟ稱ゝ。件の直塚紀二六ゝ主と守ゝ照文と封助て査勘太と生拘ゝる功あるゝ
れゞ浪速へ赴く水路ゟ宜く計ゝらせよと叮寧ゟ課ゝゝゝ機馬ゝ唯々とゝゝる果て退ゝて
紀二六ゟ君命の趣を告知せゝゝゝも宿所ゟ留め置て浦邊ゟ徇て便船と尋ゝゟ尼之崎へ赴
く海艦あり。順風ゟゝて詰朝發船せと守ゝ〳〵紀二六ゝゝの回も去向の便ゝゝ〳〵錦織の奴

隷ふ送られて件の浦邊ふ赴く折。先機馬ふうち向ひて城主の洪恩を拜謝し別を告て退りてその船ふ
うち乗るふ城主の下知ある行客ども皆船ふ公笘高工さん同舫児さん皆紀二六を敬ひて船中毫ふ費用と
被ち現紀二六を主とおもふ誠心あれば海神の冥慮ふ稱ひけん猛風劇波の憂いふ遭ずして約莫一旬
有餘の程ふその船ふ乗る津國ふ尼之崎ふ果てけり。休題再説犬江親兵衛蜑崎照文ども渡
海の船ふ僦ふ苛子崎を出ふ日毎ふ順風ふ乗じて水路の滝留稀ふて七月の秋八月の中旬ふ浪速ふ届
るとなして猶權且船ふ在り。先代四郎を遣して京師の光景を探ふ曩ふ大飼現八解示ふ
崖略を最詳ふ知れる。その事の顛末を親兵衛熟ら聞ふ前將軍義政公ふ辭職の後も風
流の驕奢ふ錢を抛ち財を竭して民の怨訴を
屑とも思ひ給ぬ僅ふ五年の間ふ九ケ度の大礼大饗を行れける。就中八幡春日両所の御社
参伊勢御参宮花の御幸河原の猿樂ども遊興の費も亦多くて是ふ民の歎ふ花の御
所の大造営ふ土木の工を起されしより萬民の費いくばくぞ。珠玉を磨ち金銀を鏤めて畫の價ふ

六万緡ふ錢六千貫文ふ当れり。これを
換一貫文ふ小判一
両ふ換る田舎古法ふ拠れば金
六千両ふ当べ下の二
万錢ふ二千
貫文ふ当れ
亦余りて
二千両當
れり尾と障
ふの優ふ
らの如き
過ぎ者ヨ
費の甚ふ
ぬを知るふ
足れり

慮六萬緡及義政の乳母と御臺所の乳與ふ高倉の御所を造るとあり。腰障子一間の價二
萬錢。その嚴美壯觀萬民の財貨を絞て飽まで集て也。餘の是を
知るべし。然ふ義政の不德かのごとく只奢侈を旨として反て政事ふ荒ぬ。威權漸管
領三職七頭ふ推移りて宗全勝元の内乱起れり。是を応仁の擾乱とふその狹危の根本ふ初義
政ふ子なくして御舎弟今出川殿義視ふ遷俗と萬ゆまわせて養嗣ふ。兵言約ふ
後御臺所の乳腹ふ義尚誕生まし。義政の乳を始ふ似ざりけり。況御臺所の乳歎ふ方
なりしかば。有一日事の叙次ふ悄地ふ山名宗全ふ憑せ給ふ。宗全異議ふ義ふ
今出川殿と退け。必ず幼君を立まるべしと稟ふけり。柳山名持豊入道宗全ふ往る嘉吉の
逆乱ふ赤松満祐を討滅ふる大功ふ。但馬播磨備後三ヶ國を領ふ。且管領細河勝元
年少ふ有ふ。斯波細河畠山の上ふ出ず。又勝元ふ初ふ児子なりしかの故ふ宗全ふ子と艱難
なるふ実子政元生れ。養子ふ強て退け。竟ふ僧ふ成ければ宗全痛くその義を怨ふ勝元と

○東京堂藏

不和ありぬよの比人斯波畠山両管領も家督爭ひあるあるを各墻を閱ぜり初畠山政長と勝元貝と肩をならべ示全も方人ありしが勝元と不和ならんとして宗全は又畠山義就を荷擔あるべいなれを立んとせし又斯波の爭ひも義政公の沙汰として義敏を退け義廉を立ぬ此起もとより程勝元宗全が御臺所が憑れまゐらせて幼君義尚と立もらんと欲するに依て勝元は拳出川殿義政の弟義視を立んとせし左右する程畠山政長と義就と鬪戰都下に起りしより勝元も亦ヨリ勢をもて政長を幇助し宗全は又義就を助せ遂に大軍を起すに及ぶ貝と肩の人々東西に立分れ鬪戰已に起りしが洛中這兵燹に焼亡れて萬民四方に離散せり這兵乱初め義就政長が家督爭ひの事起るを遂に勝元宗全の爭ひの端を發せり又義視義尚叔姪の爭ひをなすに有德れば義政約に背ていなば義視を退け義尚を立ん思食る僻事のまゝ斯波義敏も養嗣を後に実子松王丸生れ初の志を轉じ又勝元も亦白田山も養子を立る後に実子出来しよの俱にその家乱もとよりの然の將軍家も三管領も皆是世嗣の

あに依れり矧亦山名宗全伊勢貞親が時の權勢に乗て或人の家を技け或に傾けしる僻心是も亦相似たり宜に人の世嗣だる大事なるものいかゞ昔北條義時が頼朝の後を絶しを近く南北両朝の爭ひも皆是世嗣の事起るを天の下の大乱に做れりけるとて或は学究は咳たるき然に心に元年に這大乱起りしより七稔に及ぶて文明五年に宗全勝元ともに續て世を去りけれども猶その無に諸國を戰ひ休まず前後十一ケ年とかの文明九年に宗全勝元の餘黨戰ひ疲れて壁に野燎のなごりに滅てなごりに做まるが如く干戈を廢く理りて萬民安堵の思ひに做ひ是より先に文明五年冬十二月義尚童年九歲を征夷將軍正五位下左中將に做りぬ政長畠山政元細川河内管領に義視に美濃へ赴て土岐成頼と憑を在りけり是より爭ひの路絶て世間靜悄なるのみ諸國の大名ヨリ敬て又將軍の命令に從ひ各力征割据をして世に戰ひを做りける徳而文明十一年冬十一月義尚十五歲を判始評定始あり是より先に身に為政ぬしに義政に東山なる東求堂に御座しをきく茶事に耽りぬ先

ど度々懲りぬで古器古物を弄び奇石名花を多く良人北山なる金閣を擬へて茲に銀閣を造りぬ。四十四歳の春賀茂の河原に貧しけれど財用の乏しき窮乏を忍び武功ある諸士に賞賜する由を。その故に刀剣の價を定め所を人々に賜りそのそ加恩の地に代られけり是よりして義政と東山殿と稱するその生涯の過奢放逸かくの如くなりしかども尚幸なるの義尚将軍少年にして賢良の少えあり弓馬に家業なれば学問も十分に文学を好嗜ましめ書法も習ひて拙からず是をもて小槻宿禰雅久に論語を講ぜしめその長子を孚ぶ又ト部美保に日本紀を講ぜしめ尚古の思ひ浅からぬ。

年僅に十二なりける秋七月一條の太閤に請ぜして樵談治要を撰ませて政事の資助に志ゆけり然れど折々詩歌の會を興行あり又室町花の御所の庭前に大追物を興ずるも屢なりたりと。その君治世久しくして足利家の中興疑ひなるべしと世人思ひなれども惜むべし乱世に生れぬ。将軍のそれもまた且又父東山殿の年来本者侵の費まで勝元宗全毎の兵乱十一ヶ年に及び間に公家武家倶に衰へて京師の像く

なりぬ。當日飯尾彦六左衛門が歌に。

汝やあるみやこの野辺遠の舞雪雀のなるはけて落る涙をと詠るとなり。然りそと想像ひぬべし。有係れば朝廷の御料さへ年来剛毫あの摂家槐門と稱せども困窮至極なりぬ。その時勤王忠義の士毎に錢財を調ぶ必例外の勸賞あり。所願ある者願ひ稟さば勅許疑ひなきぬべしとの世の風聲と代四郎詳に探り聞く浪速の浦かの来り然而件の事の顛末を親兵衛と照文に其に報ずと半响許親兵衛これをうち聞て小らぬ事成るべし。今管領の威福あるに孰るべき知るべきやと問へば代四郎然ンに政元主は故管領勝元主の子なるとして亡父の遺福より第一の權臣に願事その人に依らざれば成るとなるべしと人みな云ふ又畠山政長主は勝元主の女婿なるに応仁以来の兵乱に那邦助を得ず竟に管領に補せられ權威政元主に及ぶべもなしと同席に列なる門人にも異なるべきなりと沿あるべきとなるべんと。兵衛點頭て然び京師に七八箇の長松に二十個許の夫役に早くその餘の夫役と十個の雇兵に代四郎と倶に船に留めて。

尚もヨカロ貢ぶ歪の守衛とん。却次の日の早天より。親兵衛と照文八件の長櫃と舁る夫役们を先ホ立ン。各伴當とわて京師ホ赴ク管領政元の邸ホ伺候して。その家の家宰ろけ。香西復六ホ就て来意ヲ演且主君義成の呈書と白銀五百両と土宜幾種。都て目録と共ホ遞與ーホければ復六異議ろく受合て退て主君政元ホ披露ン姑且して又出て来て親兵衛ふち向ひて里見殿の御書並ホ寡君左京兆政元ヲ贈ら来され件々ヲ。隨即披露仕のれ。異日將軍家(言上ホ及ぶべ。旅亭ホ退りて又沙汰ヲ俟ベ。と命せられの旨。抑旅舍ハ那里ぞや。と問ヲ親兵衛うち听て安房より水路ヲ来ホければ船ハ歇て浪速の浦ホ在りのまゞ旅亭ハひつぞとの答ホ復六領ヲ。あらんべ咱们宴内ヲ志べ。箇様々々の処ホ空九竟の客店ホ。調貢の貨財ヲ委ねべければ是ヲ。進退ーヲ。と謀て木牌ヲ遞與セ。親兵衛ハ照文と共保。欽ビヲ演辭ー去て躰て畠山政長の邸ホ赴ク。又来意ヲ告て東西を進らるゝと都て始ホ異ろ。有徳而親兵衛ハ香西復六の指揮ホ依ら。森頭ホ歇店ヲ定め。その註朝両二個の伴當と夫役ヲ浪速津ろ船ホ選ンとりて代四郎ホ

告ーゾ。代四郎欽ビて准備ン。又其次の早天ヲ貢獻の韓櫃幾箇と巻絹十宜ろンどと居ヲの夫役ホ早ク。陸續として京師へ赴くホ宰領の雑色ろ十個の輕兵ろ。加旃管領の木牌あれば人ヲ路を讓らぬヲ。是ようて浪速の浦ろ歇船ホ西二個の奴隷と。船公笛吉ヲ。オホ残ー置れけ。徳而焼雪代四郎ハ連ろホ路次ヲいそゞて下晡ホ親兵衛の旅宿ホ来ホければ親兵衛ハ照文と俱ホ端近く出迎へて貢献の韓櫃その餘の東西も感貫坐席の上座ホ舁入ろ積並て。日夜の小心も用ヲ。徳て又親兵衛。代四郎とりて香西の宿呼へ使ホ遣て。宴内ホ依て。森ホ旅宿と定やるよりと浪速の船より東西悉く含来て。志趣を告て欽ビの心ヲろホ贄代の黄白一裏と贈りて異日官府の沙汰ろん折のるまでも。と叮嚀ホ溝心ヲけ。ホ程ホ管領左京大夫細河政元。次の日室町花の御所ホ出仕て左衛門督畠山政長ホ里見安房守義成の使者大江親兵衛仁並ホ蜜濤十一郎照文と喚做ス者们ヲ。安房より昨日到来してまゐらせる書劄の趣箇様箇様と解示ー。且その書と。ヲ共保ホ將軍義尚公ホ呈えもげ。ホい義尚件の呈書と。ヲ。先

西管領の意見と問ふに政元答禀まうす義成東隅の公藩屏として敢千里の遠路を辭せず貢進の礼恭まで不淳なる心信の致す所願ひ禀を姓氏の義を奏聞あらんと萬禀せば領ぜず然ばその趣を東山殿へ禀上てん旨と伺ふべしその義政尤衛門督あるべしと仰と政長義そ退て東山へ赴て義政公に里見の一條箇様々々と申上て其書を御覽に入れば義政含笑て商ん兵乱の後財用足らず公武倶に不如意なる料も帮助と為る報ひなくあるべし例の有無姑置て奏聞勿論なるべしと他事なく仰含める政長義尚公に恭と件の返命を禀まして再議に及ぶべからずと即便里見義成の奏請の事の顛末その家臣八個の犬某の氏と金碗と更め賜らんと願ひなすとて具に奏聞せられけり是に於て當朝の諸司百寮事の可否を詮議あり或らは古より氏と改んと請なる者勅許の例あるといへども他の里見の陪臣へ賜ふべきやと議するあり或は又他の陪臣へとの義成の父義実の外任と申あれば必由緒ある兵毋ゑむ年々御領國を治て朝政行事廢れんとせしの義勅許なりせば所の貢物とも退けられん歟と議まる関白殿聞ひて時に盛衰あり事に用捨あり八犬陪臣ゑとの他の願ひ申すとも成請禀を將軍奏聞せられ然れば勅許あるとも氏と陪臣に賜ふべきは義成に賜るを義成受なりて八犬士に授るとの事に條理あり超級諂上の傍議なるべしと仰諭まあり衆議遂に一決して主上に奏聞あなり躰て義尚將軍に勅詔あり宣旨を成下されける書ふべしく

文明十五年八月二十五日宣旨

右肩に細書して上卿矢木原□綱言

前治部大輔源義實朝臣外任安房守兼上總介源義成朝臣家臣大江親兵衛仁犬塚信乃成孝犬山道節忠與犬阪毛野胤智犬川莊介義任犬村大角礼儀犬飼現八信道犬田小文吾悌順右八箇勇士依義成朝臣之奉仕宜為金碗氏因賜姓宿禰　藏人右少辨藤原朝臣秋豊　奉

とあるの義秋豊朝臣より室町殿へ執達禀まあるけり恁而又その次日に政元奉て親兵衛と照文を邸へ召よせて對面あり姓氏の既に勅許の御沙汰ありの明日両管領東嶽へ召させる依牌時候参上して見参に入るべきの餘あるに恁なんぞ香西復六談

花の御所
仁照文
義尚公
拜見也

べ。と宣示さるその後又別席にて香西復六面談して。営中の日本日比衣裳進退など。詳に指南をして首尾最好とぞ祝しける。偖而二十七日の朝夙に大江親兵衛蛮崎照文と倶に公服を整へて安房より奥をる方の日晋上の韓椶と居ヨの夫役に帥ゝ。姥雪代四郎以下の伴当と十個の暇兵宰領の雑色と相俱して花の御所へ赴くに夫役は都て縹繻白く龍騰勝草と染做る一様の半臂にて取漫語せも齊々として徐ろく光景田舎児出稀へと看者歩を住めける。偖而親兵衛と照文は花の御所に入る四脚門より找ち入りて参上のうと稟ればら當番の青侍遠侍へ案内をして各對面をる程に既に時分ふるゝ将軍義尚公正聽に出すて。儲の裃児に若をへ両管領政元政長と首をして有司は御前をる左右二側に雲雑列。近習は後に従ひ侍する。佩刀及習笠簾の役あり登時親兵衛と照文は亘司へ召出さる烏帽子の櫬緒副をる素襖の神と宣命して。迫に拜見あられば有司は安房より晋上の目録を披露をなす。政元則仰を伺へ。宣上旨と御教書とを親兵衛に渡し賜り。當今（後土御門天皇）並に三宮へ貢献の件々は明日参内をべ。献

るべ。と仰らるゝの折親兵衛は進止亮を礼儀を失はず熟くる者の如くをると當席に有司感心して嵐青々
をる少年をるゝ大事の使に遣られは必是覚ある功者をるべ。と思ふ所ありけり偖而見参の式果して親
兵衛は晋上の件々を都て有司に相渡して退て照文と共倨に東山殿へ詣て。又王君晋上の東西に進も
ると前に同じ。且見参の式の餘のるも宣命殿に異をるはれば言畧て具にせばその翌朝親兵衛は政元に
倶せられて参内をて階下に朝恩を拜をる寔に宣加あるるあるを冒へとはいまり既にして拜を訖て
朝貢の件々を收斂所へ渡せて退出て照文と共倨に拠録槐門に帰をとるく。参上の君命を舒て東
の西とまわるをると差わり然而方の帰路に両管領の邸に赴く恩を謝して帰国の暇を賜らと思ひ禍
薫墻の下に起りて政元敢其笑を飲さび單親兵衛をのゝ抑留めて久しくるまで還さりける故をの
らの甚麼ぞや分教あり。雲長在厄豈忘漢。千里獨行虚五關。五方の仇いのるるかり國の
虎と搏ゆり日本まゝを走。這詩歌の意を知まく欲せば卷を更て下の回に解分ると聽ねかし。

南總里見八犬傳第九輯卷二十三終

○曲亭翁編演里見八犬傳第九輯下帙中画工筆畊剞劂目次

出像畫工　柳川重信

淨書筆工　谷金川

彫工　横田守
　　森田某
　　櫻木藤吉

巻十九廿一
巻二十廿三
巻二十二

南總里見八犬傳　第一輯より第九輯下帙の上まで大九六十二巻年々刊行さるとゝ雖も下帙の中五巻六の度出板すれども第百三十六回より下の本稿の巻數のまだ詳ならざれども五六巻ゆゑ結局大團圓に至るべし　來戌冬月發販遅滞なし

近世説美少年録　第一輯より三輯まで曩に刊行し　第四輯五輯も各五巻八犬傳結局の後捷ぐ出板遠からぬ

開巻驚奇俠客傳　第一集より第四集まで二十巻先年既に刊行ありし第五集四十回以下八犬傳團圓の後作者必稿を續ぐ　○第五集五巻近刻

莊蝶翁再遊外紀　夢想兵衛蝴蝶物語の一書前後二編今に世行ふ所因て曲亭翁ふたゝび又その編を刊布せまく欲す　○第一集五巻近刻

著作堂一夕話　その書翁の隨筆なれども世俗の鮮し易からぬ所あるを因て通俗を旨とせんと必稗益ありて係べし　○大本五巻近刻

右曲亭翁新舊著編の目各目録皆本房の藏板なるゆゑ諸家の餘ものヨメカラズ　江戸書林　文溪堂敬誌

玄同放言第三集　初集二輯共に大本六冊先年両度に賣出し今以ヨマく世に行れし第三集大本三冊近刻九十二冊ゆゑ全部ゑるべし

玄同八曲亭翁の別号にその板客歳本房に購得て藏板ゆゑ製本已前より格別念入れ速に賣出し処初度にもらさぬ　○家傳神女湯　○精製奇應丸　○熊胆黒丸子　○婦人の宝の妙薬　○仙女香

○御茶わかす仙女香一包四十八文　黒油美玄香一包四十八文　江戸京橋南傳馬町三丁目程坂本氏

天保九年戊戌春正月吉日發行

大阪心齋橋筋博勞町　河内屋長兵衛

同所　河内屋茂兵衛

江戸大傳馬町二町目　丁子屋平兵衛板

書行